長野市の埋蔵文化財第18集

塩崎遺跡群Ⅳ

―― 市道松節―小田井神社地点遺跡 ――

1986・3

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

第III墓壙群

21号木棺墓出土土器

序

雪国、山国と私どもの郷土長野は広く理解され、自然の風土に恵まれた理想郷としての印象を日本中の人々に与えていることは、長野市民の誇りであり、これを子孫にまで残していかなければならない義務を負っています。ところが人々の生活、特に経済活動の規模が拡大し、複雑になるにつれて、物と人との移動の範囲が、国内はもとより世界的な連なりをもつようになりました。　したがって、これに対応できる交通網、特に高速交通網の整備は、市民生活に深い関係をもつことになりました。

長野県内にあっては、早くから高速道路及び新幹線の敷設についての計画をたて、この世界的な傾向の中での人々の生活の安定化をはかって来たところでした。その中で、昭和60年度中には中央自動車道西宮線から分岐した長野線の一部が開通したり、国鉄長野駅の新幹線駅に関する駅舎の改築工事が着工されるにいたったことは喜びにたえません。

このような状況下にあって、地域、特に市民の生活の場の環境を守り、しかも新しい時代の交通に対応できる施策を実行することは、市が率先して進めなければならない重要な課題です。それは、生産の場である農地を守り、生活の場である住宅地を守りつつ、交通を円滑にすることであり、大変な事業であることは市民周知の事実であります。この難問を解決するために進めているのが、各地区で進められている生活道路の改良と、高速交通網に関連して、将来の交通像に合わせた道路の整備であります。

今回、地方改善施設整備事業の一環として実施されました、市道越－上町線の拡幅改良工事は長い間の地元の御要望がかない竣工しました。この地域が今から2000年以上も昔から人々の生活の場として開け、現代までの長い時代の人々の生活の跡が大地の中に残されている遺跡であり、この貴重な埋蔵文化財を保護していくことは、行政に課せられた義務であることは十分に承知していたところですが、この地域で生活している人々の生活を守るため、最少限度の措置として、幅員6m、延長約700mの道路下の埋蔵文化財の発掘調査を実施し、地元に最大限の効果を残すべく対処したところです。したがって、将来高速交通網が完成して今よりも多くの交通量が計られるようになっても地域の幹線として広く活用されることを期待してやみません。

この埋蔵文化財の学術調査に当たられた長野市教育委員会からは、その調査で得られた数多くの資料の中には、日本の古代を解明するために貴重な新事実を確認できたことや先人がこの地域でくり広げた、自然とのかかわりの深さを物語る多くの資料を得られたとの報告を受けています。そして、この緊急学術調査を実施するために、地元の市民の熱烈な御協力を得、短期間での調査完了にこぎつけた旨の報告も受けています。地域を守り、地域を育てようとする市民の熱意が作り上げた事業と高く評価しているところです。

今度刊行のはこびとなりました、この調査報告書が、そこにたずさわった多くの関係者の御協力の結果として発表されますが、短期間に上梓しなければならない事情があり、今後の斯界の御指導を賜わらなければならないと拝されます。事情御理解のうえ御高覧賜りますよう御願いいたします。

昭和61年3月20日

長野市長　塚田　佐

序

最近、信濃国の県歌が他郷で生活している信州人の間で多く歌われ、明治生まれから昭和生まれの県民だれもが知っている唯一の県歌をもった長野県人には、教育県長野の評判とともに全国から羨望の目を注がれています。それは単に歌を知っているというに止まらず、その中に語られる信州の自然の豊かさが、日本人の心のふるさととしての位置づけにつながっているためと思われます。

その冒頭に歌われる“しなののくに”の呼び名がいつの時代から、なぜそのように呼ばれるようになったかは、多くの歴史家たちや文学者たちによって研究されてきたところでしたが、最近の考古学の研究の中から新しい考え方が示されたことは意味深いことです。それは、シナノの国と呼ばれるようになる弥生時代後期文化研究の成果ともいえます。西歴3世紀当時のこの地方は千曲川の肥沃な流域に発達した弥生文化、特に箱清水式土器に代表される華麗な文化をもった農耕人の理想郷だったことに注目したのでした。この文化は甲武信岳に源流をもった千曲川が、山合いから流れ出る小川の水を集め、曲りくねりながら長野盆地までたどりつく、その地域全般に栄えた文化で、その影響は山を越え関東平野にまで及んだ強力な文化だったことから、そこに語源を求めたのでした。それは、しなしなと曲りくねった川に沿って栄えた国、そこからシナノの国の呼称となったと言われています。

その呼称の語源についての研究はさらに展開されていくことを期待するとして、このシナノの国の箱清水式土器を使用した人々の地域的中心は、長野盆地に流れ出した千曲川の両岸に発達した自然堤防上のムラ、更級・埴科の地だと言われ、それを裏付ける多くの資料が報告されています。長野市内にあっては、千曲川左岸に広がる塩崎遺跡群が、シナノの国誕生当時の文化の中心地だったことは長年にわたる先学の調査研究の結果とも符号します。

今回、地方改善施設整備事業として実施された市道越－上町線の道路拡幅整備は、長年地域の願望のもとに推進されましたが、そのため緊急発掘調査も、地域の老若男女全般の御協力の下に進められた大学術調査でした。

塩崎地区は、大正時代から表土の中から出土する土器片を採集し続け、一大遺跡群であることを説き続けた先輩はじめ、遺跡の重要性を認識された地域全体の人々に保護されてきた地区で、土木事業が実施されるごとに学術調査に期待し、協力されて来た先進地域でした。今回もその期待をになっての学術調査を前提としての事業でした。

調査区は、千曲川左岸の塩崎自然堤防の一番上流点から出発する区域で、全域が広大な遺跡の中に、幅員5mにも及ぶ試掘坑を設置するような調査となりました。調査のために率先して力を貸してくださった地元の皆さんは、その積極性はもとより、遺跡の重要性を十分に理解されての御協力で、きめ細かな結果が得られました。

遺跡の状況は、何度にも及ぶ千曲川の洪水にもめげず、家を守り村を守って来た様子を物語るような跡もあり、さらに、2000年も以前から西日本と直接かかわりのあったことを確認できる資料も多く得られたと報告を受けています。この事業の性格上短期間に報告をしなければならないため、多くの先学の意見を求め、検討しなければならない問題点の解明は次の機会に譲らざるを得ませんが、東日本の弥生文化究明のために重要な遺跡であるとともに、それに続くこの地方の文化を知る上で大切な遺跡であることを再確認できた学術調査となりました。

御協力いただいた地元関係者の皆さんはじめ、特に緊急学術調査の機会を与えて下さった当事者の御理解に深く感謝申し上げます。また、この結果を広く応用され、日本古代史解明のために生かされることを希望します。

昭和61年3月20日

長野市教育委員会教育長
長野市遺跡調査会会長　奥村　秀雄

例　　言

1．　本書は、長野市と長野市教育委員会との契約にもとづいて、市教育委員会が設置した長野市遺跡調査会が組織する遺跡調査団によって行われた地方改善施設整備事業（市道越－上町線道路改良）地内における埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．　本書は調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。

そのため、遺跡・遺構・遺物等の考察は、長野市立博物館紀要等に報告する予定である。

3．　本調査にあたり、調査会等に記載した期成同盟会・塩崎地区各区長・隣接する地主の皆様、市役所各主管課から多大な援助をいただいた。

4．　本書の刊行にあたり、木棺墓及びそこから出土した人骨の取扱い・鑑定を西沢寿晃（信州大学医学部）先生に依頼し、また弥生時代前期から中期の土器の選別を、大参義一（信州大学人文学部）・神村透（福島中学校）・笹沢浩（長野県史刊行会）の各先生にお願いした。ご多用の折、前記した先生方の指導にたいし感謝の意に絶えない。ただ本書の解説等についての責任は、すべて調査団にある。

5．　遺構図は、木棺墓等の詳細を有する図にたいしては、水糸配線による1/10で、K・L地区溝址とその関連遺構は1/40で、他の住居址等の基礎図は1/20に縮図した平板測量によった。全体遺構分布図は1/200による。本書では、これらをもとに詳細図を1/3、遺構図を1/4を基本として作図してある。また図中ＳＢ（住居址）・ＳＫ（土壙又はピット等）・ＳＤ（溝址）の略号をもちいた。

6．　土器等遺物については、玉類等を実寸とする他、土器には1/3・1/4・1/8がある。土器拓本・石器については、1/3を基本とするが、図面上の尺度を参考にされたい。

7．　遺構写真については35㎜広角レンズを用いた任意な位置からのもので、その形態は実測図によっていただきたい。本文中の写真図の中での↔印は近隣遺構の存在を示している。

8．　本書にかかわる写真分担は、主として矢口・山口（純）・山口（明）によものである。遺物等の整理に係わる業務は、下記のとおり調査団全員の協力によって行った。

9．　執筆については、文末に記した。

10．　調査によって得られた諸資料は、個人記録を除き、長野市立博物館で保管している。

11．　本書の印刷業務は長野市教育委員会（社会教育課）が担当した。

（付）［編集］矢口［遺物写真］山口（明）［遺構実測図］矢口（栄）・奈須野・出河・安室・唐沢・田中・中殿・横山［遺物実測・トレース］矢口・矢口（栄）・奈須野・出河・千野［土器復元］山口（純）［土器拓本及び製図等］矢口（栄）・奈須野・千野・田中・横山・青木・出河

本文目次

序
第１章　調査の経過……1
　第１節　分布調査……1
　第２節　調査日誌……3
　第３節　調査会・調査団の編成……6
第II章　調査地周辺の環境……7
　第１節　地理的環境……7
　第２節　考古学的環境……9
第III章　遺構と遺物……11
　第１節　遺構の分布状況……11
　第２節　弥生時代中期の遺構と遺物……17
　第３節　弥生時代後期前半の遺構と遺物……107
　第４節　弥生時代後期後半の遺構と遺物……118
　第５節　古墳時代前半の遺構と遺物……171
　第６節　古墳時代後半の遺構と遺物……186
　第７節　奈良時代の遺構と遺物……211
　第８節　平安時代・それ以降の遺構と遺物……221
　第９節　時期不明の遺構と遺物……240
第IV章　まとめ……242

図版目次

第１図版　186号・189号・120号住居址、土壙出土土器
第２図版　２号・４号・６号・９号・19号・21号木棺墓出土土器
第３図版　21号木棺墓出土土器
第４図版　21号木棺墓、土壙57出土土器
第５図版　16号木棺墓、祭祀遺構出土土器
第６図版　124号・160号・126号・84号・176号・203号・43号住居址、土壙６、その他出土土器
第７図版　109号住居址出土土器
第８図版　109号・６号・８号・11号・12号・13号・14号・15号住居址出土土器
第９図版　15号・16号・17号・22号・23号・24号・40号住居址出土土器
第10図版　43号・71号・75号・77号住居址出土土器、合口壺棺
第11図版　79号・84号・91号・96号・124号・147号・148号・157号・160号住居址出土土器
第12図版　179号・150号・０号・２号住居址、土壙96・７・107、ファイアーピット３、１号・９号・10号・19号溝址出土土器
第13図版　９号・14号・20号・52号住居址出土土器

第 14 図版　53 号・124 号・53 号・46 号・44 号・136 号住居址、1 号溝址、その他出土土器
第 15 図版　136 号・182 号・184 号住居址、その他出土土器
第 16 図版　140 号・16 号・202号住居址、土壙 27 出土土器
第 17 図版　75 号・97 号・104 号・120 号・135 号・137 号・171 号・173 号・188 号・190 号　住居址、その他出土土器
第 18 図版　内行花文鏡・土偶・土錘・紡錘車・円板・石棒・不明土製品
第 19 図版　2 号・6 号・16 号・18 号・21 号木棺墓、合口壺棺、その他出土玉類
第 20 図版　磨製片刃石斧・磨製石鏃・打製石鏃
第 21 図版　打製石斧・磨製片刃石斧・敲打器・太形蛤刃石斧
第 22 図版　磨製石包丁・同未製品・横刃石器
第 23 図版　凹石・環状石器・磨石・敲打器
第 24 図版　磨石・砥石・98 号住居址出土自然石
第 25 図版　調査参加者

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　分布調査

この項は、昭和60年2月25日付をもって、長野市遺跡調査会が長野市教育委員会・長野市に提出した「長野市塩崎遺跡群－伊勢宮・中条・松節遺跡－埋蔵文化財確認調査概要書」を要約して記載する。

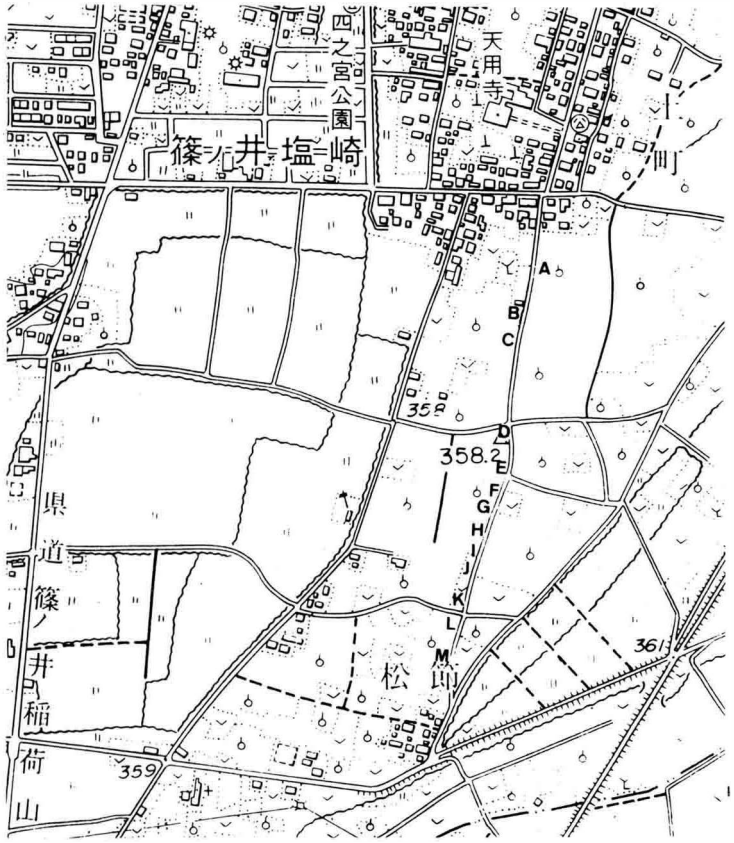
1調査地　長野市篠ノ井塩崎伊勢宮・中条・松節・一本木

2調査の目的　道路拡幅に伴い、破壊が予想される埋蔵文化財について、その保護をはかるため、試掘を実施し、遺跡の規模・内容を確認し、記録保存のための発掘調査に備える。施工対象延長720m。

3調査年月日　昭和60年2月21日・22日

4調査方法　施工予定地内の任意の地点に、1.5m四方の試掘坑を掘削する。天地返し等により攪乱を受けた耕作土・攪乱を受けていない遺物包含層・遺物を包含しない自然層の深さを記録する。住居址等の遺構が確認された場合は、その掘り込みを部分的に検出し、深さを記録する。遺物等は、最小限の採取にとどめ、本調査に備える。

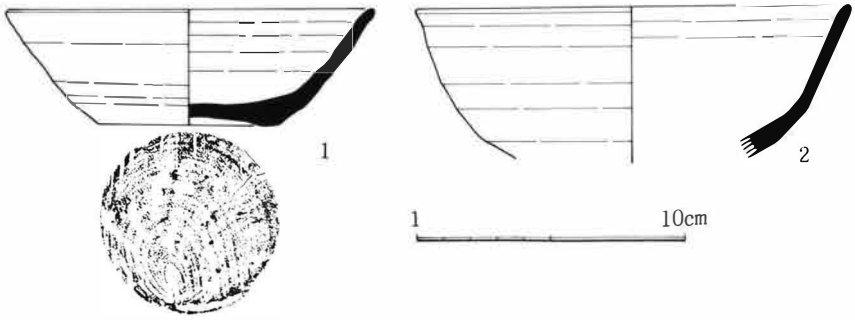
5調査結果、計13ケ所の試掘坑を掘削した結果、別（下）表のとおりの成果を得た。試掘坑中、住居址等の遺構が検出されなかった地点は2ケ所に過ぎず、確実に住居址として把握されたものは6ケ所に及んだ。調査地全域に存在する遺構は、数百ケ所にのぼり、住居址だけでも100軒を下らないことは確実と思われる。遺構が掘り込まれている自然層は、予想より浅い位置にあり、地表下1m内外を測る。工事による掘削が最低90cmに及ぶものもあるため、完全な記録保存が望まれ、全面発掘が必要とされる。記録保存の発掘調査に際しては(略)長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センターの方針を尊重し、それに準じた調査計画及び体制の整備に留意する必要がある。（以下略）　　（青木和明）



Ⅰ－1　分布調査試掘坑

調査結果一覧表

試掘坑No.	耕作土深さ(cm)	遺構有・無	遺構名称	遺構深さ(cm)	自然層深さ(cm)	備考
A	90	有	住居址	140		弥生時代
B	80	有	?	130		
C	50	有	?	120		弥生時代
D	70	有	住居址	100	110	平安時代
E	70	無			90	
F	70	有	住居址	120		弥生時代
G	60	有	?	140	100	
H	70	有	住居址	110		弥生時代
I	100	有	?	130		平安時代
J	90	無			110	
K	90	有	住居址	170		弥生時代
L	90	有	住居址	110		古墳時代
M	80	有	?	150		古墳時代

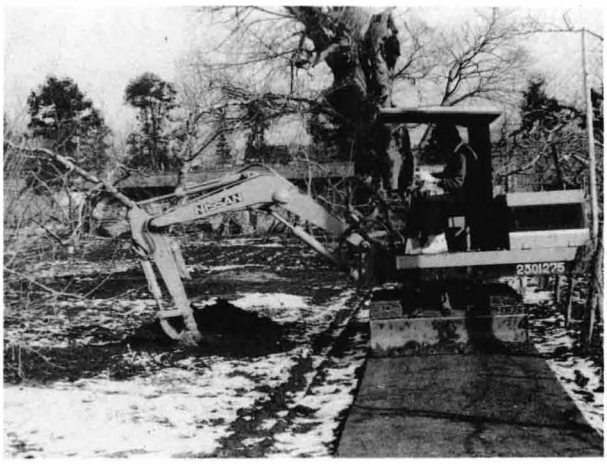


1．F地点出土。須恵器。灰青色。口径13.6㎝・底径6.6㎝・器高4.7㎝。

2．B地点出土。土師器。内面ミガキ。口径16.3㎝。

Ⅰ－2　分布調査出土遺物

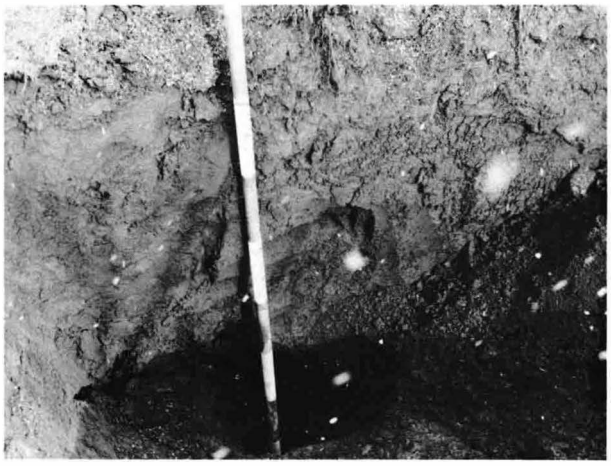
Ⅰ－3　A地点



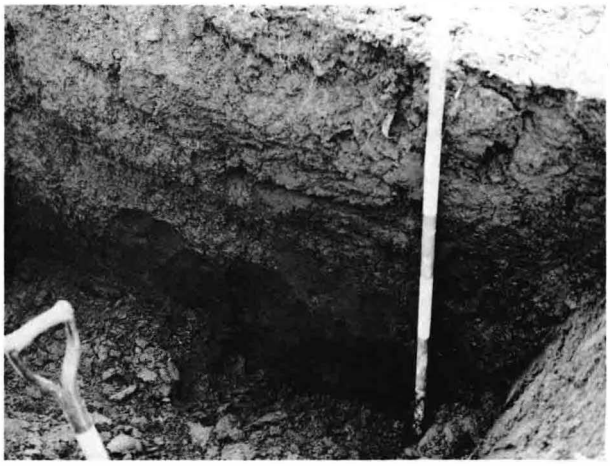
Ⅰ－4　C地点

Ⅰ－5　D地点

Ⅰ－6　I地点



Ⅰ－7　K地点



Ⅰ－8　M地点

第2節　調査日誌

以下に記する調査進行に関する日誌は、主要遺構を中心に、「調査日誌」より要約抜粋したもので、そのため調査詳細をはじめ、参加者等は割愛した。また調査開始した日に遺構名を記したものの終了日のないものがある場合、当日で終了したことを示す。人物往来については、名前を表明していただいた方、県内外の考古学研究者に限らせていただいた。

9月27日　本日から残土処理をしながら、遺構形態の確認を行う。一番新しいと思われるSB 3から遺構検出作業をする。

9月28日　午後から雨のため遺構の調査を中止する。そのため本日の作業は、残土処理を中心とする。

9月30日　SB 5・6・9の調査開始。SB 1・3を完掘。SB 0の確認と遺物を採集。SB 1より鉄鎌、SB 2より小形丸底土器が出土した。

10月1日　SB 5・6・9の調査継続とSB 19の調査開始。

10月2日　SB 4・2・10・13の調査を開始する。SB 9の床面を確認し、南壁は盛土状遺構になる。SB 7・12・14の精査。本日より既出遺構実測を開始する。遺構図1/20、細部1/10、分布図1／200を基本とする。

10月3日　継続SB 2・5（下）・12・13　。調査開始SB 16・18とSB 12の炉（壺）。F.P（ファイアーピット）1の調査をする。

10月4日　継続SB 9内溝・13・16・18。調査開始SK 7～11、SB 17。測量ポイント（P 1）の標高を求め、317.9 mになる。

10月5日　台風20号の接近中とのこと、3時頃より風雨激しくなる。継続A区ピット群、SB 18、D地区残土処理。調査開始SD 1。

10月7日　調査継続SB 11・18とC地区遺構形態の確認する。開始SB 20とピット群。

10月8日　SB 20・9の精査とC地区の遺構確認を進める。開始SB 23、SK 18～21（黄色粘土ブロック混じり）。

10月9日　今朝、北アルプスに冠雪をみる。冬がもう一歩近づいたことを思わせる。調査D地区の残土処理を進める一方、SB 24・23を調査し、SB 15・24・48を確認する。ピット22は、井戸址になる。C地区の遺構確認作業を進める。

10月11日　小雨があったものの、調査を全日することができた。D地区の残土処理を進める。調査進行遺構SB 40・38・31・40・30。調査開始、SB 26・21・39。

10月12日　SB 21・26・15（下）・27の新旧確認後逐次調査にかかる。ファイアーピット3を掘り進めるとともにSB 31・32・38・40・41の調査を進行する。調査開始SB 21・25・39・33・44・43・45。

Ⅰ－9　A地区

Ⅰ－10　B地区

Ⅰ－11　C地区

Ⅰ－12　D地区

10月14日　雨にて午前出勤者と土器洗浄を行う。明日からの調査を考慮しながら新たに、SB 46・27・15（下）の調査にかかる。

10月15日　調査継続SB 40付近・17・46。調査開始SB 40・34。

10月16日　調査SB 10・63・34・34（下）・46。開始SB 39・35・42・47・50・52・54・57・58、SD 6・5。

10月17日　午前雨。調査継続SD 9・10、SB 58・34。開始SB 78・75。SB 48より内行花文鏡片が出土。

10月18日　調査継続SB 63・18・42・35・37・47・75・43、井戸址1、SD 3・9・10。開始SB 64・60・53他。

10月19日　調査継続SB 61・64・48・49・71、SD 3・4・8、開始SB 77・73・56・74、SD 4・5。E地区の残土処理。

10月21日　調査継続SB 22・63・64・53・49・54・71・77・73。開始SB 22・61、SD 5、ファイアーピット2・3。

10月22日　調査継続SB 22・64・49・71・77。E地区（240～140）の残土処理と遺構の確認を行う。開始SB 101・104・106～108・117・126・119。SB 73の壺は棺と判定する。

10月23日　調査継続 101・109、SDイ。開始SB 110・127・105・102・118・116・120。墓2より人骨と筒形土製品、管玉が出土。

10月24日　調査継続SB 105・103・125、118・120・107・109、墓2。開始SB 103・111。3時頃より降雨あり。

10月25日　調査継続SB 103・111・105・109・114・120。開始SB 115・122・124、墓2・3。E地区の土層実測。

10月26日　調査継続SB 104・109・114・115・117・120・124・126。開始SB 129・130・128。

10月28日　調査SB 109（下）・128・117・123・126・111（下）、墓1～3、ファィアーピット3、SKカ。E地区土層実測。

10月29日　全日雨にて作業を中止する。遺構図面の整理。

10月30日　調査SB 134・114の精査。墓1～3の精査。

10月31日　SB 117の掘り下げと土層観測。墓1～3の精査。

11月1日　調査SB 119・122付近の遺構、工事杭240～430（G区）までの残土処理をするも遺構が重複して確認に至らない。

11月2日　残土処理をしながら遺構の確認を行う。調査継続SB 119・127・137、墓4～8。開始SB 142。西沢先生来長。

11月5日　調査SB 83（下）・136・142、SD 11・12、ピット群。

11月6日　降雨にて作業中止。遺構図の整理を行う。

11月7日　調査継続SB 80・91・136・142・138とピット群、墓10。開始SB 81・96・144。

11月8日　調査継続SB 80～82・136・144・148・142・96・146・147、集石址1。調査SB 88・149、墓11～13、SK 43～45。

11月9日　調査継続SB 142・149・150・152・87・96（下）・99・100。開始SB 154・98・97、SD 13・17、SB 173。

Ⅰ－13　D地区

Ⅰ－14　G地区

Ⅰ－15　J地区

Ⅰ－16　M地区

11月11日　調査継続SB 94・96・84・156・157。開始SB 92・93・95・162・160、墓14～16、SK 45～47。

11月12日　雨にて作業を中止し、土器洗浄と遺構実測作業をする。

11月13日　調査継続SB 85・136（下）・160と付近の遺構。開始SB 95・175・172・173、SK 58。SK 44は井戸址になる。

11月14日　調査継続SB 173（下）・158・162。開始SB 169・170、SK 55付近の住居址及び墓17。

11月15日　雨により午後より調査をする。調査SB 95・175・176・171・150・160と土壙。開始E地区土壙群55～62・95・79。

11月16日　初霜あり。調査SB 175（下）・176・173（下）・160・150、墓18。開始SB 159・79、墓19。

11月18日　調査継続SB 159～170・136・175・179、第V墓壙群。開始SK 64・66・68～71、SB 181・182。

11月19日　調査継続SB 136（下）・182、SK 64～72、墓8。開始SB 184（下）・187・183・184・190、SD 19と付近。

11月20日　調査継続SB 190・188・182・179、SD 19、SK 71・72・74・78～87、墓17。開始SB 178・179と最終調査区の残土処理を進める。

11月21日　調査継続SB 178・181・184・188と残土処理をする。開始SB 186・195・189、SD 22・23の土層確認。

11月22日　墓5の南に21・14、北に22を確認、調査を始める。継続SB 148・186（下）・195・193とSD 22。開始SB 191・196・193・192・196・180・186（下）・201・202、SD 25・26・23、SK 89。

11月25日　雪のち雨のため作業中止。

11月26日　木棺墓群の検出を進める一方、SB 201・192（下）・196・197・186（下）、SD 20・19の調査と、SB 196・199を開始する。

11月27日　調査継続SB 199、SD 19・20。開始SB 203・194。

11月28日　新たに墓24・25の検出にかかる。開始SB 188・204。

11月29日　調査継続墓壙、SB 206・199・207・203・186（下）、SD 22・23・39・28・29及びSB 190付近の土壙。開始SB 207・208・205、SD 30・31、SK 76。

11月30日　墓壙の調査を進める。調査継続SB 199・203・186・209・187（下）・184（下）。開始SB 209、SD 24。本日で主作業を終了する。

12月1日～15日　墓壙の検出を進める。開始した住居址の整理作業を行う。

12月15日　現地における全調査を終了する。

［人物往来（日付順・敬称略）］篠ノ井市民新聞栗林主筆（9/27）・宮崎利幸（長野市会議員）（10/3）、毎日新聞記者2名、県・市主管課職員（10/8）、塩崎小学校1・6年生（10/9）、丸山喜正（塩崎保育園長）、矢島宏雄・佐藤信之（更埴市教委）、岩崎卓也（筑波大助教授）、塩入秀敏（上田女子短大講師）（10/22）、米山一政・春日学（長野市文化財保護審議会委員）（10/23）、宮崎利幸、塩崎小学校6年PTA（10/24）、篠ノ井有線放送、県中央道関係職員5名

I－17　人骨の検出

I－18　人骨の取り上げ

I－19　墓壙の取り上げ

(10/28)、丸山利雄（長野市文化財審議会委員）(10/29)、宮崎利幸、山崎久雄（元長野県会議員）(11/8)、笹沢浩（県史刊行会)、光谷拓実（国立奈良文化財研究所）(11/14)、塩崎小学校教養部約20名（11/16)、小林秀夫（県教委指導主事)、桜井弘人（飯田市）(11/18)、長野市犀南教育会1・4年会、篠ノ井公民館郷土史学級約30名、県史刊行会編纂委員（戸沢充則・森嶋稔・桐原健・樋口昇一・岩崎卓也・神村透・笹沢浩・宮下健司）(11/19)、春日学、宮崎利幸、NHK長野放送局（11/21)、笹沢浩・設楽博己（筑波大学生)、毎日新聞社・朝日新聞社・信濃毎日新聞社各記者（11/26)、石川日出志（明治大学助手)・読売新聞社・赤旗各記者（11/27)、会田進（岡谷市立美術考古博物館）(11/28)、柴田幸男（塩崎文化財保存会長)、森嶋稔、伴信夫、矢島宏雄、佐藤信之、市沢英利他6名（中央道遺跡調査会）(11/30)

第3節　調査会・調査団の編成

1　調査会

会長　奥村秀雄（長野市教育委員会教育長）

委員　米山一政（長野市文化財保護審議会長）

桐原　健（長野市文化財保護審議会委員）

清水栄一（長野市教育委員会教育次長）

関川千代丸（長野市教育委員会文化財専門主事）

監事　高野　覚（長野市教育委員会総務課長）

事務局　戸津幸雄（社会教育課長)・吉池弘忠（同課長補佐)・山崎博三（同主査）

2　調査団

団長兼調査主任　矢口忠良（長野市立博物館）

調査員　矢口栄子・出河裕典・中殿章子・横山かよ子・田中寿賀子（以上調査団）青木和明・奈須野由美・山口純一・山口　明・大蔵　満・安室　知・唐沢　茂・和田　博・藤森治幸・西川昭史（以上長野市立博物館）

3　調査参加者（敬称略・順不同）

上原喜八郎・中曾根勝人・小松富士栄・松下年次・宮長周蔵・山岸義久（以上庄ノ宮）小幡つやの・渡利つや子・伊藤きよみ・伊藤忠治（以上角間）北沢やすい・小出史子・矢島喜和子・太田つたい・矢島秀子・三宅計佐美・広瀬政子・北村秀一・宮崎保雄・北村政春・三宅利正・北村利雄・矢島善治・山岸さよ子・内山直子・矢島憲之（以上山崎）倉石八千代・岸田まさよ・中島ふじ子・松林裕子・滝沢美智子・石川はるみ・高橋智江・高橋綾子・新井久代・倉石みつ江・利根川幸雄・村上ふじ子（以上上町）春原すみ江・宮崎公子・春原明子・滝沢よし・宮本エイ・春原信子・倉石たけ子・渡利保美・倉石和加子・丸山フミ・石川のぶい・石川芽子・石川豊子（以上四之宮）春原明子・春原すみ江・滝沢よし（以上長谷）

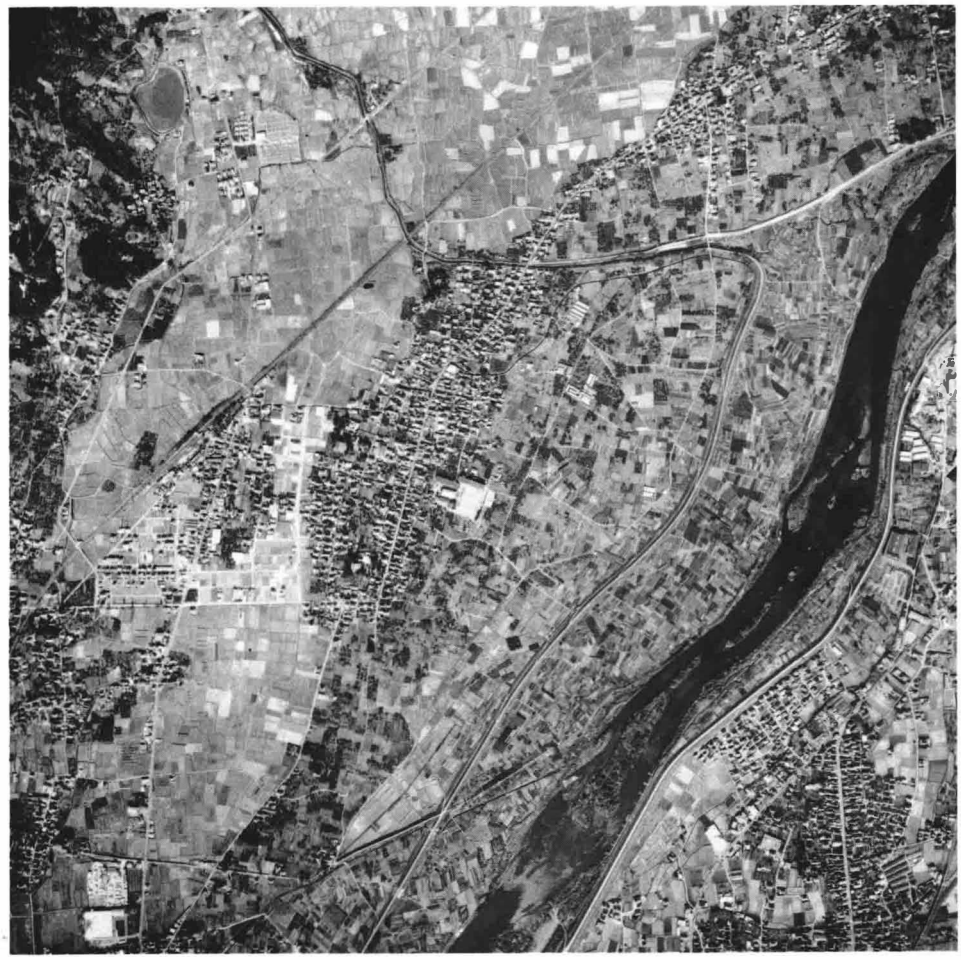
整理補助員　徳成奈於子・岡沢治子

以上の方々の他、小松重男・後藤平一・石川篤美・宮崎恵三・後藤春雄・後藤　真・岸田義人・渡利好人・倉石茂富・荒井忠二・岡田四郎・宮崎　一・宮崎利幸・沓掛　誠・滝沢利之・宮本　清・荒井敏治・宮崎一江（以上松節～旧小田井神社道拡幅改修整備期成同盟会）及び一城建設・川中島建設共同企業体の皆様には、公私にわたってご援助をいただいた。記して感謝申し上げます。

（山崎博三）

第II章　調査地周辺の環境

第１節　地理的環境



II－１　塩崎遺跡群周辺の地形

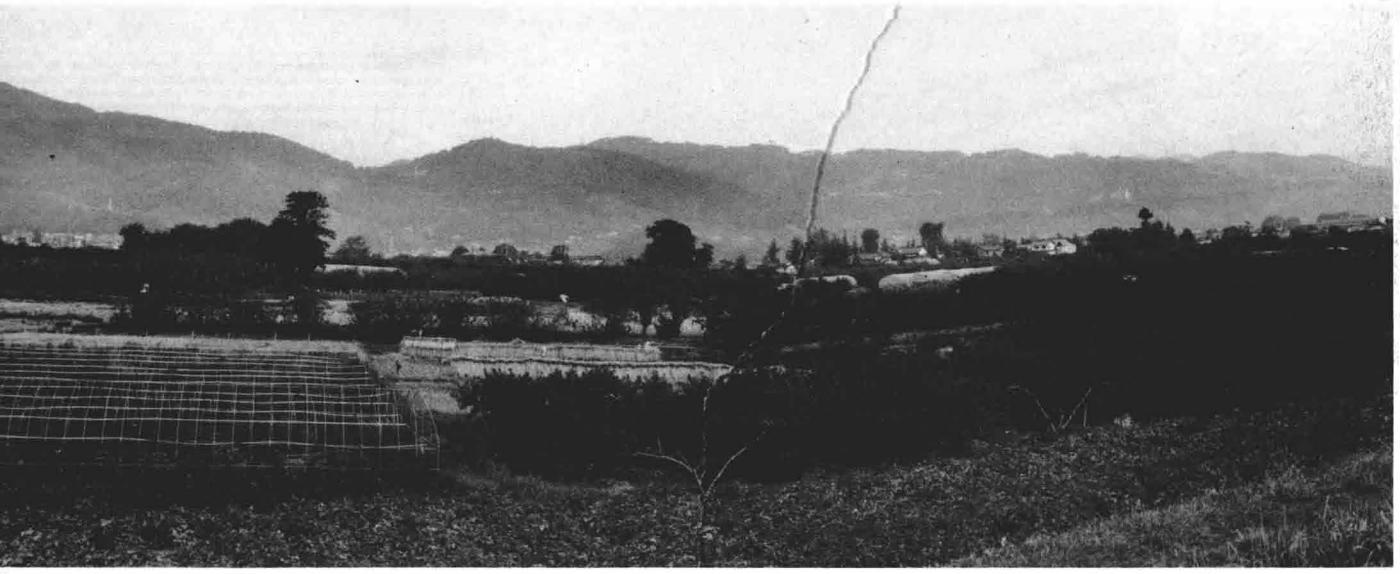
遺跡群は、千曲川が形成した自然堤防上にある。航空写真でみると、県道篠ノ井・稲荷山線の、北東では基本的に集落と果樹園・畑地がそれにあたる。現水田面とそれを埋め立て造成した新興住宅街を含めた地域は、旧千曲河川敷と推定され自然堤防に対する後背湿地と考えられる。即ちこの後背湿地こそ、自然堤防に集落を営んだ人々の水稲栽培のより良い生産地となったであろう。そして東側前面には、千曲川が流下しており、川の幸を得るに最良の場所といえる。

II－2　調査地（一本木地籍）

〔調査地〕

自然堤防（遺跡群推定地）をほぼ南北に、それも中央付近が調査地である。標高は、中条地籍の石柱三角点に358.2ｍと標記されている。この地点から南側は、松節地籍との境まで徐々に高くなるものの、その数値は数10㎝にすぎない。その後また徐々に標高を落としていく。一方北側でもこの傾向があり、伊勢宮地域でいく分低くなるものの一本木地籍では高くなり、塩崎小学校付近で最高地になる。その差は数10㎝である。この自然堤防と後背湿地との比高差は、現在数10㎝からほぼ平坦に近くなっている所もあるが、旧来の地形ではもっと著しい差になっていたものと考えられる。その理由は、千曲川に流れ込む小河川の流入等と耕作による自然的・人工的要因によるものと思える。反面千曲川に面した東側は、２ｍ以上に及ぶ比高差がある。これは、現千曲川の流路と一致しており、自然堤防を築きつつも、一方で浸食していった様子がうかがわれる。

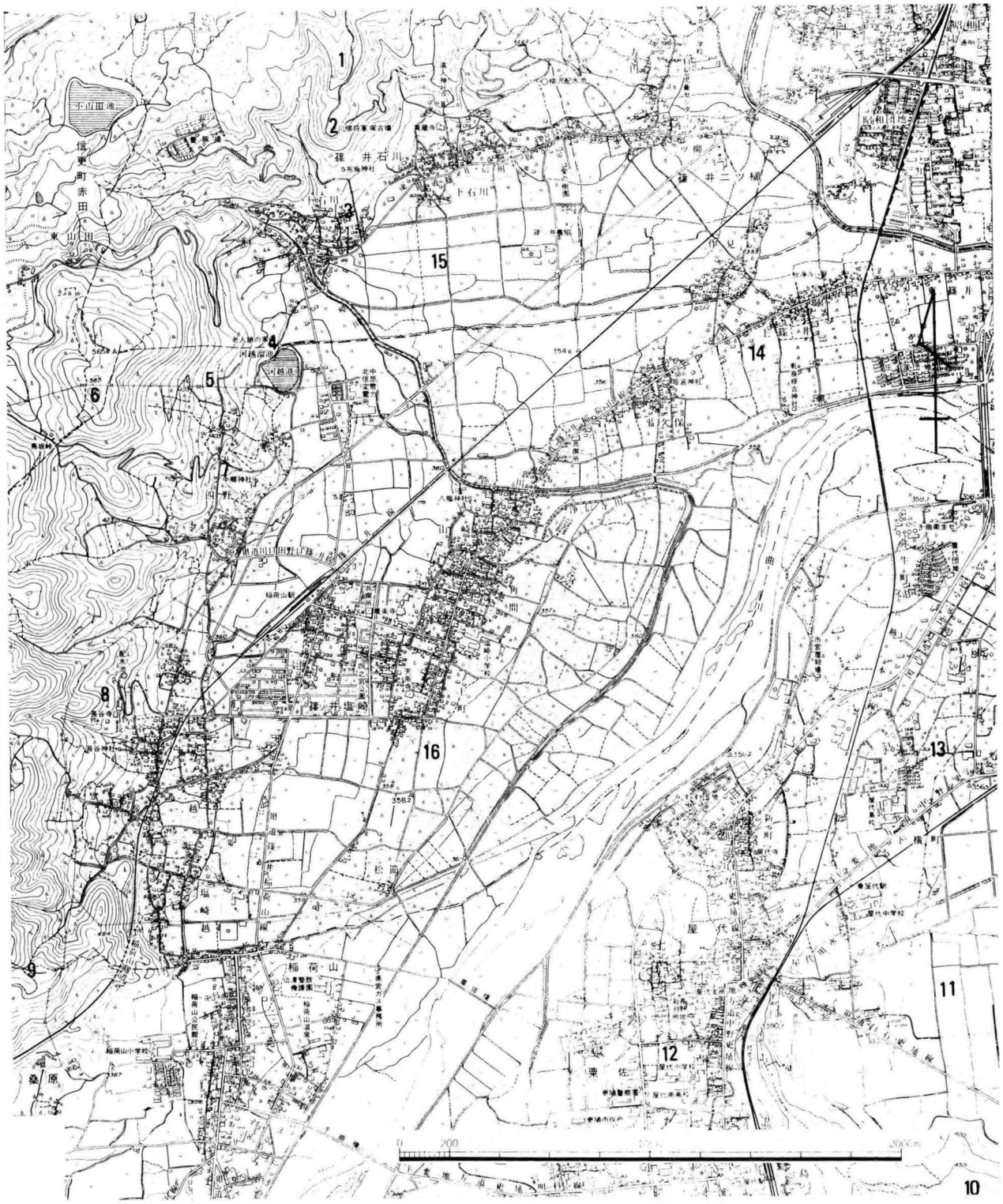
II－3　調査地遠景（篠山中腹より）



II－4　塩崎遺跡群近景

第2節　考古学的環境

1　周辺の主要遺跡



1．姫塚古墳（国史跡）2．川柳将軍塚古墳（国史跡）3．上石川廃寺跡 4．丸山4号（囲内）古墳（市史跡）
5．池の上古墳（市史跡）6．将軍山古墳　7．中郷古墳（市史跡）8．鶴萩古墳（市史跡）9．越将軍塚古墳（市史跡）
10．森将軍塚古墳（国史跡）11．屋代条里的遺構　12．粟佐遺跡群　13．屋代遺跡群　14．篠ノ井遺跡群
15．石川条里的遺構　16．塩崎遺跡群

2　塩崎遺跡群

1 山崎遺跡　2 殿屋敷遺跡　3 塩崎小学校遺跡　4 散畑屋敷遺跡　5 一本木遺跡　6 伊勢宮遺跡　7 中条遺跡　8 松節遺跡（ただし、この地点遺跡は、中核範囲を表面採集調査等により推定したものである。）

〔調査地内における過去の調査と文献〕

磯崎正彦「長野県篠ノ井伊勢宮遺跡の古代弥生式土器」『信濃』III・9－12　昭34

この論考は、故荒井藤四郎氏が永年、今回の調査地内、特に伊勢宮地籍から採集した土器片をもとに、時代位置を推定したもので、遠賀川系土器を含む中期前半の土器群が多いことから、弥生時代波及期の土器と位置づけた。

昭和8年、小島貞雄氏により銅鉾及び同石製模造品（市指定文化財）が採集されている。

昭和26年、米山一政氏により松節遺跡が発掘調査され、古墳時代後期の住居址を検出している。

昭和39年、桐原健氏等により中条地籍において今回の調査で確認された60号住居址の西側を調査し、、弥生時代後期の住居址が確認されている。

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布状況

調査は、事業対象約720ｍのうち約623ｍ、主要道路幅５ｍを基本として実施した。このうち、未買収地２ケ所（約170㎡）と一本木地籍にあるケヤキ大樹の保護のため、枝張り間の20ｍを、また上町接点地の20ｍを生活路確保のため調査を保留した結果、調査総面積は約2754㎡に及ぶ。

調査地は、塩崎遺跡群の先端から中央部にかけ、南北方向に縦断する大規模なトレンチ（試掘坑）的性格を持つものであり、この調査から塩崎遺跡群南半分の遺構状況を知る手掛りを得たものといえよう。

住居址をはじめとする人為的に掘り込まれた遺構は、調査地内全域に及ぶ。松節地域の自然堤防部（Ａ区）では、平安時代から弥生時代にかけて遺構が重複しており、この傾向は自然堤防東側に認められるものと考えられ、各期の集落の中心があったと推察される。一方自然堤防中央に行くに従い、遺構確認数が減ずる傾向にあり、時間差的まとまりを有するようになる。

Ａ地区における特異な遺構に、９号住居址南壁の盛土状の遺構とその下部が溝になるものがあり、ファイアーピット（Ｆ.Ｐ）２・３等は新知見の遺構である。また前記したとおり、この地区では、弥生時代後期と古墳時代前半の遺構が密集する。

Ｂ地区からＣ地区にかけ、調査幅は４ｍ内外になり、遺構検出に困難を極めた地域である。この中で、一辺が１ｍを越える方形に近いピット群が点列しており、この地域でも最下部遺構は、弥生時代後期のものが複雑にかみ合っているようであり、形態および規模等が上面から確認されたもののみ調査した。

Ⅲ－１　78号住居址から南方の遺構群

D地区は、また調査幅が5m前後にもどり遺構確認がしやすくなった。ここでも弥生時代後期と古墳時代後半の住居址が目立つ。この地区で始めて、78号住居址にみられるように全体を露呈することができた。このほか48号住居址床面から内行花文鏡片が出土したことは特記事項であるが、時期を比定する土器の出土がなかった点で残念であった。

E地区では、検出面での重複関係が集中的になり、F地区に至って奈良時代の遺構が認められるようになった。また平安時代から弥生時代後期の遺構が同一レベルで検出される。

G地区の特色は、木棺墓を含む弥生時代中期の遺構が多くなる。これに伴うように該期の土器片が増加するとともに石鏃の素材と推定される黒曜石剝片も多くなる。

H・I地区も各期の遺構が複合し、調査においても前後関係を把握するのに困難を極めた地域である。

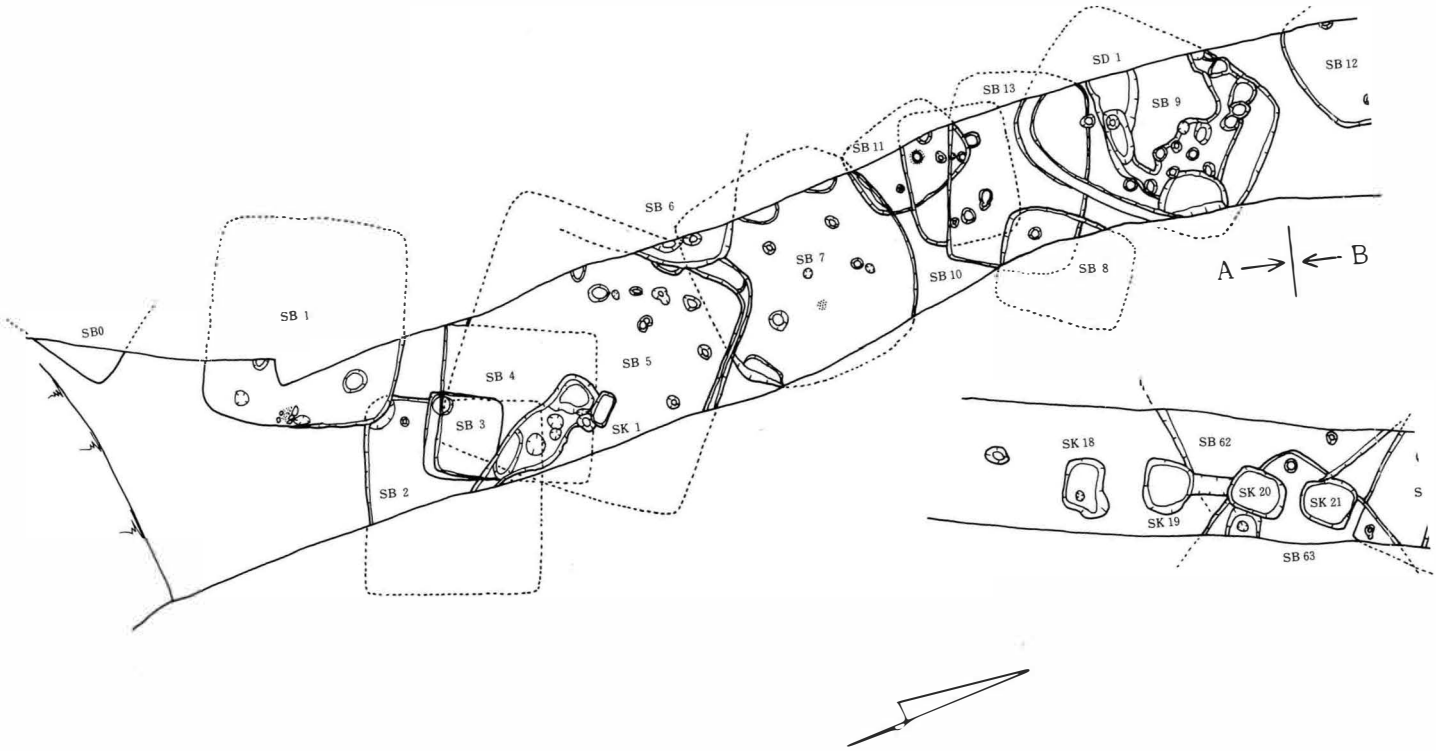
J地区では、墓壙群をはじめ、土壙状の遺構が多く、上面(検出面)からの形態確認が難しく、覆土の暗褐色土層を掘り進むと次々と大きな凹みとなったが、これらの遺構からは注目すべき遺物が出土しなかったため遺構番号を付さなかった。

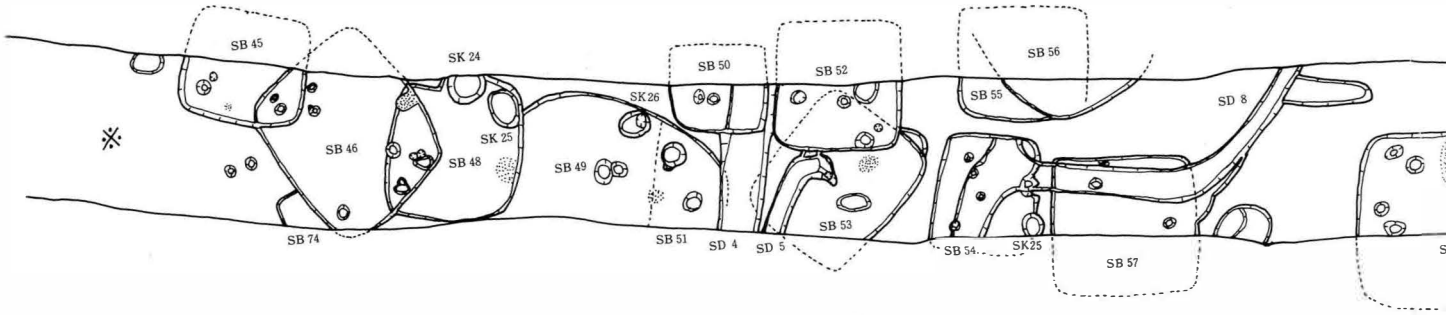
K地点では、奈良時代の遺構が上面に、その下部に至り弥生時代中期前半の遺物が顕著になり、この地域で始めて該期の186号住居址を確認することができた。またL地区にかけ、これまでの調査では東西に掘り込まれた溝址にたいし、円形又は方形になる点注目され、周溝墓の可能性も捨てがたい。

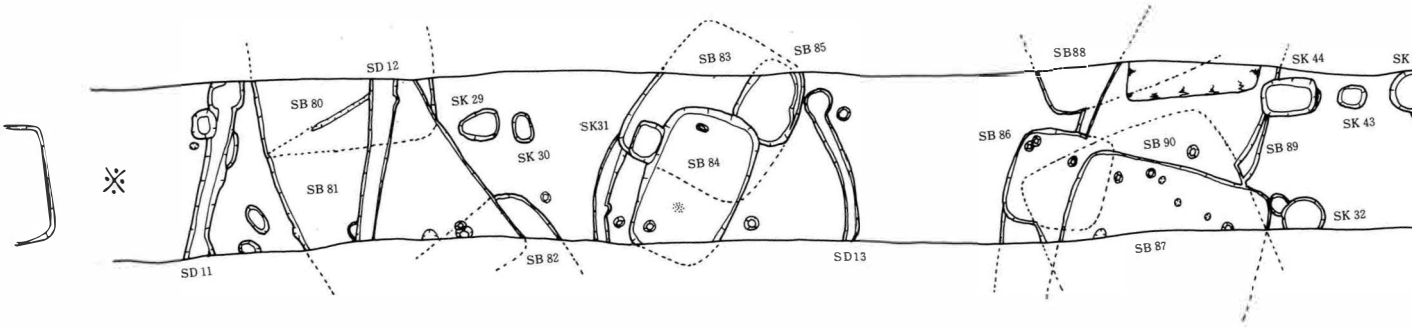
M地区も難しい遺構が多かったが、平安時代の複合遺構が目立つ。ここでの下部遺構は、弥生時代後期のものであるが、中期の土器片も多い。

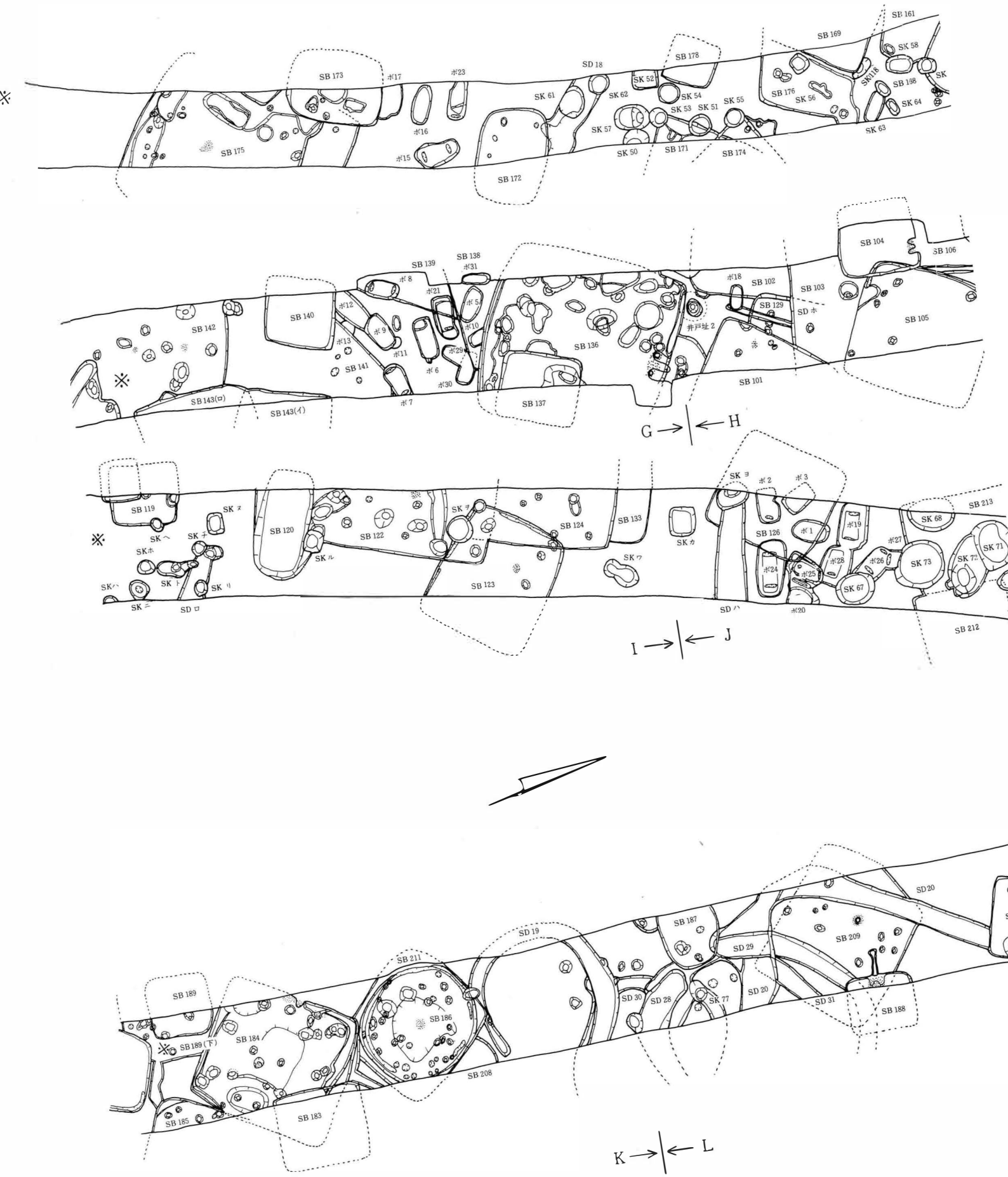
以上地区番号は調査の進行につれ便宜上区割りしたもので、各区には長短がある。それにつれ遺構番号も散在している。また墓壙群についても、整理段階に付したもので、北からV群に区分し、発見順に番号を付してある。そのため重複関係にある遺構については、少ない数字の遺構の方が新しいものと考えて良い。　　(矢口忠良)

III－2　J区遺構群


SB0
SB 1
SB 2
SB 3
SB 4
SB 5
SK 1
SB 6
SB 7
SB 8
SB 9
SB 10
SB 11
SB 12
SB 13
SD 1
A
B
SK 18
SB 62
SK 19
SK 20
SK 21
SB 63

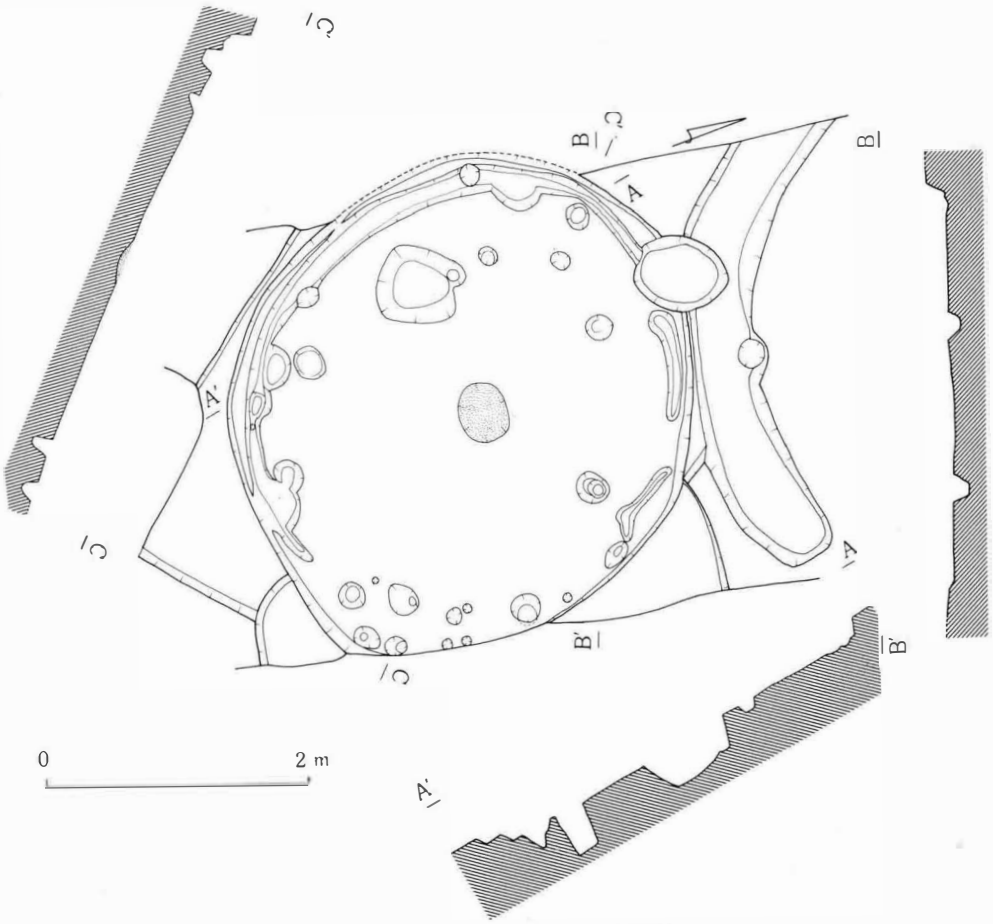

SB 45
SK 24
SB 50
SB 52
SB 56
SK 26
SB 55
SD 8
SB 46
SK 25
SB 48
SB 49
SB 74
SB 51
SD 4
SD 5
SB 53
SB 54
SK25
SB 57


SD 12
SB 80
SK 29
SB 83
SB 85
SB88
SK 44
SK 43
SK31
SK 30
SB 81
SB 84
SB 86
SB 90
SB 89
SK 32
SD 11
SB 82
SD13
SB 87


SB 161
SB 169
SB 178
SB 173
SD 18
SK 58
SK 52
SK 54
SK 53
SK 51
SK 55
SK 61
SK 62
SK 57
SK 50
SB 171
SB 174
SB 176
SK 56
SK 118
SB 158
SK 64
SK 63
SB 175
SB 172
SB 139
SB 138
SB 104
SB 106
SB 102
SB 103
SB 129
SD ホ
SB 105
SB 142
SB 140
SB 141
SB 136
井戸址 2
SB 101
SB 137
SB 143(ロ)
SB 143(イ)
G
H
SB 119
SB 120
SB 122
SB 124
SB 133
SB 126
SB 213
SK 68
SK 73
SK 72
SK 71
SK 67
SB 123
SD ロ
SD ハ
SB 212
I
J
SD 20
SB 187
SD 19
SB 209
SB 211
SD 29
SB 189
SB 186
SD 30
SD 28
SK 77
SD 20
SD 31
SB 188
SB 189 (下)
SB 184
SB 208
SB 185
SB 183
K
L

第2節　弥生時代中期の遺構と遺物

1．住居址



186号(上)住居址

形態　円形

規模　4.95×（5.3）m

壁高　東28.5～北9㎝

主柱穴　6個

炉　住居中央地床炉

規模　径55㎝

周溝　西半分

186号(下)住居址

形態　円形

規模　4.95×4.3 m

壁高　北22.5㎝

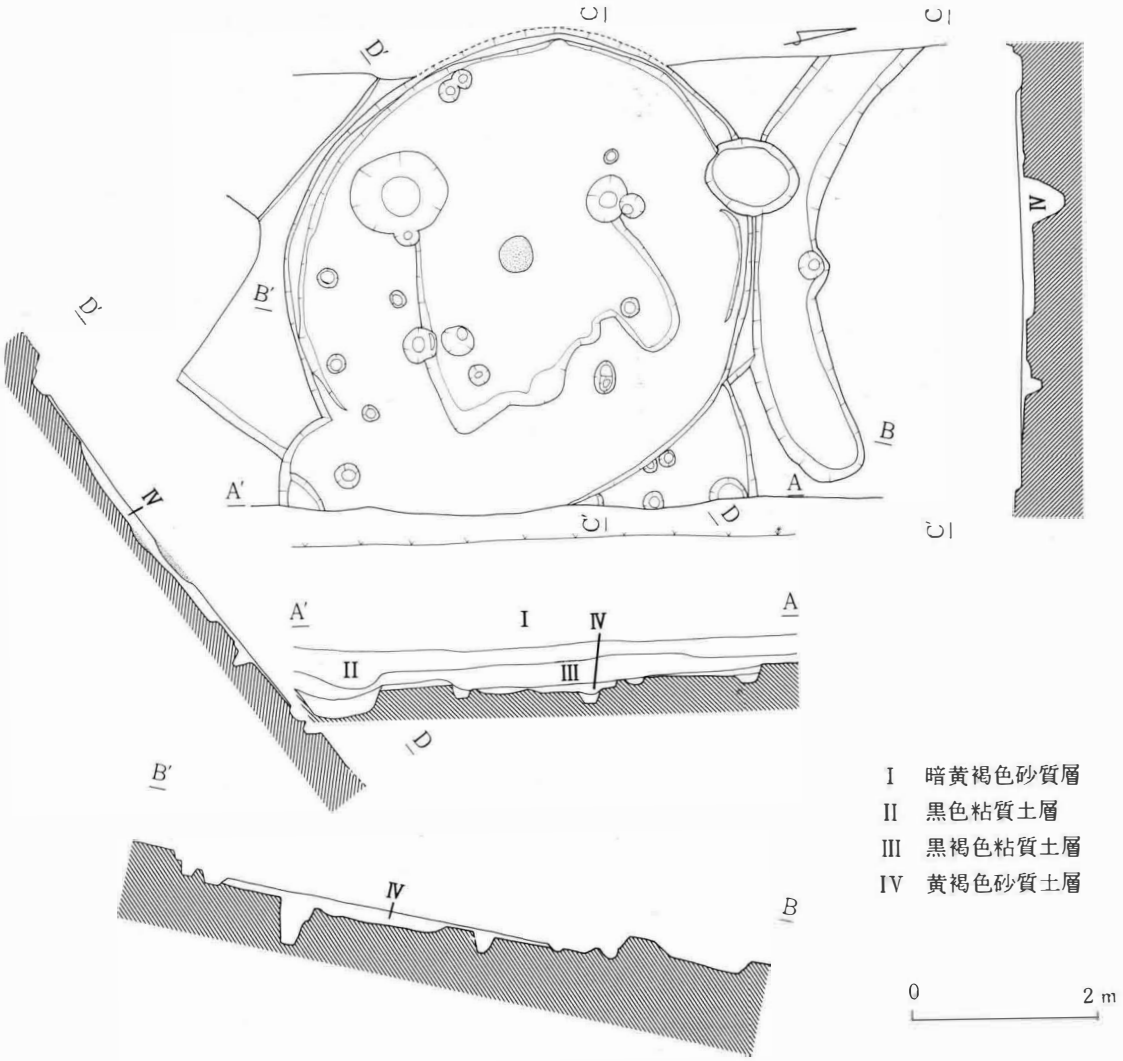
主柱穴　6個（？）

炉　西より地床炉

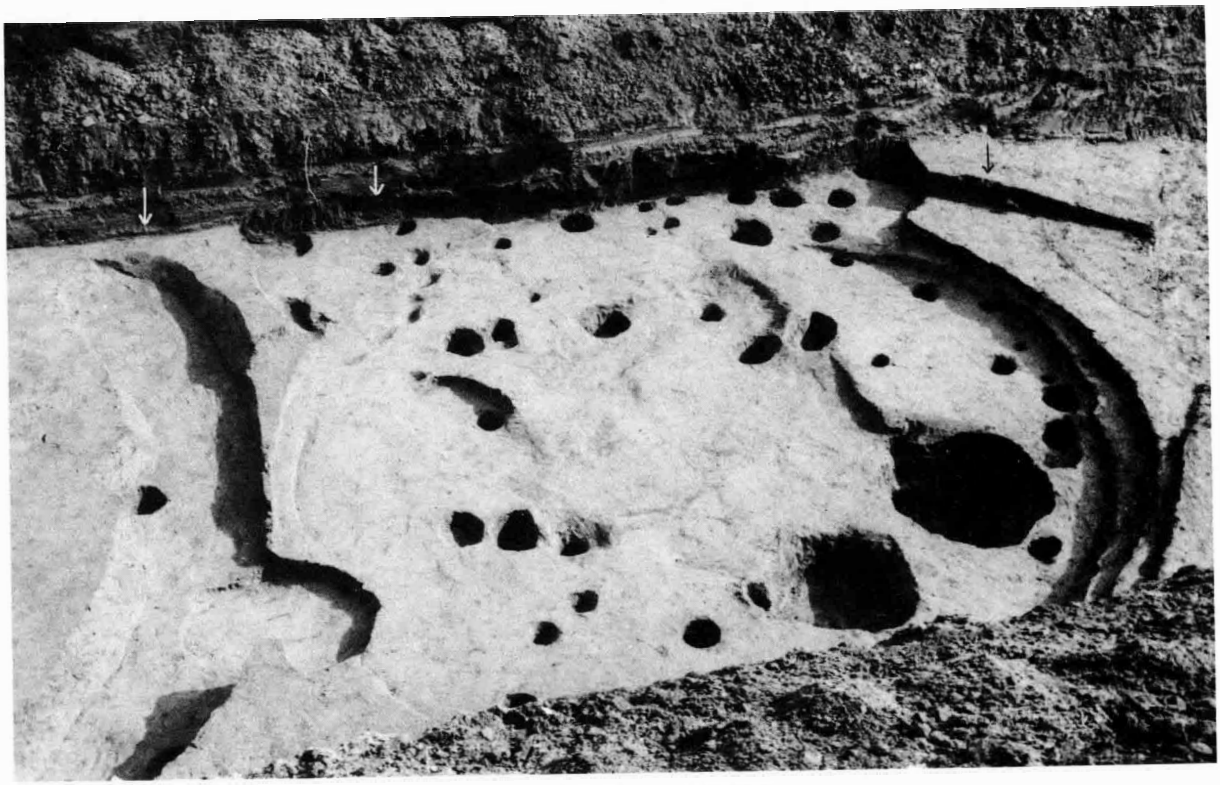
規模　径35㎝、周辺がくぼむ。

III-5　186(上)号住居址実測図

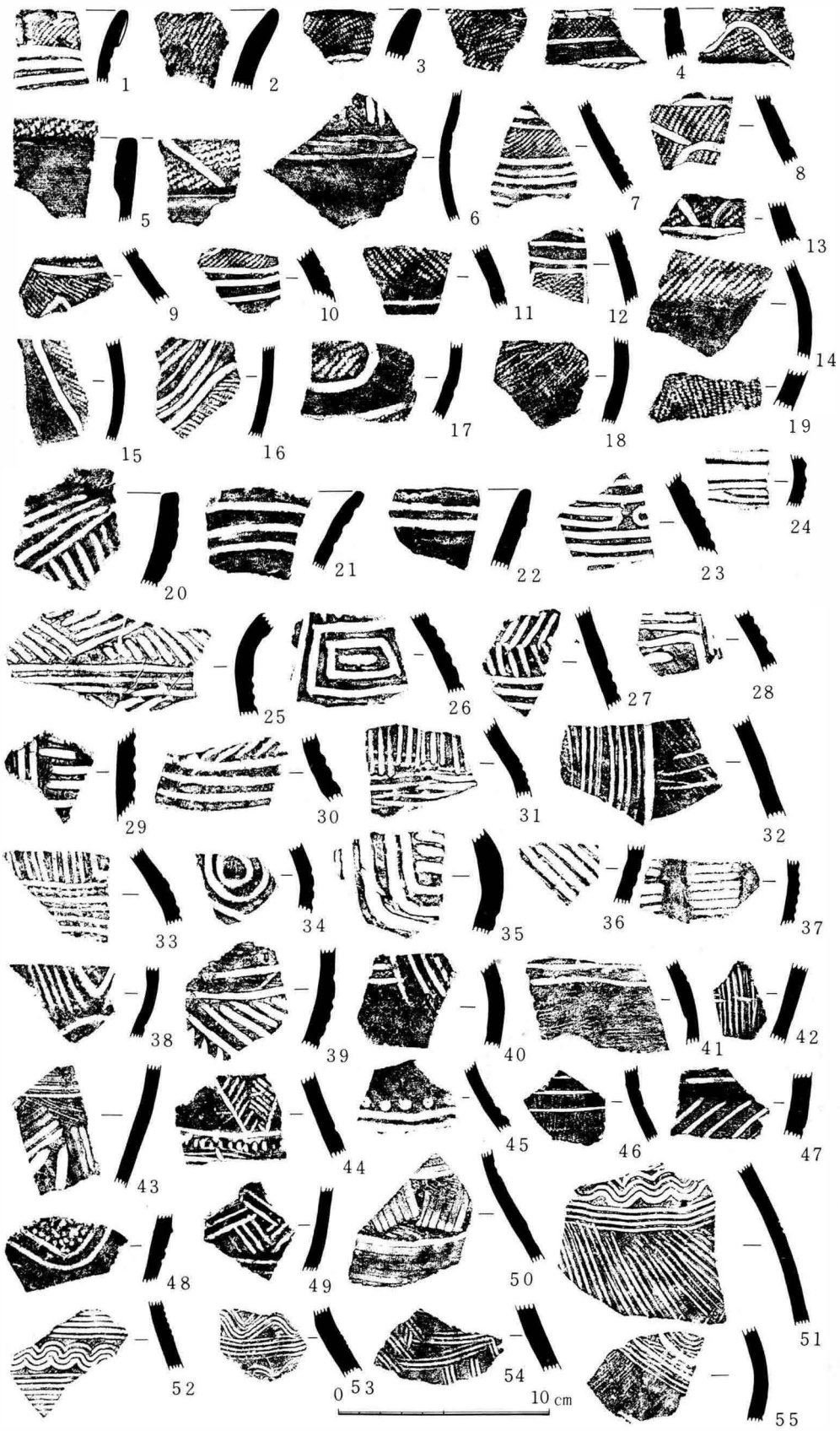
III－6　186号（上）住居址



III-7　186号(下)・208号住居址実測図



III-8　186号(下)・208号住居址



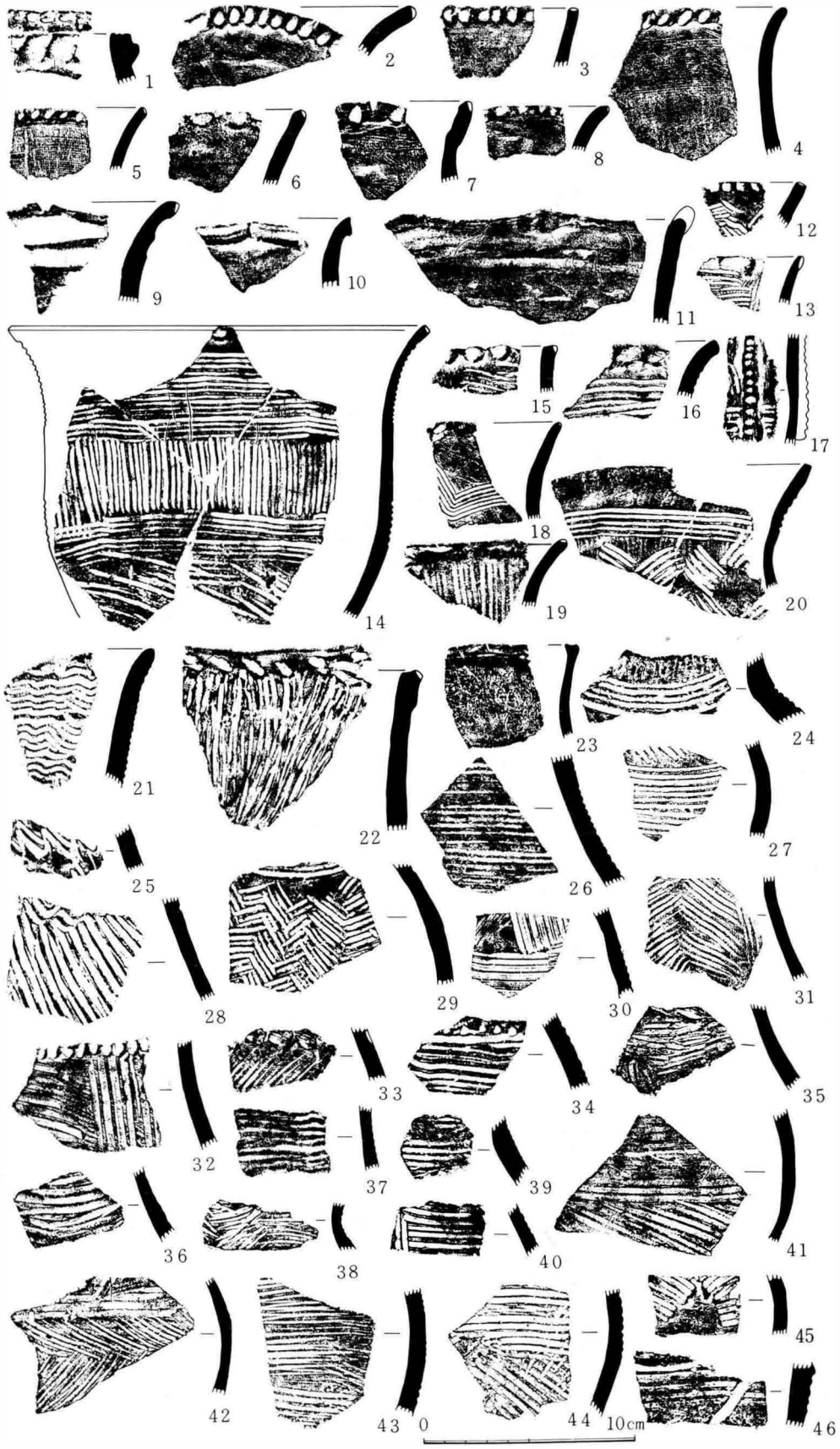
1～19は、縄文を地文としたもので、主に棒状工具による沈線文が描かれる。1の口縁部に粘土紐が貼付され、3～5は、内外面に施文され、有段になる。

20～55は、沈線文を主体とする一群である。24は浮線網状文系の土器で、23は変形工字文の系譜を引くかと思われる。36は黄白色を呈する条痕文土器で東海系のものである。46は内外面ともていねいにヘラミガキされ、遠賀川系土器の伝統を持つ。45の列点文は竹管によるほか、44・48の刺突文は棒状工具による。37・50～55の施文具は、太・細あるものの櫛歯状工具で、波状文・平行線文・斜行線文が描かれる。51・52の波状文は静止しながらのもので、コンパス風文になる。25の頸部平行線文帯は赤色塗彩痕が残る。施文方向は、左廻りで、上から下への施文順序を基本とする。

III-9　186号住居址出土土器(1)

186号住居址　上面と下面とが検出されたが、遺物的にみると上・下の時間差が認められなかった。

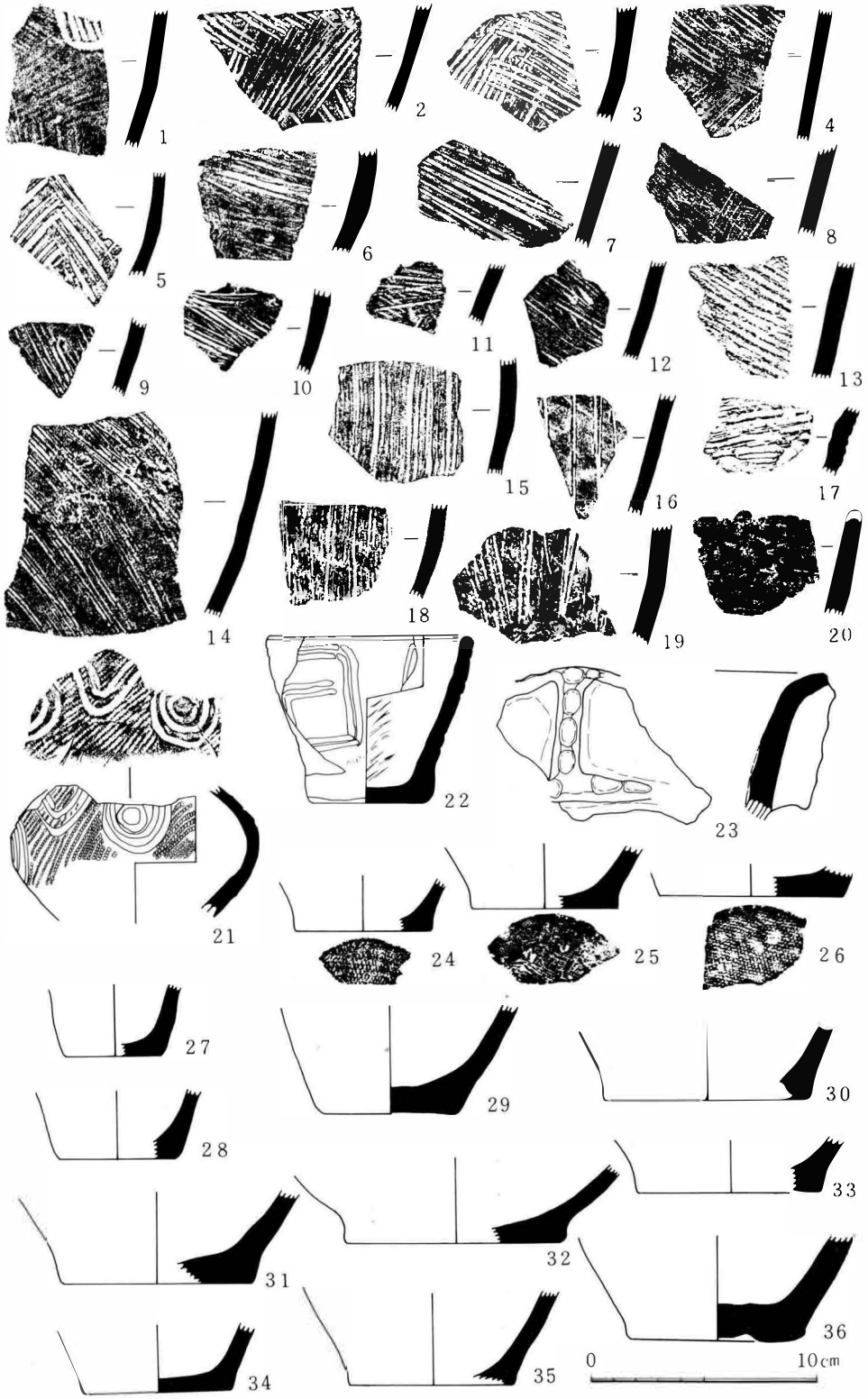
出土土器の色調は、黄褐色から黒褐色まで様々であるが、胎土に石英粒・黄雲母の混入が目立ち、器面に浮き出すことを特色とする。焼成は比較的良好である。



甕形土器と思われる土器片で、口唇部に棒状工具による列点文を頸部及び体部に櫛歯状工具に縦横の平行線文・条痕文が施される。1の口唇部は、2本歯の列点文がその下部は指頭による列点文風の文様になる。2～4の口縁部は、無文になり、ハケ整形痕が残る。9・11は波状口縁で、太い凹線になる。10も波状口縁気味で、棒状工具により沈線がめぐり突起部で結合する。20の口唇部は面取りされ、頸部は平行線文と山形の斜行短線文が施される。21は口縁から不規則な波状文が、18も波状文を意識している。25は灰白色、28は淡黄褐色を呈し、共に移入品と考えられる。文様は、はね上げ文風の波状文である。体部の最大径付近は横位の下半は斜行の浅い条痕文になる。尚26には赤色塗彩が認められ、壺形土器片であろう。

III-10　186号住居址出土土器(2)

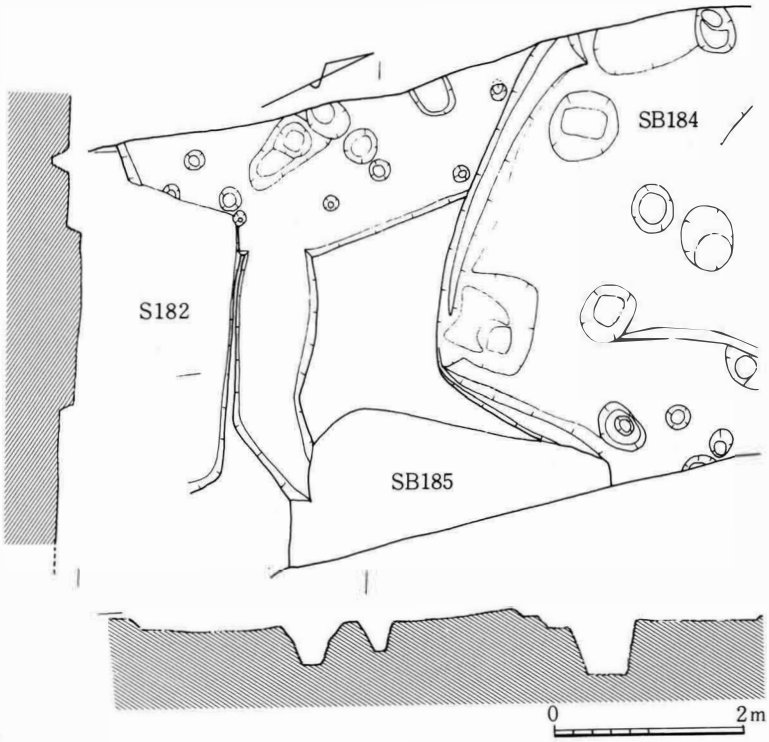
壺・甕形土器の整形をみると、外面では、壺においてはヘラミガキまたはナデ整形されるのにたいし、甕はハケ状条痕を残すものが多い。内面は共にナデ整形を主流にし、ハケ整形痕を残すものがある。施文の順序は、整形後、左廻り方向で、上から下へかけて描かれる。



III-11　186号住居址出土土器(3)

1～20は、甕形土器の体部下半と推定される破片である。横位の条痕文（羽状文）・縦位の綾杉文風の条痕文になるほか単純に縦位のもの、右下りの条痕文がある。13・17は、灰黄褐色を呈し、深く雑な条痕文が施される土器で、移入品の壺形土器である。21は小形の壺で、縄文地に2本の山形文と4区画の同心円文が描かれる。22は小形鉢で、文様は4区画になる。23は口縁部に隆帯を有する壺形土器で、隆帯上は指頭による浅く大きな列点文様になる。24～26には布圧痕が残るほか、他の底部、ヘラナデによる。36には2粒の籾圧痕が認められる。31～33は、底部が大形で開き角度から壺形土器が予想される。直線的に外開するものは小形のものであろう。

189号（下）住居址出土土器（III－13）　1は細口壺で、文様帯は体部上半まで3～4本の平行線文で区画した中を2段の羽状文・そして1本の沈線で山形文と縄文帯を分ける。最大径付近で2本の波長の大きい波状文がめぐり、2区画になると思われる同心円文が施される。沈線の工具は、棒状のものが用いられる。黄褐色～暗褐色を呈し、焼成はやや不良。2は体部下半の完形品で、4本の櫛歯状工具で施文される。焼成は不良で、器面がざらつく。3の口縁部は条痕文で、4には縄文が施される。7は半截竹管による刺突文が、8には竹管が使用される。



III-12　189 号（下）住居址実測図

189 号（下）住居址

上面で検出した奈良時代と推定される方形の住居址を調査したところ、東壁際のピットから弥生時代中期の壺体部下半が発見された。上部遺構の調査結果と周辺遺構の土層を視察したところ上面から判断できなかったこの遺構を推定し、床面より形態を確認することができたが、もう一歩形態について不安がある。

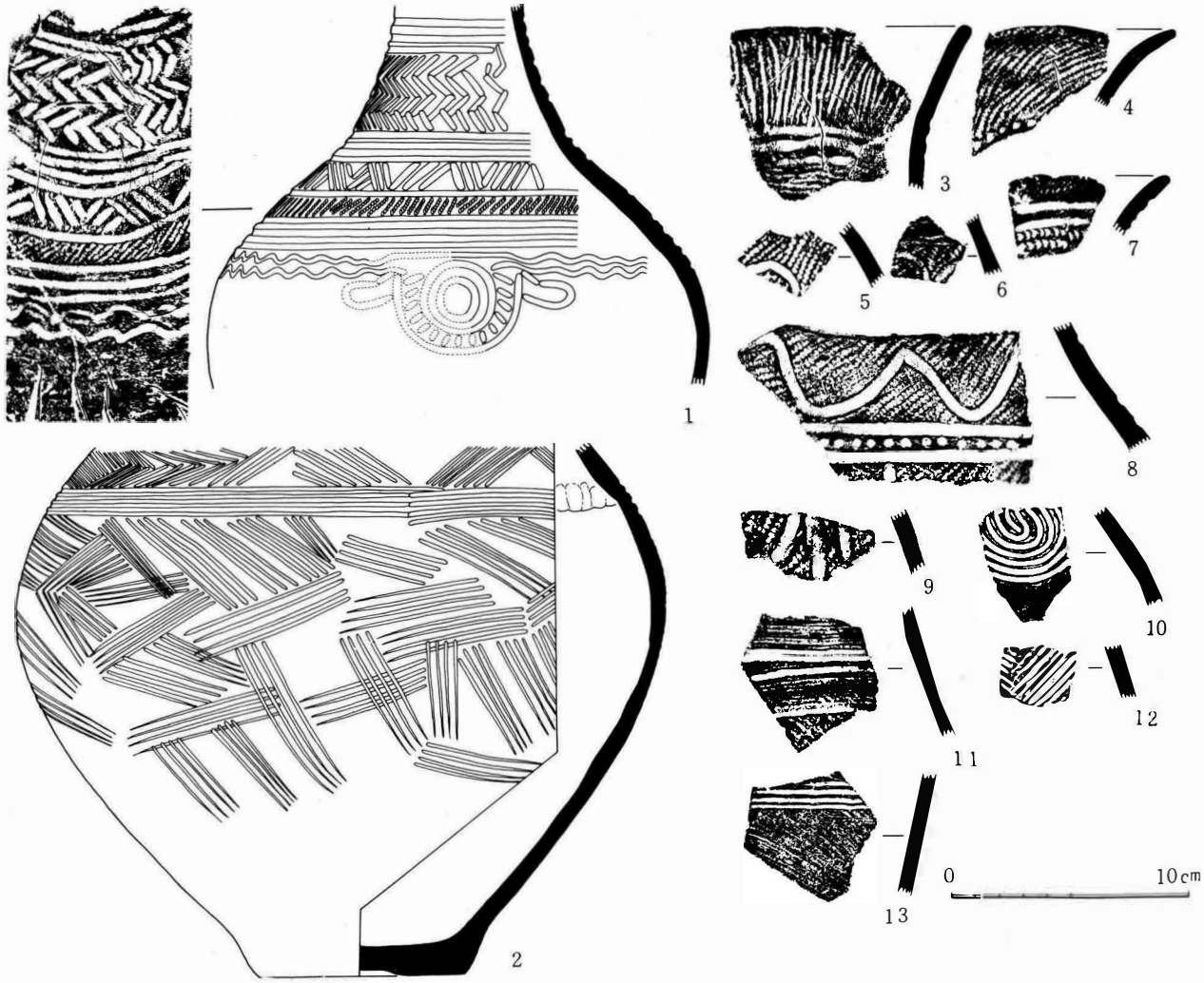
形態　隅丸方形（？）

規模　不明

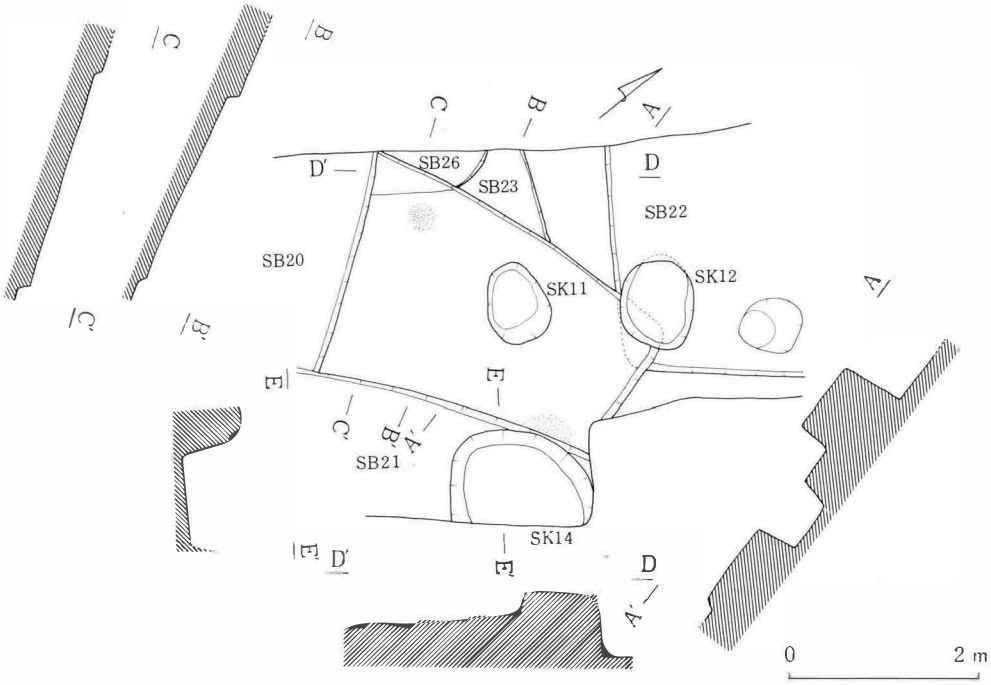
主柱穴　6 本（？）

壁高　南 10 cm・東 20 cm

炉　不明



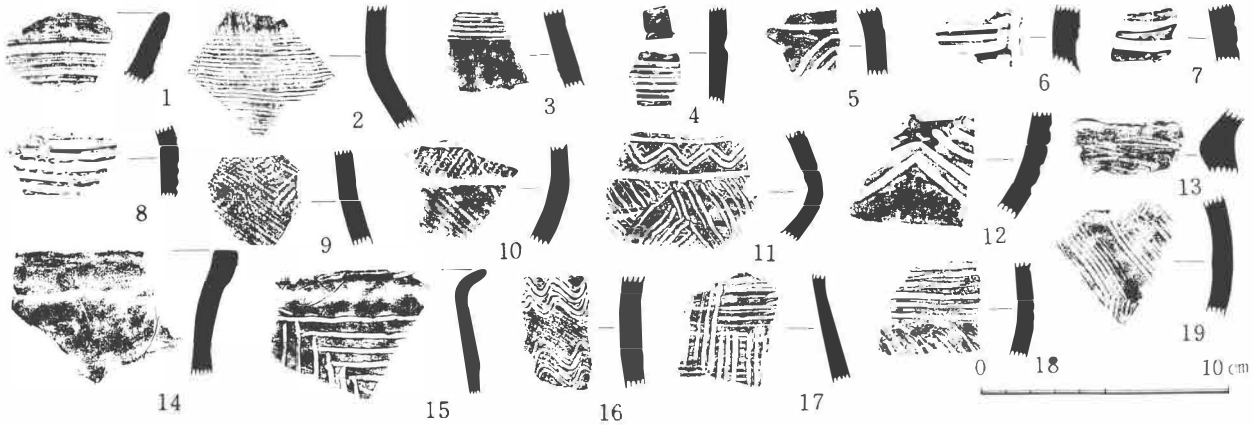
III-13　189号(下)住居址出土土器



III-14　25号住居址実測図

III-15　25号・26号住居址

25号住居址と19号住居址　土壙等により破壊され、かろうじて北壁と東壁の一部を確認されたにすぎない。住居址形態は、方形を呈するものと思われる。検出面からの掘り込みは、北壁で12㎝・東壁で22㎝を測る。尚、北壁の上部は古墳時代の19号住居址床面になる。床面は軟弱で、北壁沿い西側と東側近くに焼土が認められ、前者は径30㎝、後者は径50㎝である。このほか柱穴等の施設は確認できなかった。19号住居址の出土遺物は、器形を図化できるものはなく、床面付近より出土したものは、壺・甕形土器片の数点にすぎない。



III-16　25号住居址出土土器

土壙 11　不整楕円形。長軸 85 cm・短軸最大幅 65 cm・深さ 73 cm。古墳時代後期の坏・甕形土器片が出土している。

土壙 12　不整楕円形。長軸 92 cm・短軸 77 cm・深さ 67 cm。弥生時代の遺物が出土したが古墳時代のものである。

土壙 14　不整円形(？)。南北軸 150 cm・深さ 62 cm。古墳時代後期の坏・甕片が出土した。

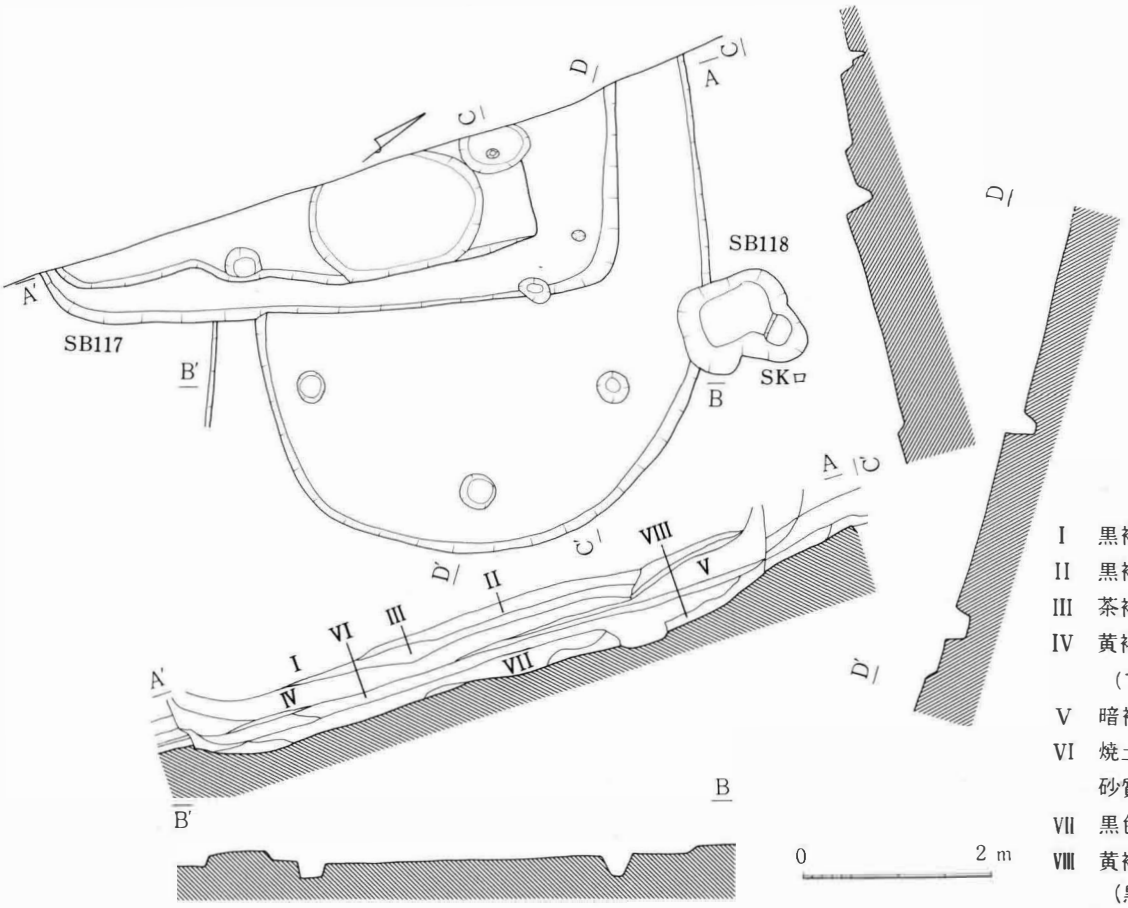
III-17　102号住居址

25号住居址出土土器（III－16）

1～12は壺形土器片で、他は甕形土器片と思われる。1は口辺部で櫛歯状工具でヨコナデされる。棒状工具による施文は、4～8・10・12・15に認められ、5・15には細い工具を用いている。他は櫛歯状（ハケ）の工具による。2・3は頸部片で平行線文が、5は波状文になる。9・10は縄文地になる頸部と体部下半片である。11は二本歯により施文される。13は甕形土器の頸部と思われ、ハケ整形痕が残る。15はコの字重ね文、16は波状文である。

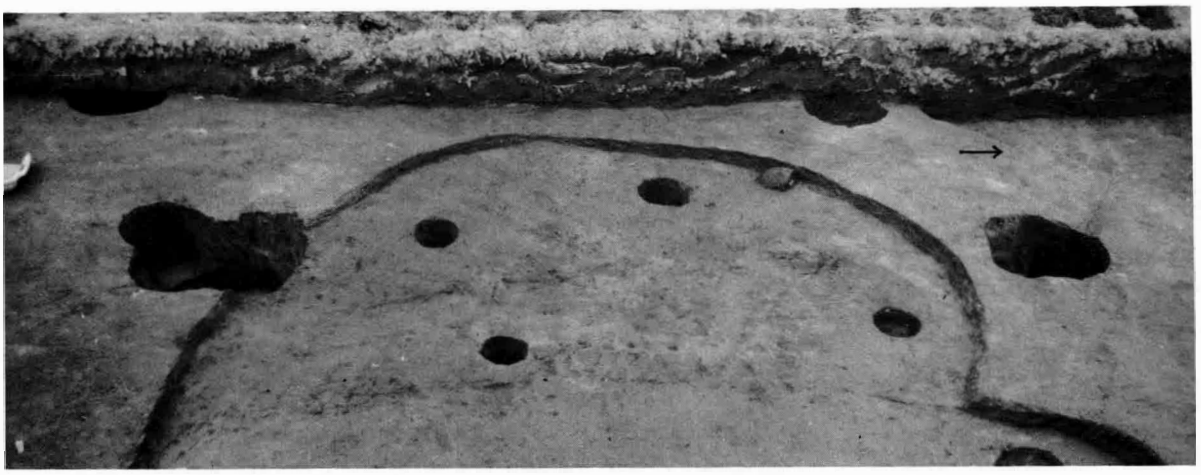
102号住居址(III－17)　地山の黄褐色粘質土層に掘り込まれた住居址であるが、平安時代の101号と同レベルで確認された。形態は隅丸方形を呈すると推察されるが、規模等は不明である。壁高は南8 cm・東15 cmの浅いものである。中央に堅い貼り床があるものの柱穴が確認できない点から住居址の東縁を検出したにすぎない。

出土遺物は、弥生時代中期に比定される壺・甕形土器と赤色塗彩された浅鉢形土器片があり、石器に打製石斧（III－169－4）がある。出土量は少ない。

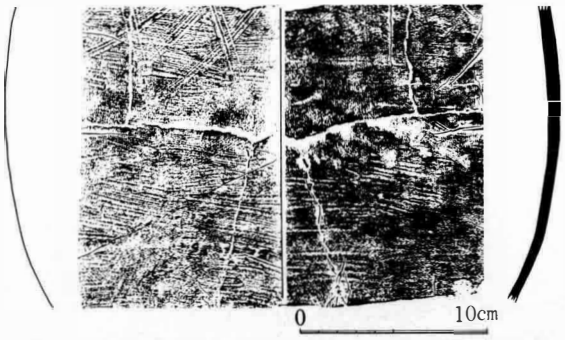


I　黒褐色粘質土層
II　黒褐色砂質土層
III　茶褐色粘質土層
IV　黄褐色砂質土層（ブロック混）
V　暗褐色砂質土層
VI　焼土・炭化物混砂質土層
VII　黒色粘土層（床面）
VIII　黄褐色砂質土層（黒褐色粘質土ブロック混）

III-18　117号・118号住居址実測図



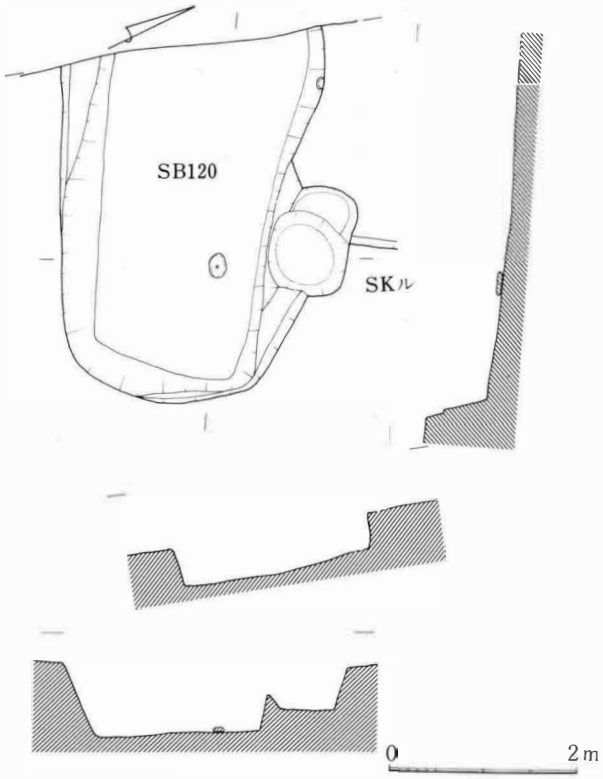
III-19　118号住居址



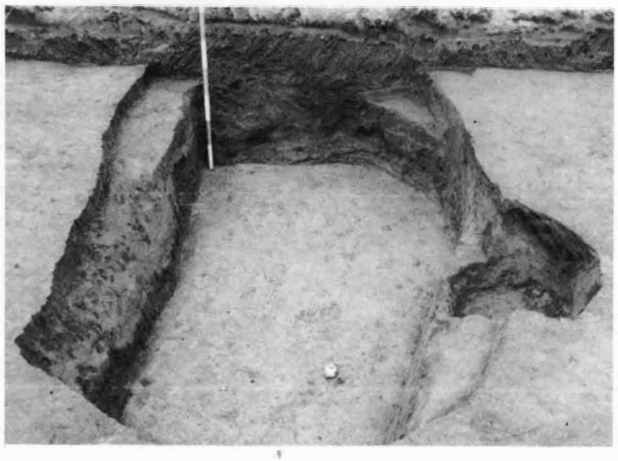
III-20　118号住居址出土土器

118号住居址　形態は東西軸が長い楕円形を呈し、西側半分は、117号住居址により切られる。南北軸は4.6mを測る。壁高は、各壁とも10cm前後の浅い住居址である。床面は軟弱で中央付近がいく分くぼむ。柱穴は、3個確認され6本長方形配列になる。

出土遺物　少量の甕・壺形土器片が出土している。図示したものは、大形の甕体部と思われ、ハケナデのち同工具で斜行する条痕文が施される。内面の下部には、ハケ整形痕が残るが、上半はナデにより整形痕が消されている。暗褐色を呈し、焼成は良い。胎土に小砂粒を含む。

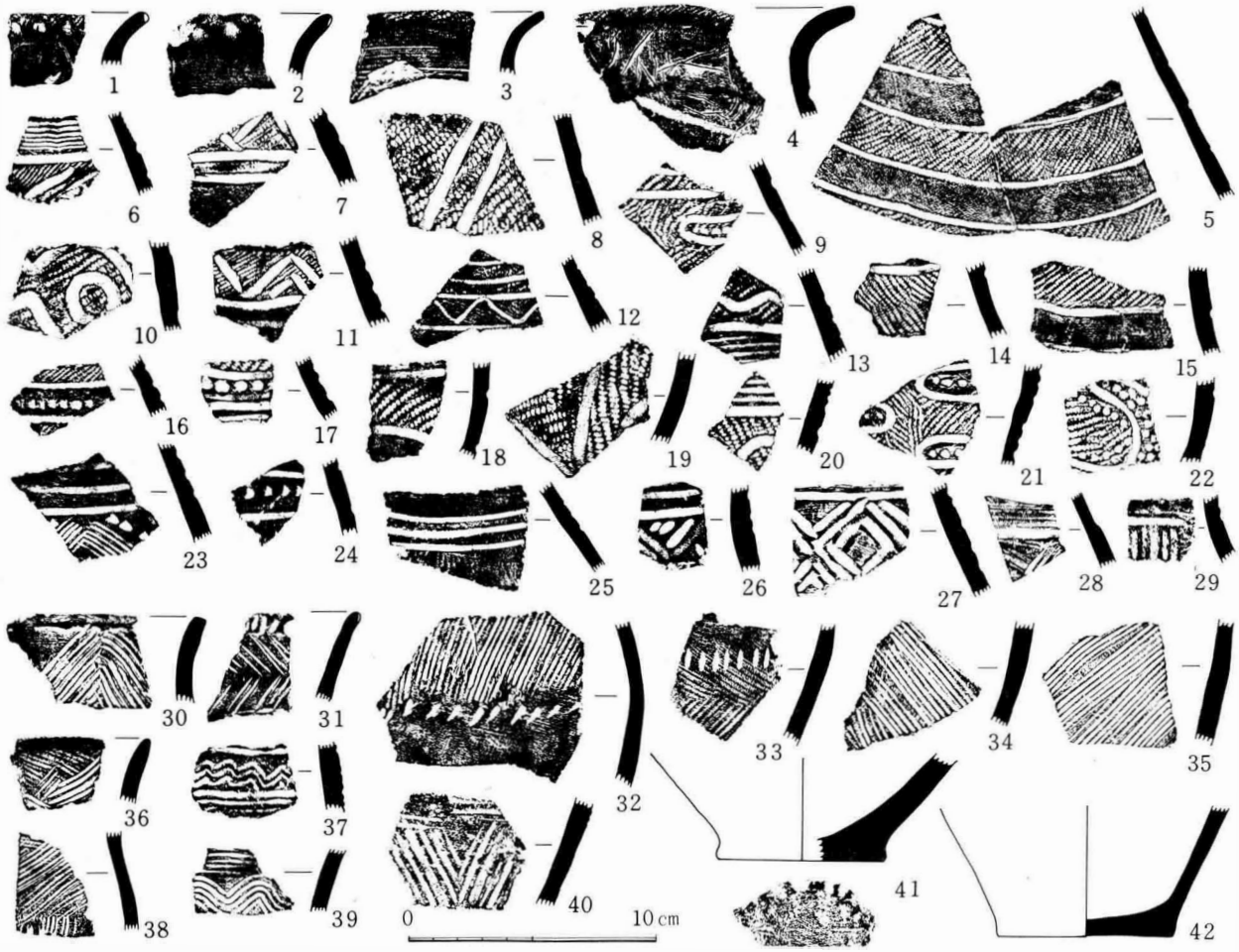


III-21　120 号住居址、土壙ル実測図

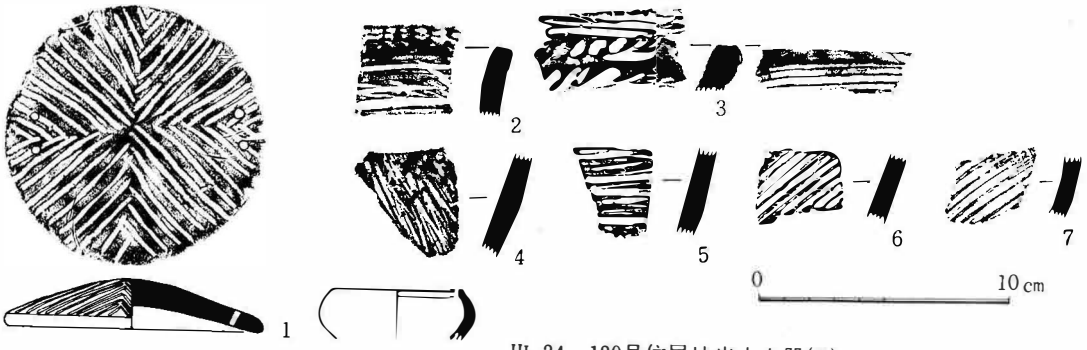


III－22　120 号住居址・土壙ル

120 号住居址　形態は隅丸長方形を呈し、規模は東西 2.1 m・南北（4.0）mで、主軸方向はN 60°Wである。柱穴等は認められなかったものの、その掘り込みは深く、北 74 cm・南 78 cm・東 63 cmを測る。床面は平坦で軟弱である。覆土は暗褐色粘質土である。遺物は床面直上のものが多い。

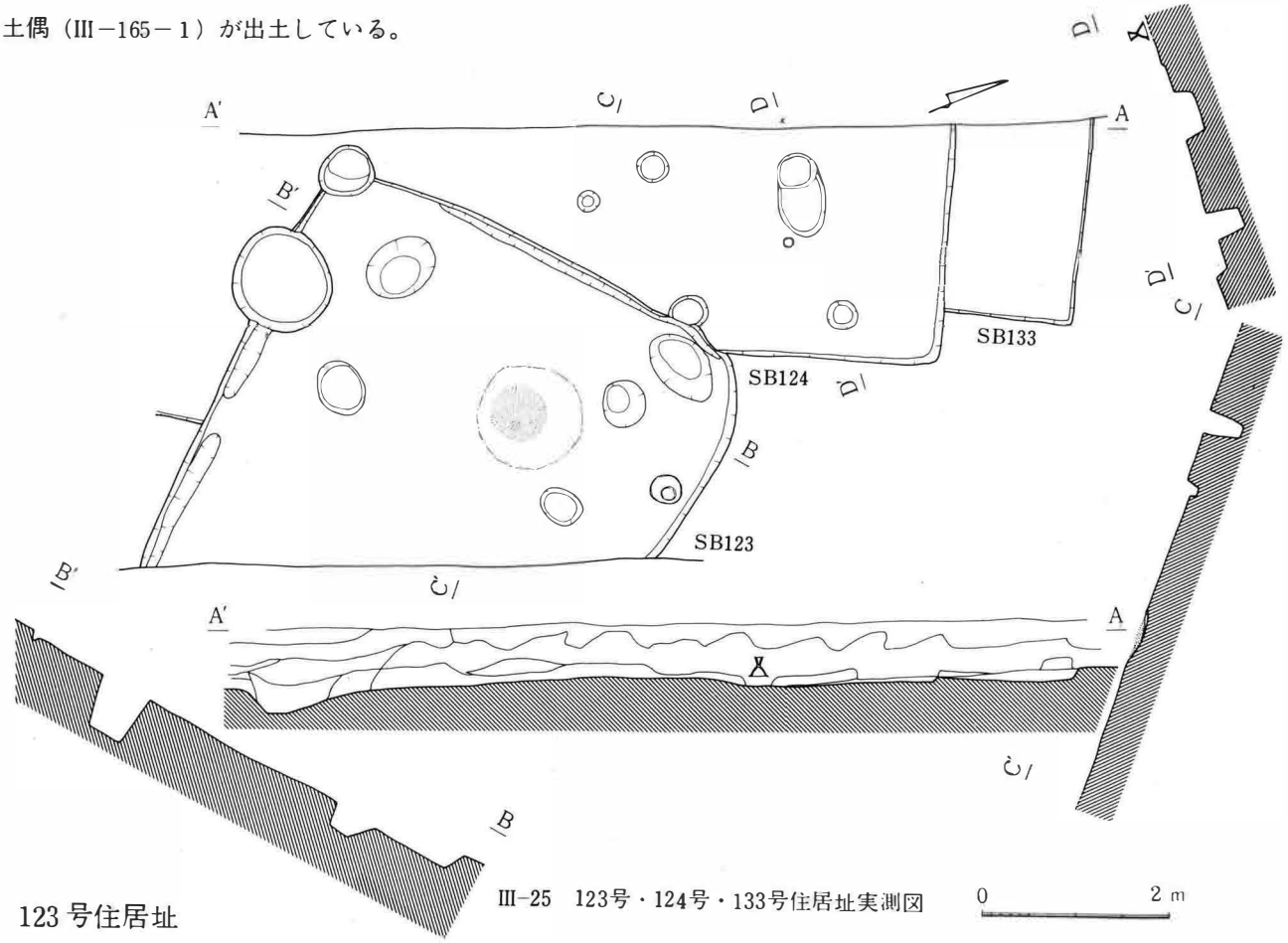


III-23　120号住居址出土土器(1)



III-24　120号住居址出土土器(2)

III－23－1～22は縄文が施されるもので、1～4には口唇部に、他は頸部から体半下半までの施分である。1・2には指圧痕がみられ、6には櫛歯状工具の平行線文が、9・16・17・21・23・24には棒状工具によって列点文が施される。ただ9と21には楕円区画文内を埋めるもので、22は竹管施文具によっている。5・14・15は、1本の横線文で横帯区画され、一帯間隔で縄文がめぐらされる新しい要素の文様である。25はていねいにヘラミガキされ、細い棒状工具で平行線文が描かれる。27は連続した菱形重ね文になるものと思われる。28はハケナデにより段をなす。30～40は甕形土器で、櫛歯状工具が多用される。30は面取りされ、31は口縁部に、32・33は体部最大径部に列点がめぐる。37・39は、横線文区画内を波状文で埋める。III－24－1は、床面から出土した蓋で、2孔一対の円孔がある。2～7は、在地の土器とは趣きを異にする一群である。他に石鏃（III－165－23）、横刃石器（III－168－11）、土偶（III－165－1）が出土している。

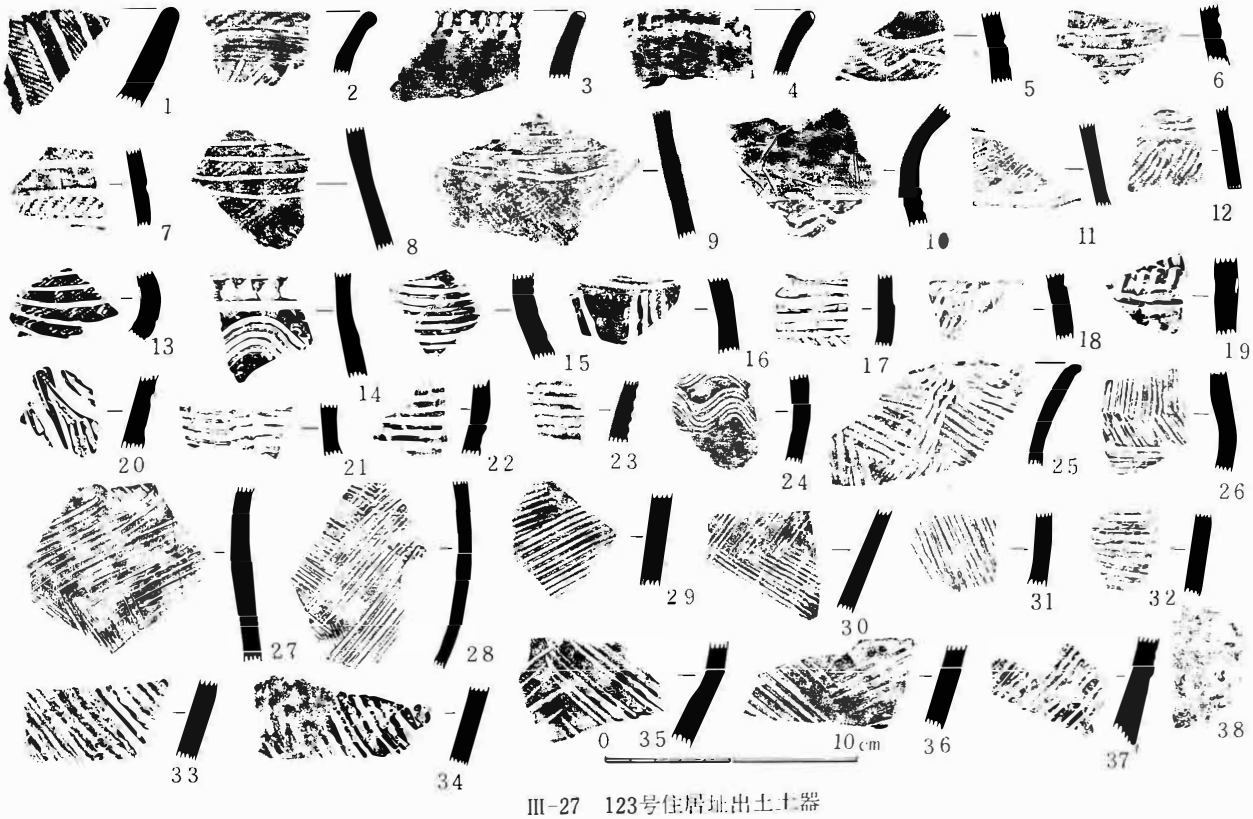


III-25　123号・124号・133号住居址実測図

123号住居址

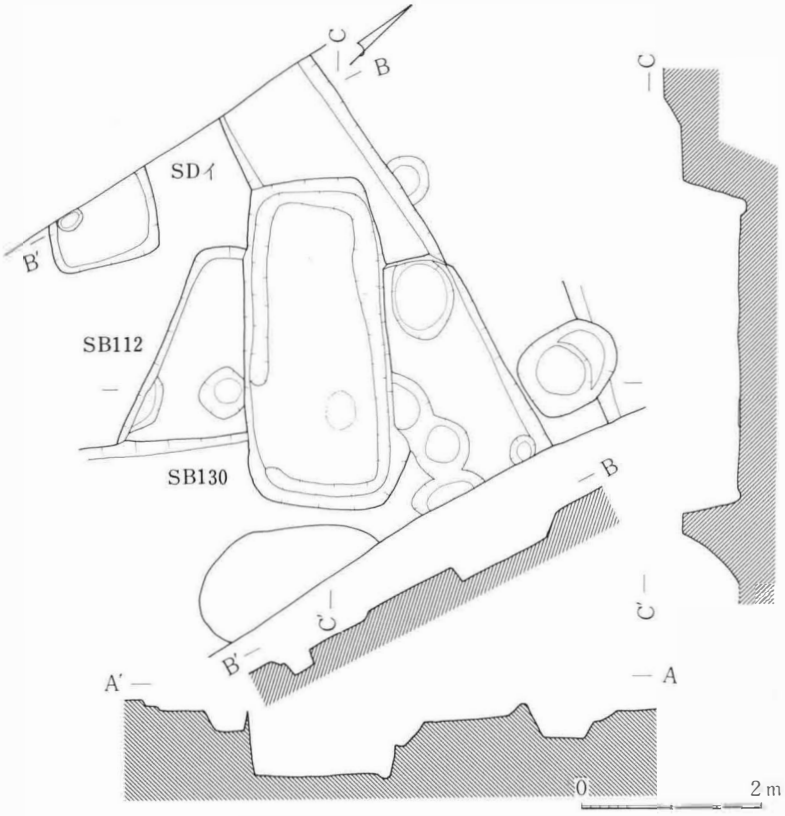
複雑な住居址群の中で、他遺構検出後確認された住居址である。形態は隅丸方形で、南北規模は5.05mを測るものの西壁は調査区外で数値を求めるに至らなかった。炉に対する主軸方向は、N 39°Wである。壁高は浅く東壁で12cmを計測するにすぎない。主柱は4個と考えられるが、6個の可能性もある。その径は、45～60cmと大きなもので、深さも27～57cmに及ぶ。炉は中央よりやや北東寄りにあり、径60cmの地床炉で、周辺に炭化物が積もる。このほかの遺構として北壁と西壁直下に周溝が認められる。

III-26　124号・123号・122号住居址



III-27　123号住居址出土土器

1は斜行沈線文間を縄文で飾る口縁部で、2には縄文と斜行沈線文、4の口唇部は間隔をおいて2個の刺突文が施される。5～13は縄文地になるもので、13を除き平行線文がめぐり、10には棒状工具による波状文がみられる。9の頸部には太い櫛歯状工具による平行線文が、体部下半は綾杉状条痕文になり、上半は羽状条痕文になる。波状文は14と24にみられる。列点文は、14・18・19に施されるが、19は縦に押し引きしている。25は甕形土器で、口縁部より不規則な綾杉状条痕文が施される。このほかこの住居址から、横刃石器（III－168－12）、偏平片刃石斧（III－167－11）が出土している。



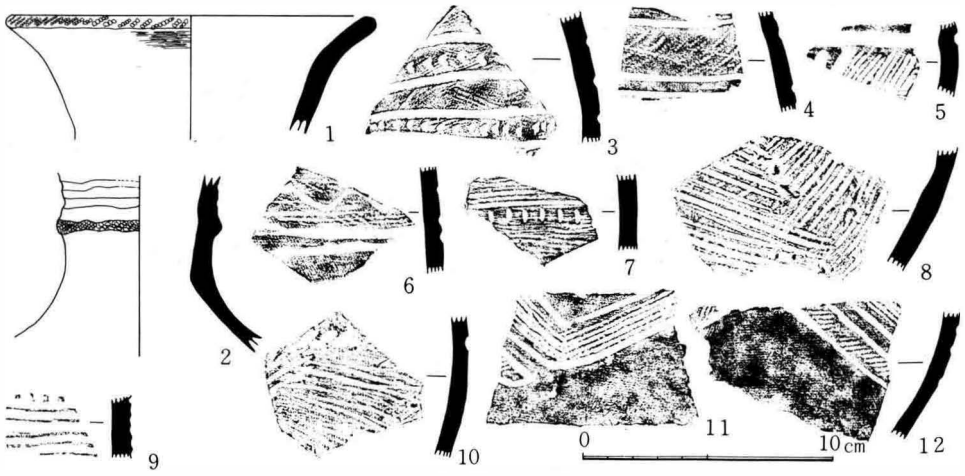
III-28　134号住居址実測図

イ号溝址検出中発見された住居址で、覆土は暗褐色粘質土で周辺の土質と非常に良く似ていたため、単なる土壙かと考えていたが、130号住居址の床面の調査で平面形態を確認することができた。

住居址の形態は、隅丸長方形を呈し、長軸方向は、N 45°Wになる。長軸規模は、3.6 m・短軸 1.6 mと小形のもので、従来から小竪穴と呼称されている。掘り込みは直に近く、北壁 61 cm・南北 60 cm・東壁 53 cm・西壁 62 cmと深い遺構である。床面は平坦で、軟弱である。施設として南西隅部を除き幅 28～15 cm・深さ 10 cm前後の周溝がめぐる。また東壁より径 35 cm程の炭化物が認められたほか、柱穴は確認されなかった。周溝のめぐらない部分が入口の可能性がある。

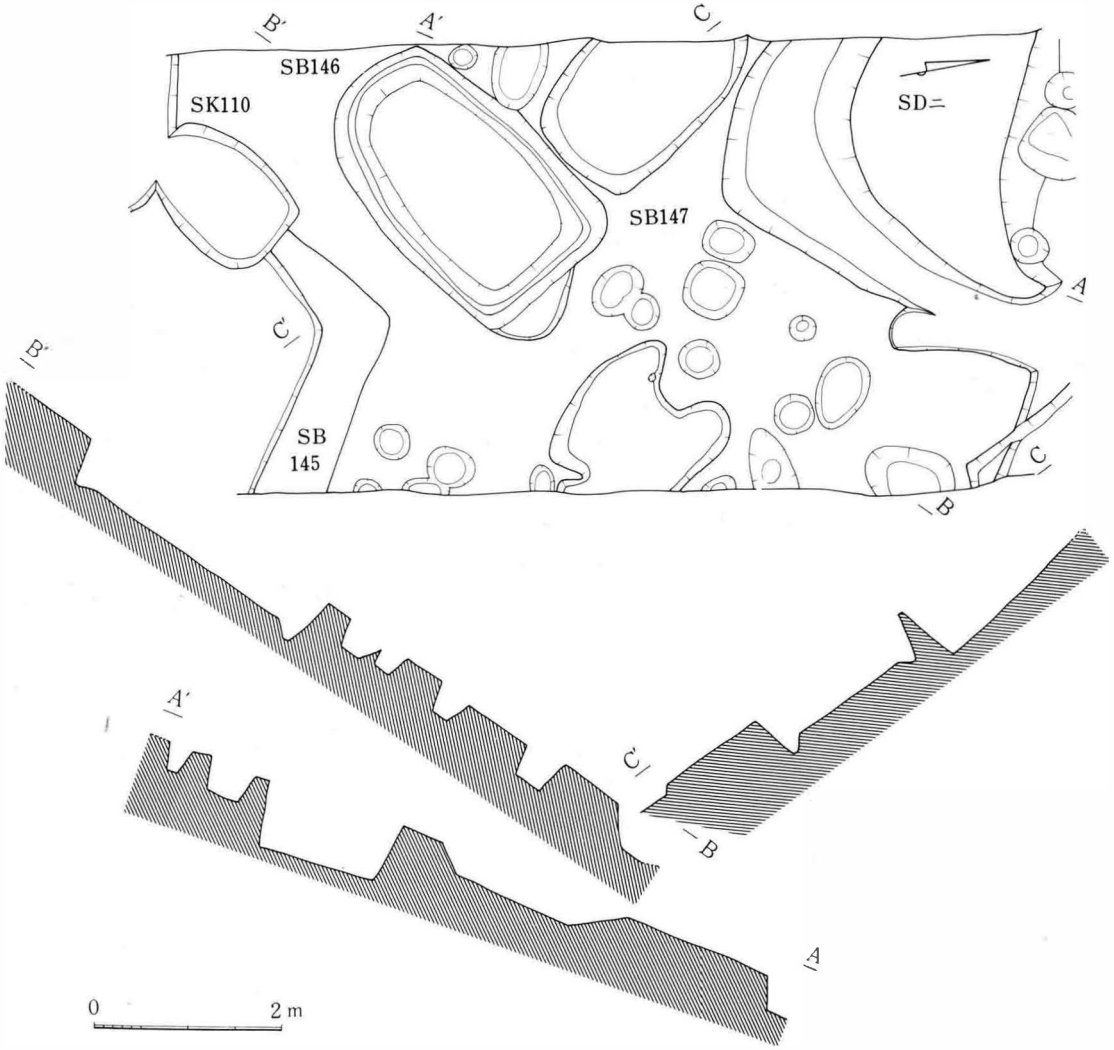
III-29　134号住居址

134号住居址　出土土器（III－30）　出土土器片の量は少なく、図示が可能なものは2点にすぎない。7・8・10以外は壺形土器であろう。1は口縁部片で、口径16.5 cmを測る。口唇部に無節の縄文がころがされるほか、ハケナデ整形痕が残る。内面の整形は、横方向のヘラミガキ痕がみられる。2は頸部から肩部にかけての実測図で、中位に凸帯をめぐらし、その上を縄文で施文する。この上部に2本の平行沈線文がある。整形は内外ともハケ整形後ヘラナデで仕上げている。共に黄褐色を呈し、焼成は良好である。3は縄文地を横位の沈線文で区画し、一区画をあけ半截竹管施文具による列点文が、7の列点文は、ヘラ状工具で、9・10は、櫛歯状工具によるものと考えられる。



11・12は同一個体で、棒状工具による山形沈線文内を櫛歯状工具と縄文によって埋める。

III-30　134号住居址出土土器

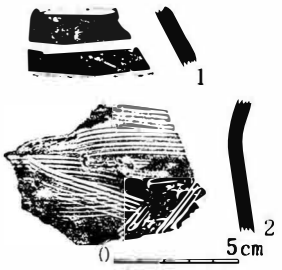


III-31　145号・146号・147号住居址実測図

146号住居址　形態は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN 56°Wである。規模は主軸3.0 m・短軸1.95 mである。掘り込みは東壁で45 cm・南壁39.5 cmを測り、他はこの範囲内にある。床面は平坦で軟弱であり、周溝が壁下全周する。

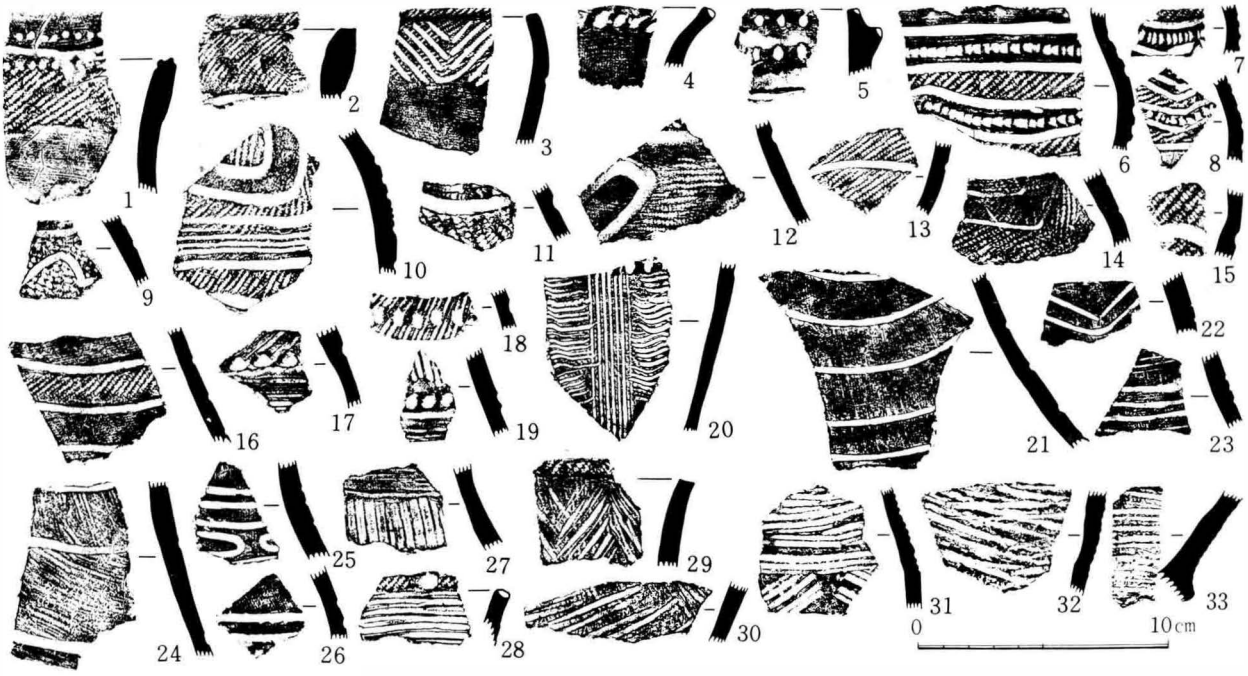
147号住居址　形態は隅丸長方形で、主軸N 37°Wになる。規模は主軸(2.2) m・短軸1.5 mを測り、掘り込みは深い東壁で64 cmである。床面は平坦で軟弱である。他の施設・柱穴等は認められない。

III-32　144号・146号・147号住居址、二号溝址



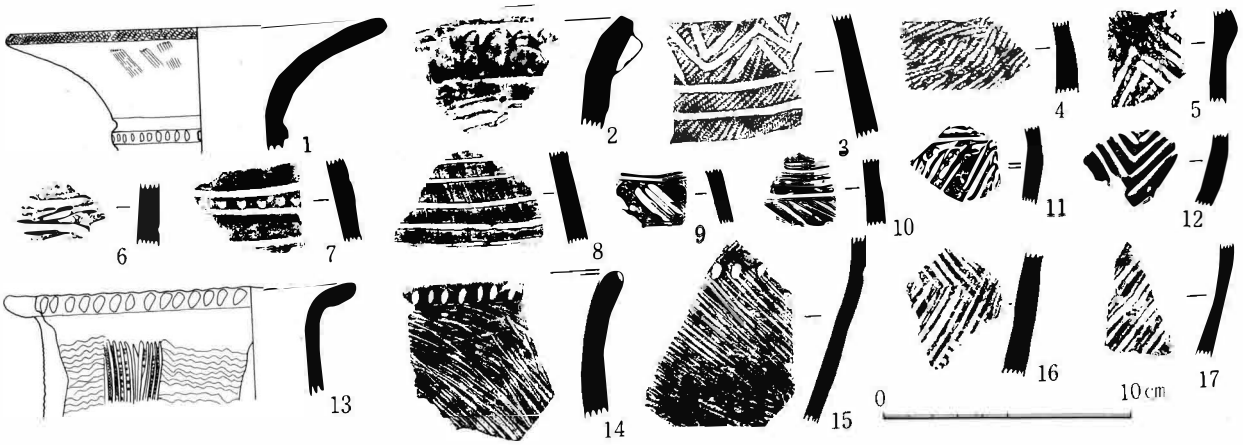
III-33　147号住居址出土土器

この住居址から出土した土器片は、10点余りである。1は壺形土器の肩部片で、ヘラによるていねいなミガキ整形後に3本の沈線文が描かれている。2は甕形土器片で、櫛歯状の工具の施文である。



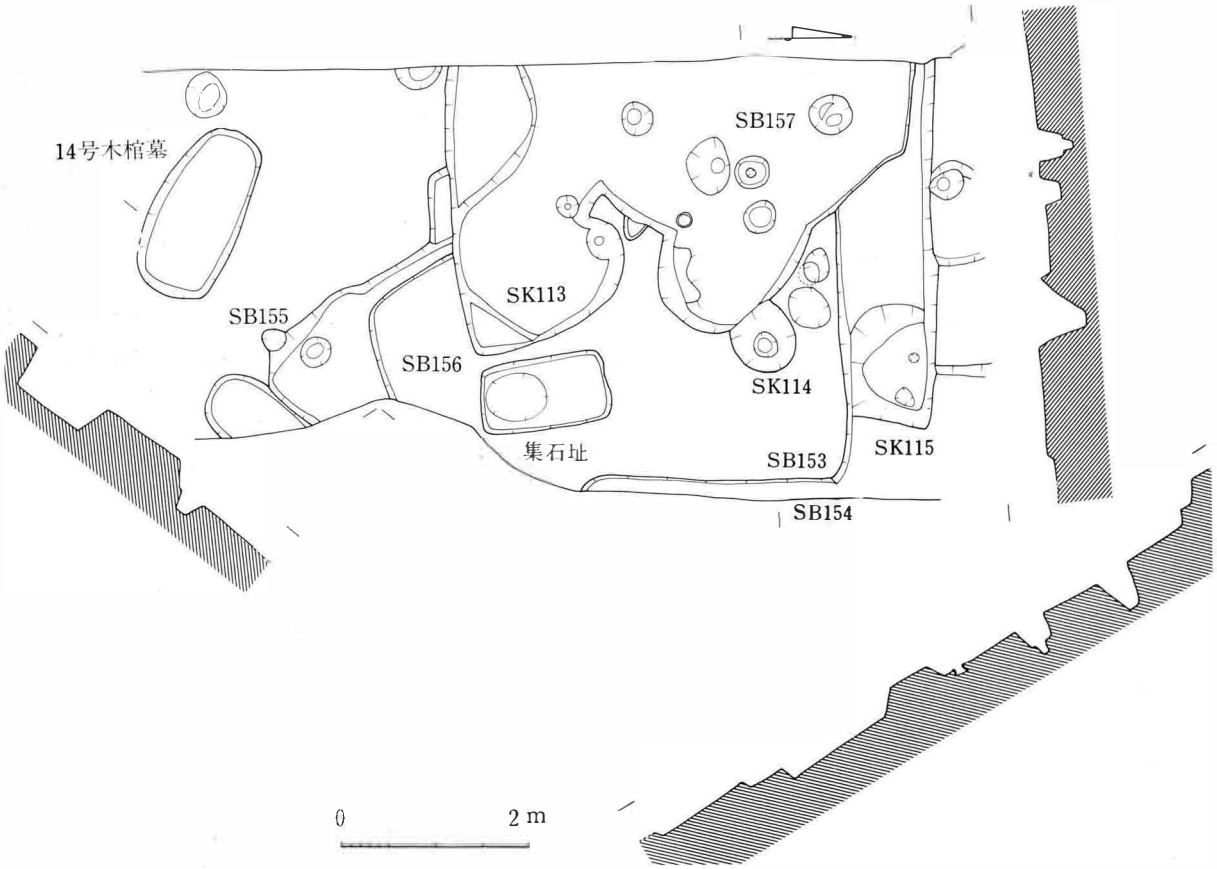
III-34　146号住居址出土土器

新旧合わせもった土器片が、そして特異な文様構成が認められる。新しい要素として、16･21の横帯文、20の波状文様の櫛歯状工具による施文にみられる。1～26は壺形土器で、他は甕形土器であろう。1・2は有段口縁で、1の口縁内外は、列点様刺突文になる。3は浅鉢か無頸壺であろう。5には突帯がめぐり、口唇部とともに不連続の列点文がつけられる。21～23･25･26は、ヘラミガキ後の横位の沈線文の施文方法をとっている。ただ25の横帯文の中に区画文があることが注目される。これらは小砂粒を含み、茶褐色から暗褐色を呈し、焼成良好なものである。6～8の列点文は半截竹管で、9・17～19は棒状工具による。32・33は深い条痕文が施される。34は無頸壺で、1本の波状沈線になる。



III－35　147号住居址出土土器

1の口縁部はラッパ状に開き、頸部に粘土紐による凸帯があり、その凸帯上を列点文がめぐらされている。また13の甕形土器は、栗林式の標準土器である。図示した中の2は、凸帯の上に、押圧列点文がめぐる。3は縄文地を棒状工具により山形文を描き出す。14・15は甕形土器である。7はヘラミガキ後の施文で、8はハケ整形後の施文である。4は縄文地によるもので、5は瘤状の突起が認められ、16・17は体部下半で条痕文状の文様になる。

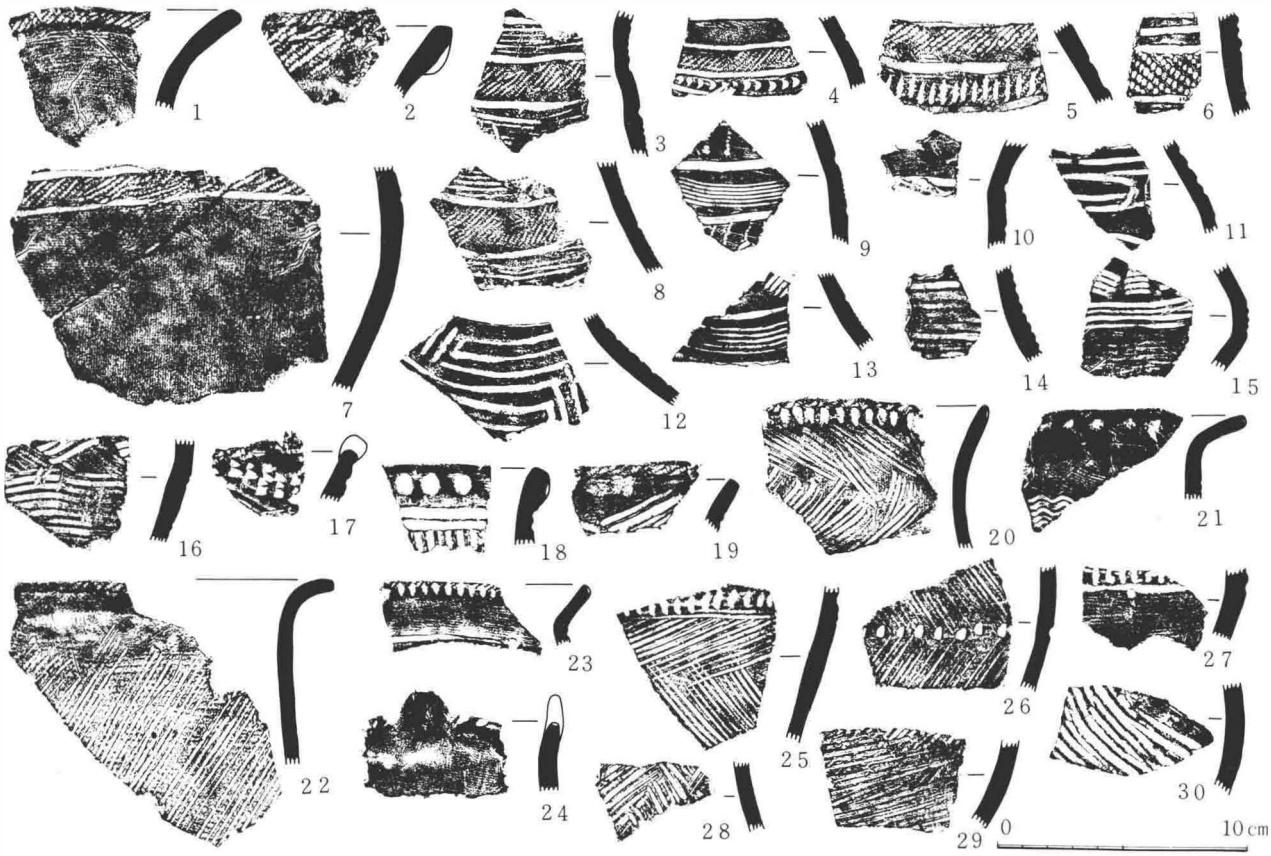


III－36　155号・156号・157号住居址実測図

155号住居址　156号・157号住居址により切られ、西壁と南壁の一部付近がかろうじて残っている。形態は方形になると思われる。規模等は不明であるが、西壁の掘り込みは22㎝を測る。床面は平坦で軟弱である。柱穴は西壁下にみられるが支柱穴であろう。

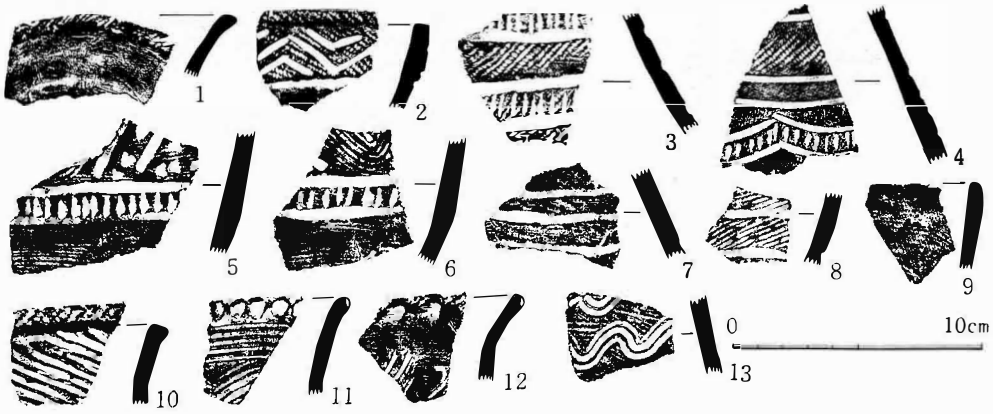
156号住居址　西側は157号に、東側は154号に、北側は溝状遺構により破壊され、155号同様南西隅部と床面の一部が残存する。形態は隅丸方形を推定するが、規模等は不明である。床面は平坦であるが軟弱である。柱穴もさだかでないが、157号内及び東壁に近接する円形ピットのどれかが主柱穴になる可能性がある。

III-37　156号・157号住居址



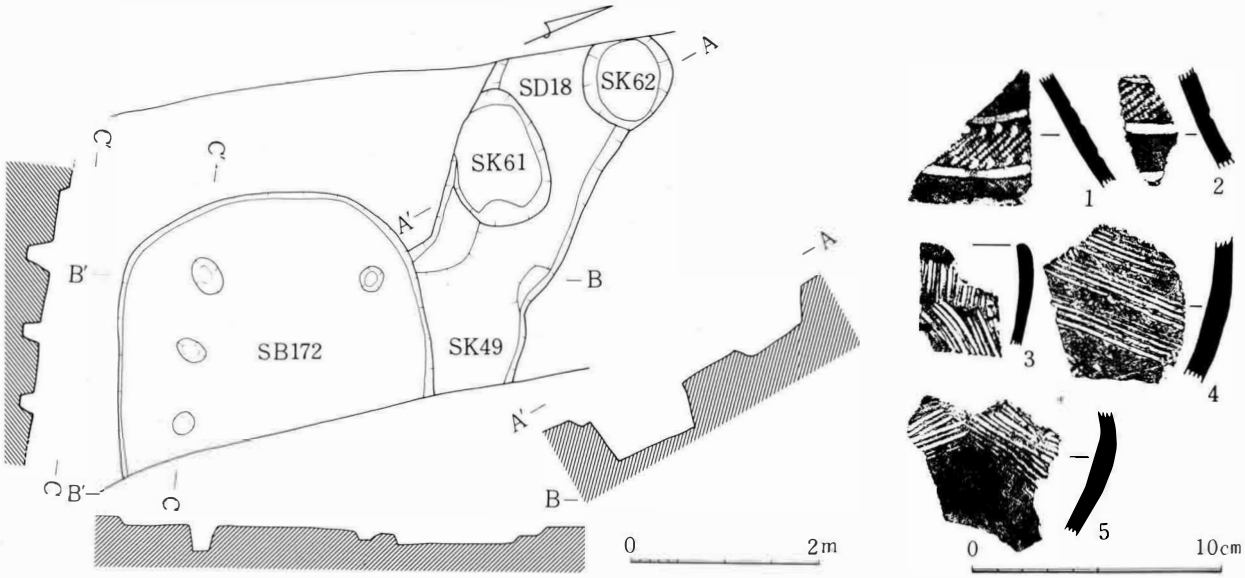
III-38　156号住居址出土土器

出土遺物の中で、2の口縁部の隆線、17の波状口縁と2本一組の列点文、24の口縁部突起文が注目される。また9には、櫛歯状工具による簾状文風の刺突文、13・15・16は平行線文と斜行短線文、11は工字文風の区画文、12は同文様風の方形区画文が施される。刺突文（列点文）は4・5・17・18・20・21・23～27にみられ、4は半截竹管、18・21は棒状工具、17を除き他はヘラ又は棒状工具により縦切りの施文法による。1～17は壺形土器で、他は甕形土器であろう。



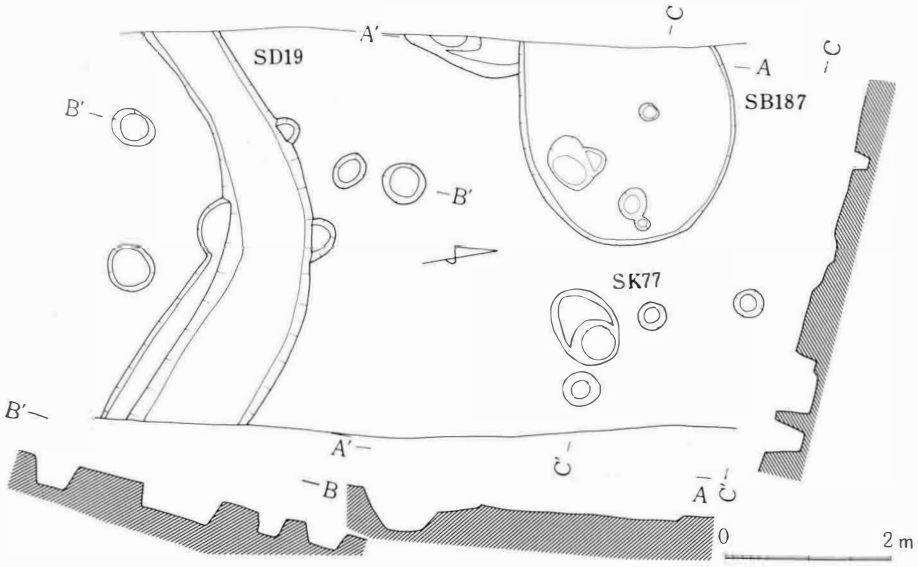
III-39　155号住居址出土土器

1～8は壺形土器で、他は甕形土器と思われる。この土器群の中で注目される文様に3～6の列点文がある。また2には棒状工具の沈線文による山形文が描かれ有段になる。波状文は6・13にみられる。



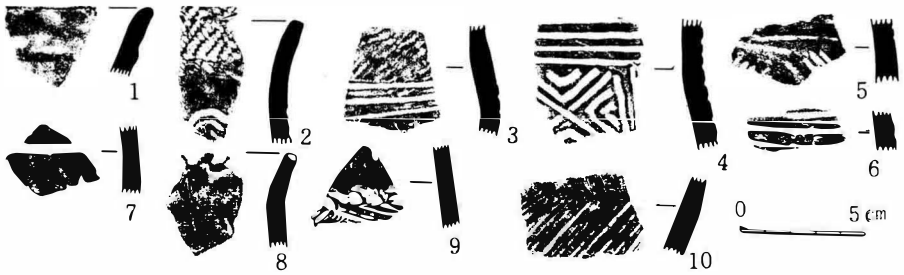
III-40　172号住居址、18号溝址、土壙61・62実測図・172号住居址出土土器

172号住居址　隅丸方形形態で、短軸（南北）3.3mを測り、掘り込みは浅く10cm内外である。床面は軟弱で、主柱穴は4個または6個である。出土遺物は、図示したもののほか無文のものが数点出土しているにすぎない。



住居址の東半分だけ検出され、その形態は楕円形を呈する。長軸規模は不明で、短軸は2.56mを測る。柱穴は4～6個と推定される。掘り込みは浅く、東壁の17cmが最深の数値となる。床面は平坦で軟弱である。炉址は不明である。

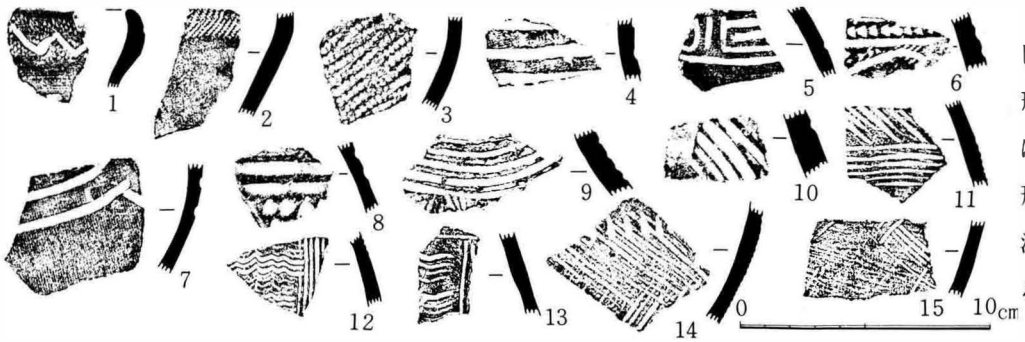
III-41　187号住居址、19号溝址実測図



出土量は少なく、有文土器片は図示した10片にすぎない。2の壺形土器口縁部は縄文帯で、頸部はコンパス文風の波状文になる。4は頸部で、四方に山形文を配する区画文になる。

III-42　187号住居址出土土器

151号住居址(III－286)　北壁と西壁の一部をかろうじて検出した住居址で、形態は隅丸方形が予想されるものの、規模・主軸方向は不明である。また柱穴・炉址等の施設は確認できなかった。床面は平坦で軟弱である。



1の口縁部は、肥厚し、縄文地に1本の山形文が配される。5には方形の区画文が、甕形土器の12･13には、波状文とそれを区画するT字状文がみられる。

III-43　151号住居址出土土器

207号住居址(III－303)　形態は隅丸方形を呈するものと思われる。規模は東西3.2mを測るが、他は不明である。掘り込みは、西壁で20cmを測り、床面は軟弱で平坦である。

イ号溝址(III－28)　112号住居址の下部から検出され、西から東へ傾斜する。西側幅1.25m・深さ12cm、東側幅1.45m・深さ22cmになる。

ニ号溝址(III－30)　147号住居址の隣接する溝で、東西方向から南北に屈曲する。南北幅1.15m・深さ32cm、東西幅0.8m・深さ40cmのU字溝になり、ト号溝址と重なる。

22号溝址(III－301)　環状になるU字溝で直径約6.9mを測る。溝幅は38cmで、深さ9cm前後である。

土壙イ(III－344)　形態は隅丸方形を呈し、長辺84cm・短辺82cmを測る。

土壙ハ(III－51)　東側半分は調査区外のため全容不明であるが、直径75cm・深さ31cmになると思われる。

土壙ニ(III－51)　形態はほぼ円形を呈し、長軸1.1mで、深さは43cmを測る。

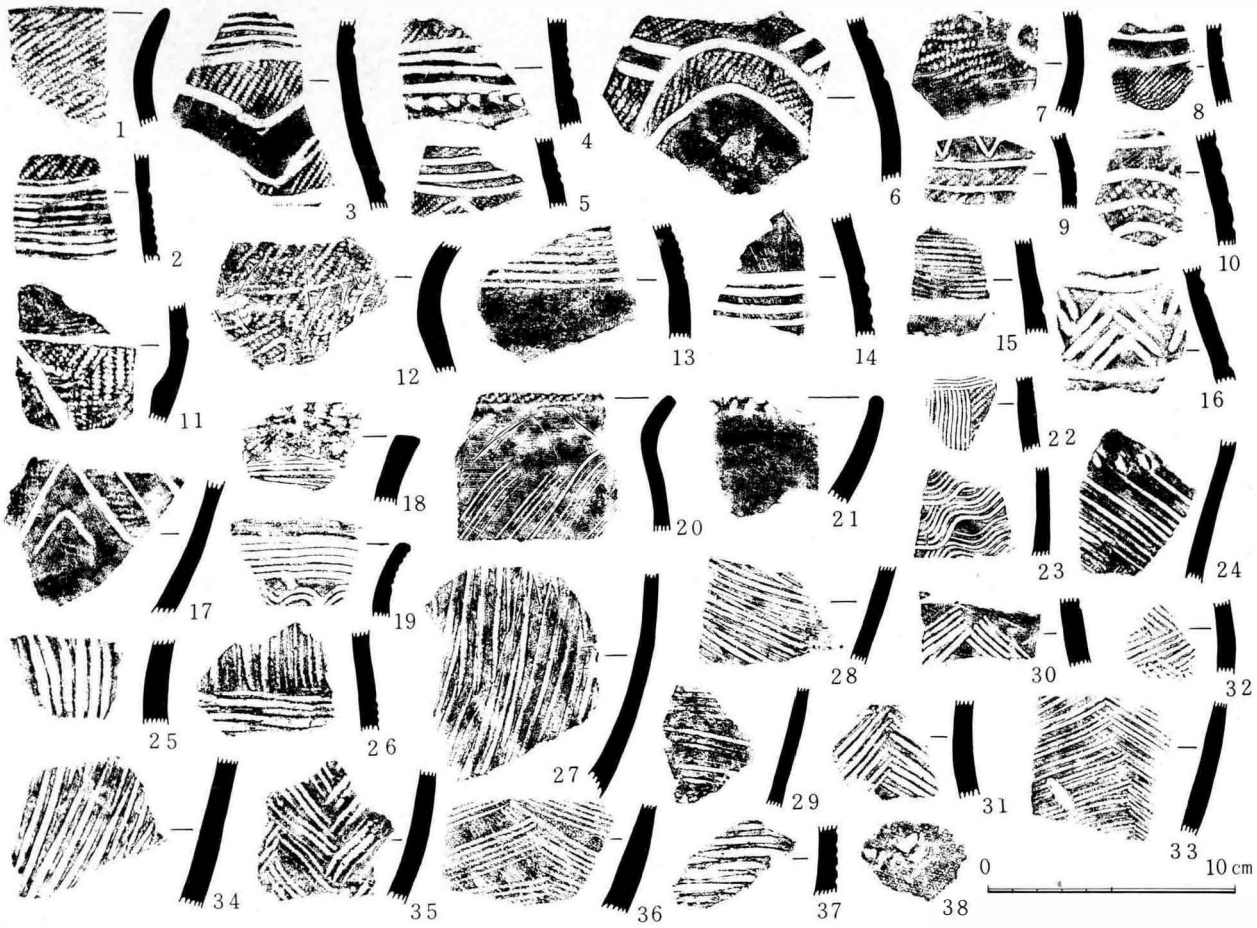
土壙ト(III－51)　形態は楕円形を呈し、長軸1.42m・短軸0.88m・深さ41cmを測る。

土壙チ(III－51)　形態はほぼ円形で、直径75cm・深さ47cmのピット状遺構である。

土壙ヌ(III－51)　長方形を呈し、長辺1.08m・短辺0.92m・深さ25cmで、東南隅に径20cmのピットがある。

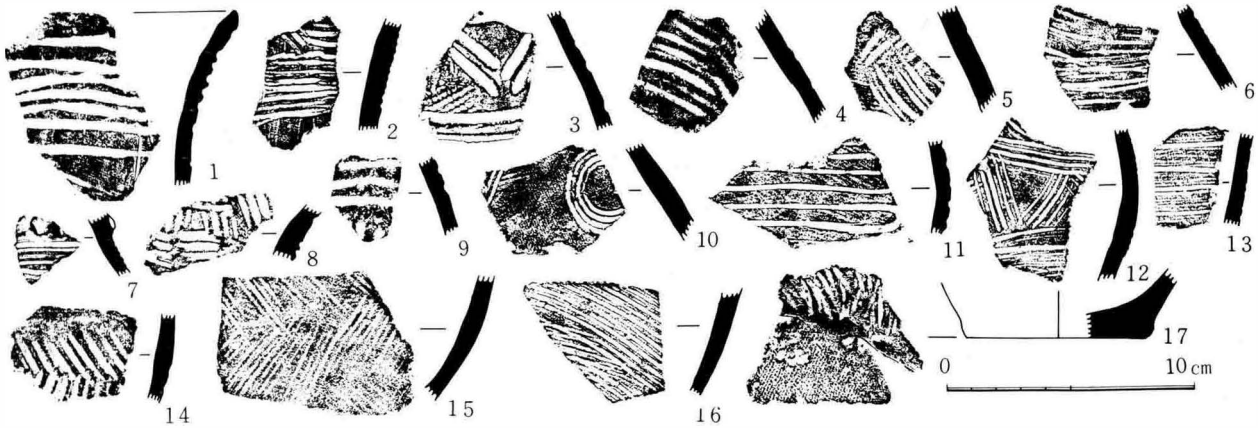
土壙ル(III－21)　120号住居址と重複関係にある遺構で、形態は一辺80cmの隅丸方形を呈する。

土壙カ(III－66)　形態は長方形を呈し、長辺1.3m・短辺1.12m・深さ26cmを測る。



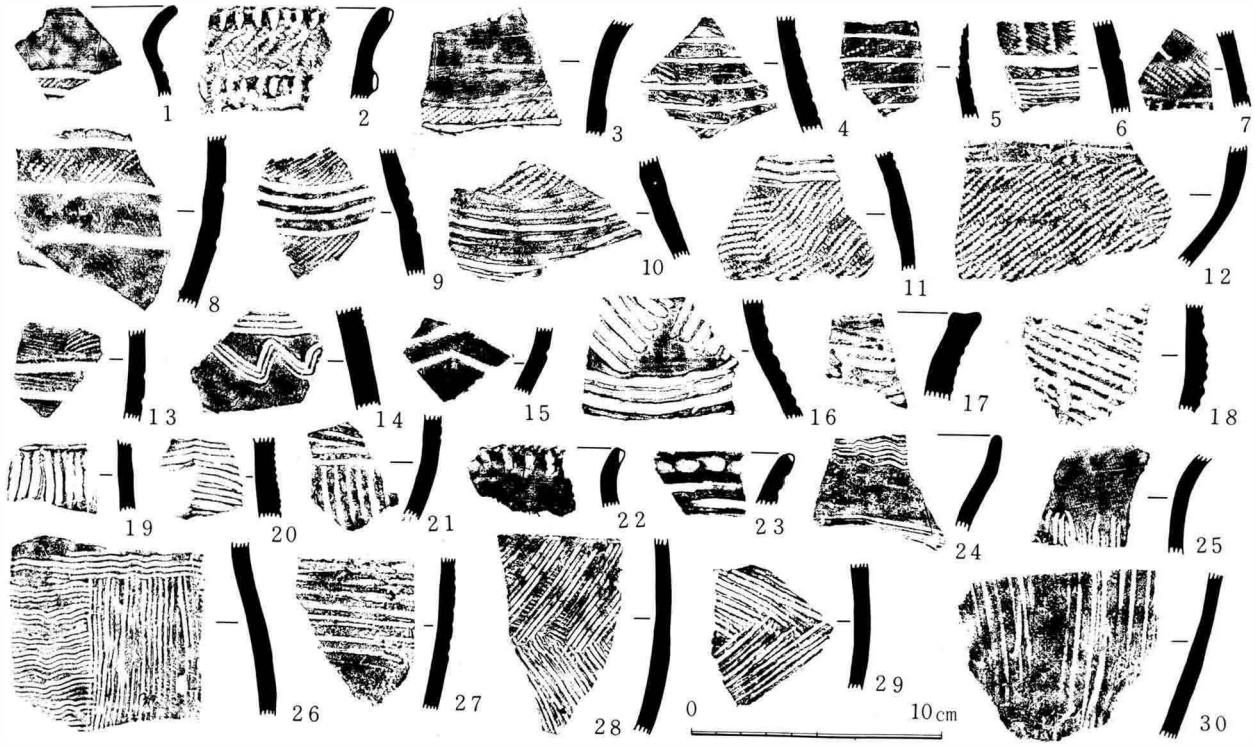
III-44　207号住居址出土土器

この住居址からの出土遺物は、一部分の検出でありながら、比較的多くの有文土器片を得た。1は、口縁部片で、縄文が施され、2～12・17・22は縄文と沈線文による文様構成をもつ一群である。3・5・9・17は山形文を、7・10に円孤文が、4には列点文がみられる。以上の施文具は、14～16と同様太い棒状工具によっている。前記したうち、2・3と他のものは、櫛歯状工具またはハケ状工具によって施文されている。18の口唇部は、3本歯による列点文が、22には縄文とT字状文が、19の口縁部片には平行線文とコンパス様波状文、23の帯様波状文、30の相対する斜行短線文及び25・27・34の2本歯による条痕文が注目される。38は底部片で、布圧痕を残す。



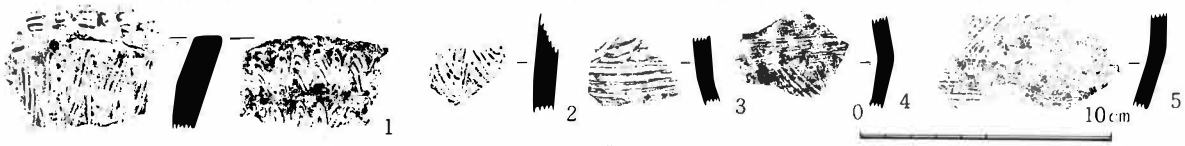
III－45　二号溝址出土土器

1はゆるく外反する口縁部で、棒状工具による平行沈線文が特異であり、2の中位にある区画線が波状になる点注目される。また3・8には太い沈線が、11にはハケ整形後細い平行沈線と同工具による区画文が、12には平行線文下に条線による山形文そして下部に条痕文が見られる。7は頸部片と思われる部位に列点文が付され、10は同心円文が描かれる。17は底部とその上部で、太い条痕文が底部まで施され、底部は布圧痕を残す。



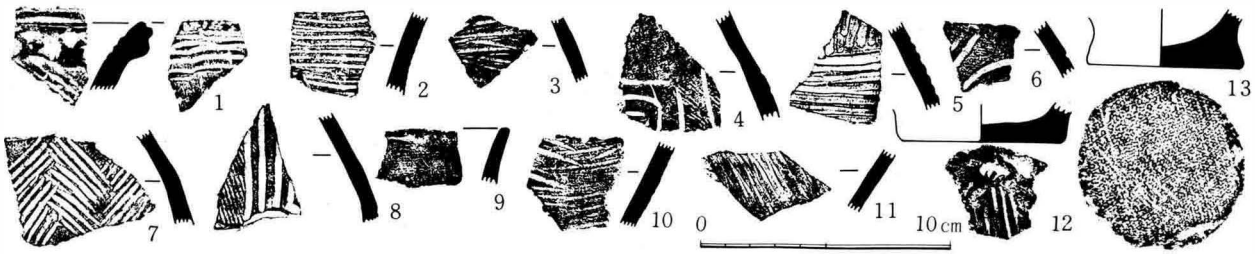
III-46　イ号溝址出土土器

溝址という性格から、他時期の遺物を包含する例が多い。1はくの字に屈曲する頸部下に沈線と縄文が施文される特異な器形になる。2は口唇部に列点文・縄文、頸部に帯状隆帯と列点文が、3の縄文帯が凸帯状になり、6には櫛歯状工具による列点文が、14にはコンパス様の波状文が施される。ただ24･26にみられる波幅の長い波状文とそれにT字状文が施された甕形土器片が出土している。18は白黄褐色を呈し、移入品と思われる条痕文土器である。



III-47　22号溝址出土土器

1は厚口の口縁部で、口唇部に3本歯による列点文が、口縁部に同工具によるはね上げ波状文と内面に2帯の波状文が描かれる。2とともに黄褐色を呈し、胎土に小砂粒を含む。3も同手法によるが、波状文に変形がみられる。

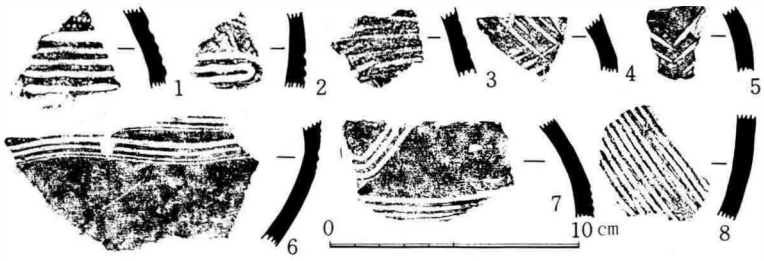


III-48　土壙イ出土土器

1の口縁部片は、内外面とも施文され、外面は凸帯がめぐり列点文が施される。岩滑式の厚口壺である。4・8は縄文地に棒状工具による沈線の区画文になる。12の底部はハケ整形で、13には布圧痕が残る。

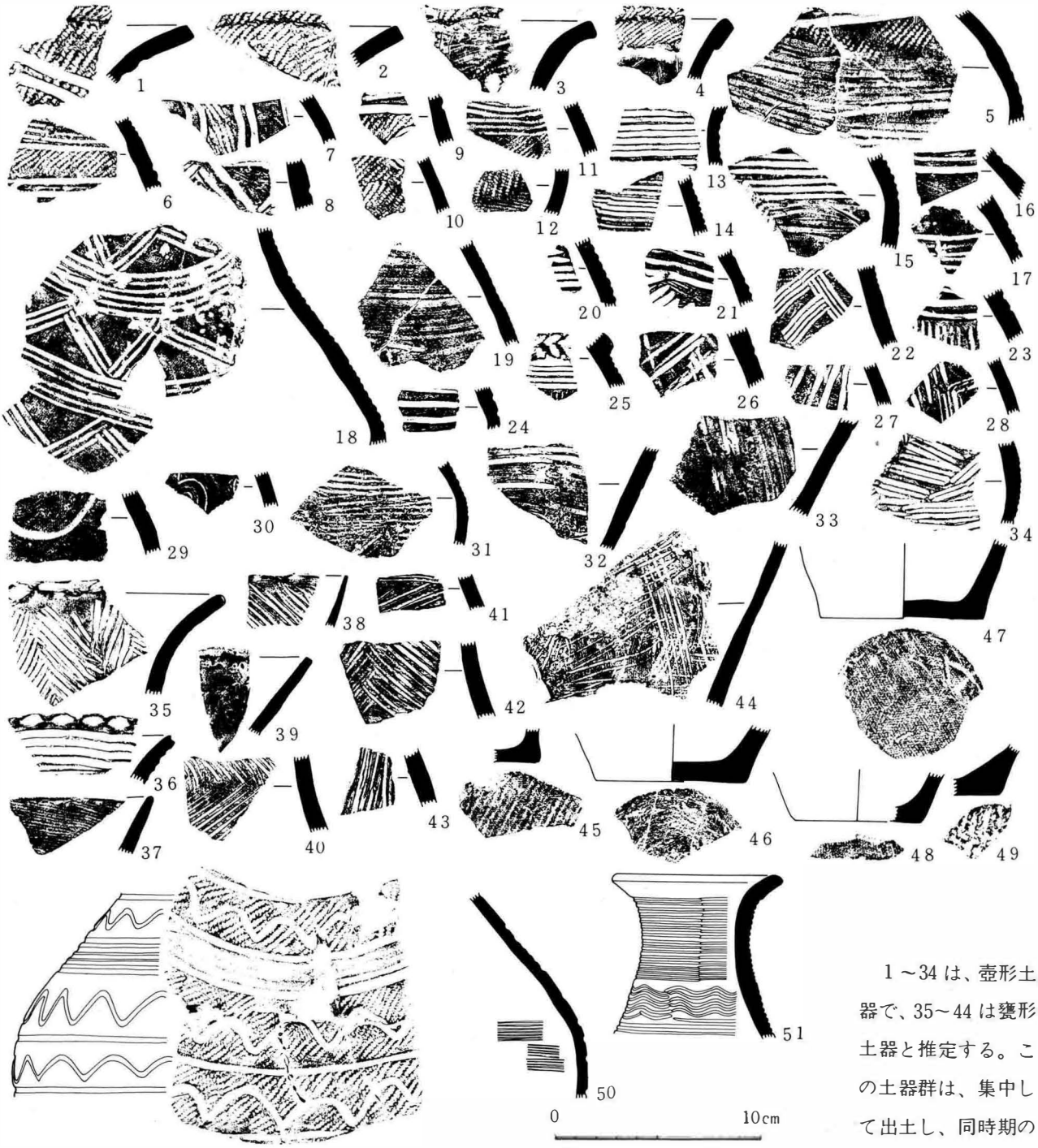
III-49　土壙ハ出土土器

1は太い4本の櫛歯状工具による平行線文と山形文を施す。2は体部平行線文が、4・5には綾杉状文が描かれ、3には列点文がみられる。



III-50　土壙ニ出土土器

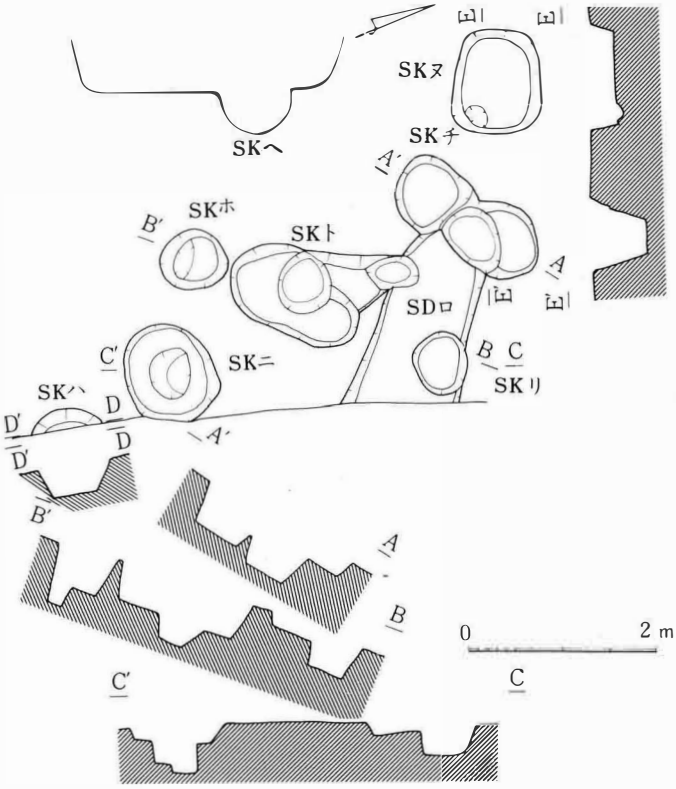
1・2は縄文地に沈線が施文される。2の沈線は重楕円区画文になる。5の施文具はヘラ状工具による。他は、櫛歯状工具が用いられ、6・7の平行線文、7の大きな波状文、4の羽状文が描かれる。8は貝殻条痕文と考えられる。



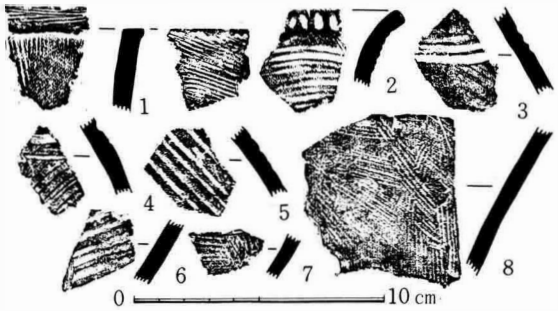
III-51　土壙ト出土土器

1～34は、壺形土器で、35～44は甕形土器と推定する。この土器群は、集中して出土し、同時期の所産と考えられる。

1は赤色塗彩される。18は櫛歯状工具による2帯平行線文間を山形文で埋める。25は隆帯の上を交互の列点文が、29･30には円孤文が、50には棒状工具による波状文、51の頸部には櫛歯状工具による平行線文と波状文が描かれる。

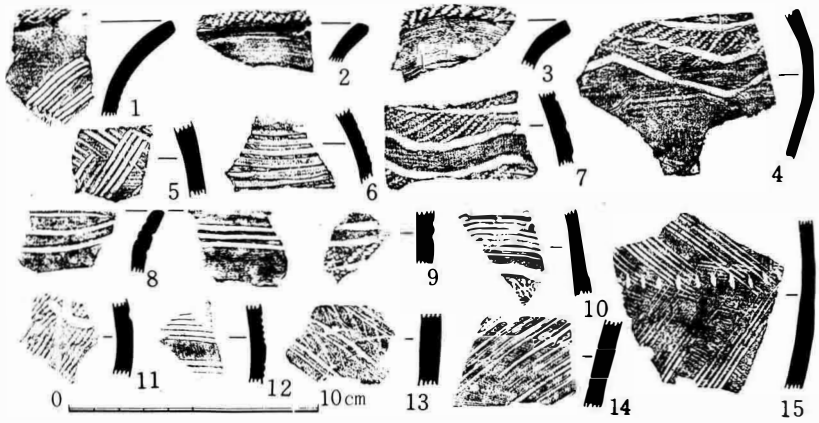


III-52　ロ溝址、土壙のハ・ニ・ホ・ト・チ・リ・ヌ実測図



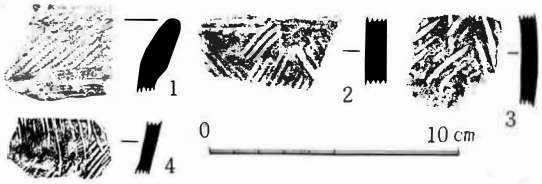
III-53　土壙チ出土土器

1の内外面はハケ目が残り、口唇部は同じ工具による平行線文が描かれる。2の口唇部に列点文が、頸部には平行文がみられる。3・4には太い沈線がめぐり、その下は条痕文になる。6～8は体部下半の破片で、櫛歯状(ハケ)工具による整形痕が残る。黄褐色から暗褐色を呈し、石英粒を含む。



III-54　土壙ヌ出土土器

1～3は、壺の口縁部で口唇部に縄文が付される。1・3には、櫛歯状工具による斜行線文が施される。8は内外面とも棒状施文具による大地式の広口壺である。4・7は波状山形文を基本文様とする。15は甕体部片で、櫛歯状工具による条痕文と列点文を配する。



III-55　土壙カ出土土器

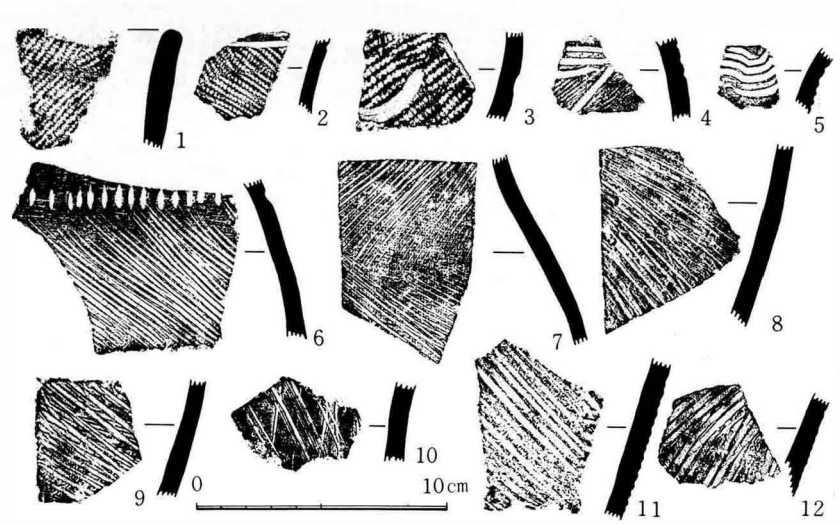
1は口縁部が有段になる壺形土器で、口唇部にも縄文が配される。2～4は、甕形土器と推定される破片で、2は櫛歯状工具による綾杉状文と平行線文の組合わせ、4は条痕文風整形施文になる。3は棒状工具による綾杉文風の沈線になる。

土壙63（III－291）　形態は楕円形を呈し、長軸1.5m・短軸0.85m・深さ10cmを測る。

土壙75（III－4）　形態は隅丸長方形を呈し、長軸1.2m・短軸0.96m・深さ54cmを測る。

土壙94（III－303）　全容は不明であるが円形の形態になるものと思われる。直径1.3m・深さ50cmを測る。

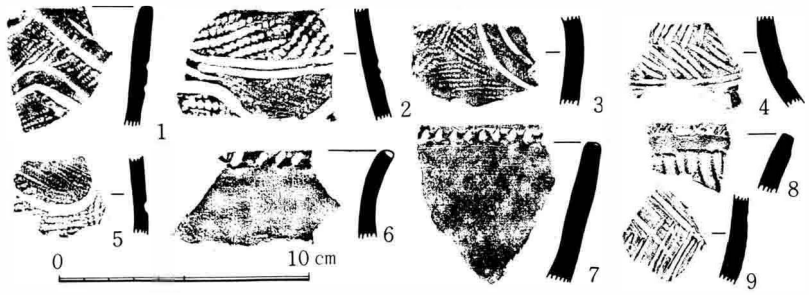
土壙95（III－303）　全容は不明であるが長軸2m・短軸1mの楕円形を呈すと思われる。



III-56　土壙46出土土器

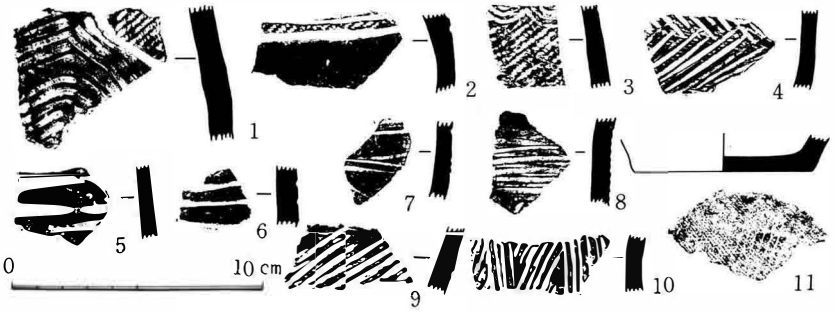
土壙46(III－397)　形態は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.6m・短軸1.2m・深さ40cmを測る。

出土遺物は少ない。1～5は壺形土器である。1は素口縁になり、縄文が施され、2は頸部片と思われる土器で、沈線文と縄文の組み合わせになる。5は太い櫛歯状工具による波状文を描く。6～12は、甕形土器で、6の列点文のほかは条痕文様の文様になる。



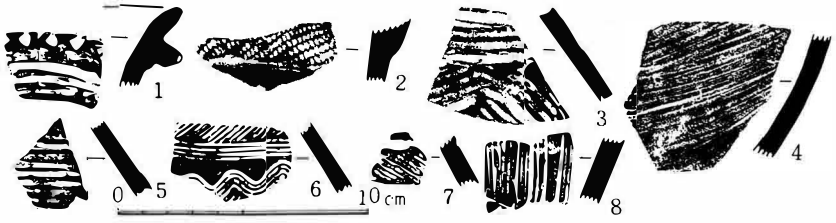
III-57　土壙59出土土器

1～5は壺形土器で、他は甕形土器である。壺の4を除くほかは、縄文地の上に棒状工具により横位の文様帯を描き出す。6・7は無文の口縁部で、口唇部に列点文が施される。8の口唇部には縄文が配され、口縁部が削られる。



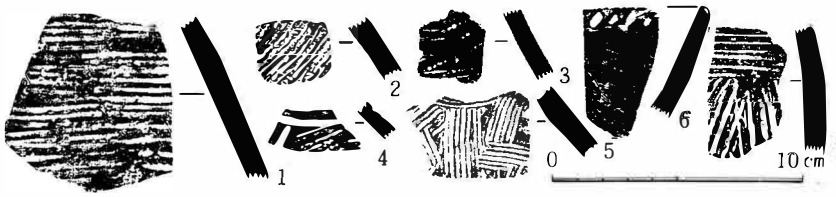
III-58　土壙74出土土器

1は太い曲線区画文内を縄文で埋め、間帯を櫛歯状施文具により山形文を施す。2は沈線により隆線文様をつくり出し、縄文施文をする。3にはコンパス文風の波状文が、5～7は棒状工具による平行沈線文が描かれる。



III-59　土壙75出土土器

1は口縁下部に、突帯を有し、その先端に列点文がめぐり、その下部は、平行線文になる。2は有段口縁で、6は櫛歯状工具の斜行線文・平行線文・波状文である。

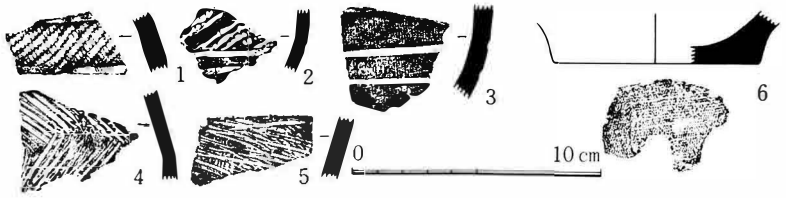


III-60　土壙95出土土器

1は4本歯の櫛状工具による平行線文が、5の平行線文下は、T字状文と羽状文を意識した施文が、7には綾杉状の文様が描かれる。

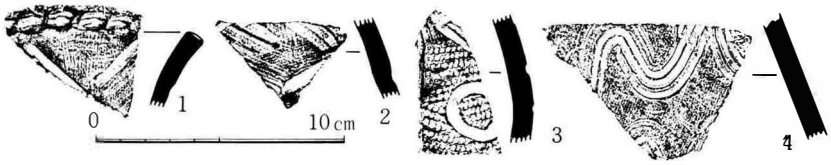
III-61　土壙 94 出土土器

1は複雑な文様構成になり、櫛歯状工具による平行線文、棒状工具の列点文・山形文と縄文である。



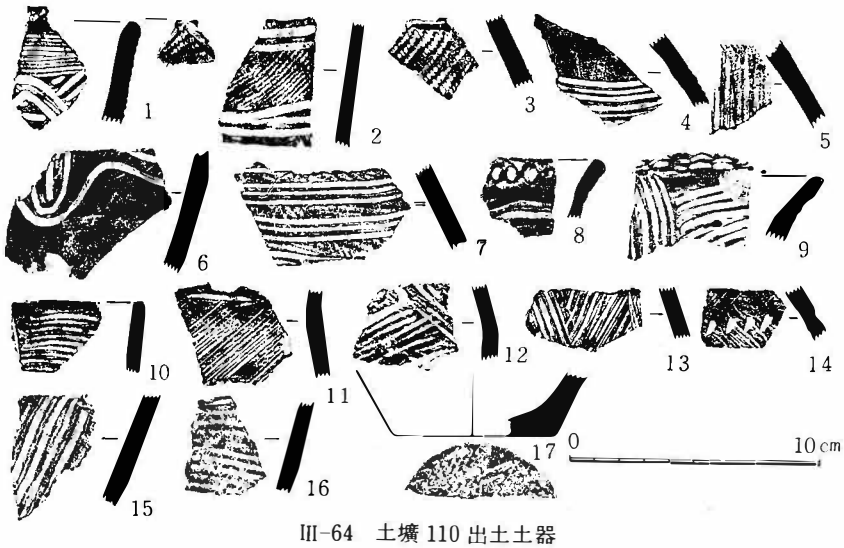
III-62　土壙 100 出土土器

壺形土器（1～4）は、縄文と平行沈線文の組み合せを基本とするが、3はヘラミガキが施された上に平行沈線文がめぐる。



III-63　土壙 103(1・2)・104(3・4)出土土器

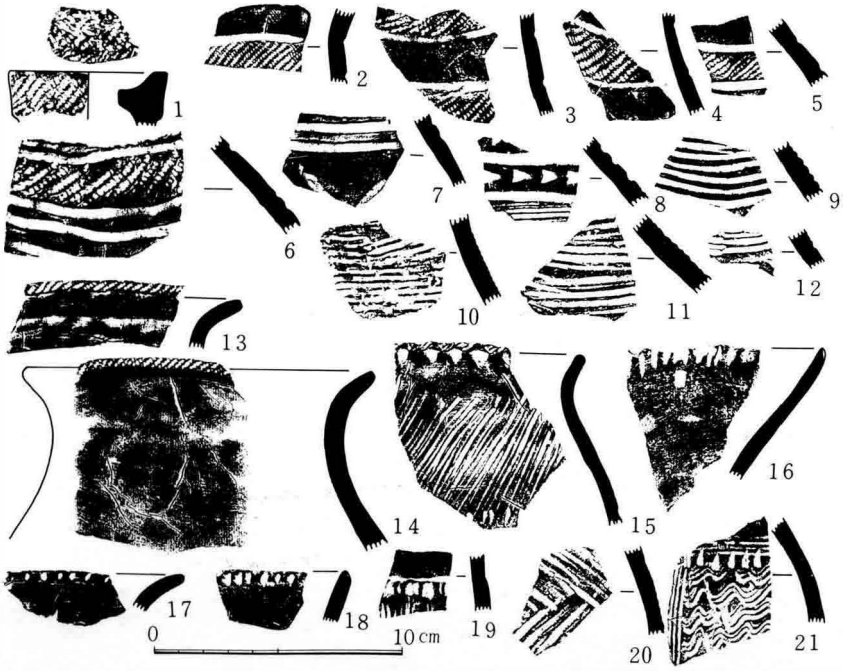
1の口唇部に櫛状工具による列点様押引き文がめぐる。3に円弧文が、4に2帯の波頂部が相対する波状文が描かれる。



III-64　土壙 110 出土土器

土壙 110（III－386）　楕円形で、長軸 1.54 m・短軸 1.15 mを測る。覆土中より獣骨片が出土しているほか、土器片は比較的多い。

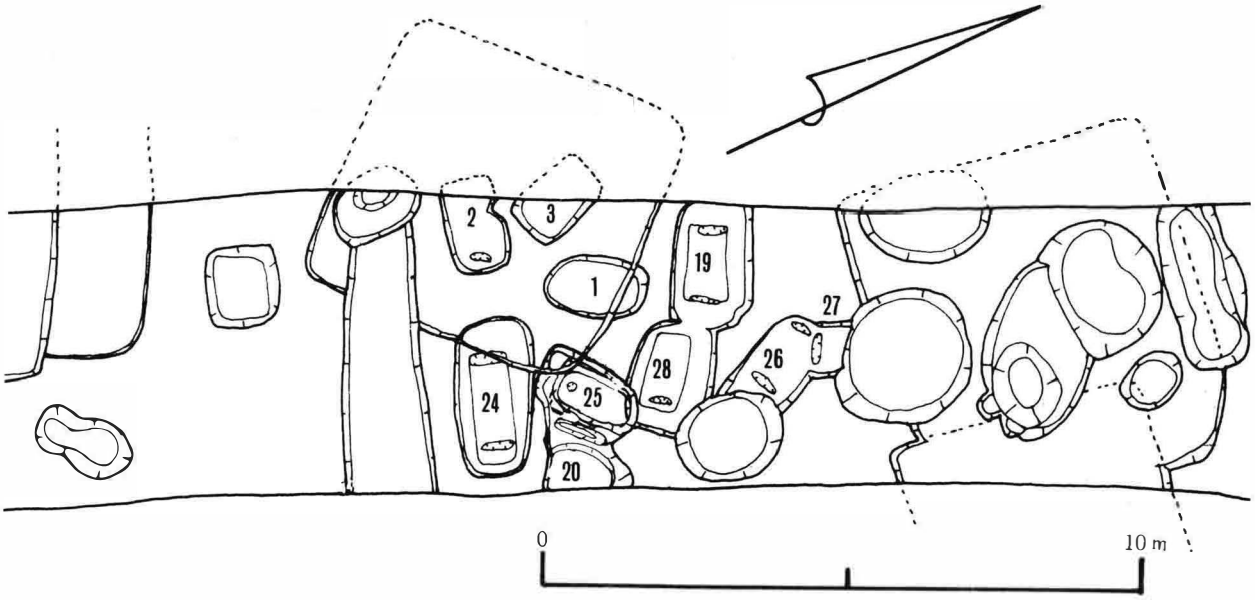
1の内側は沈線と縄文で、外面は櫛歯状工具の平行線文と棒状工具の山形文が施される。2・6も沈線文がみられる他は、櫛状（ハケ）工具による平行線文と条痕文になる。また14に列点文が施され、16の施文具には貝殻が用いられる。



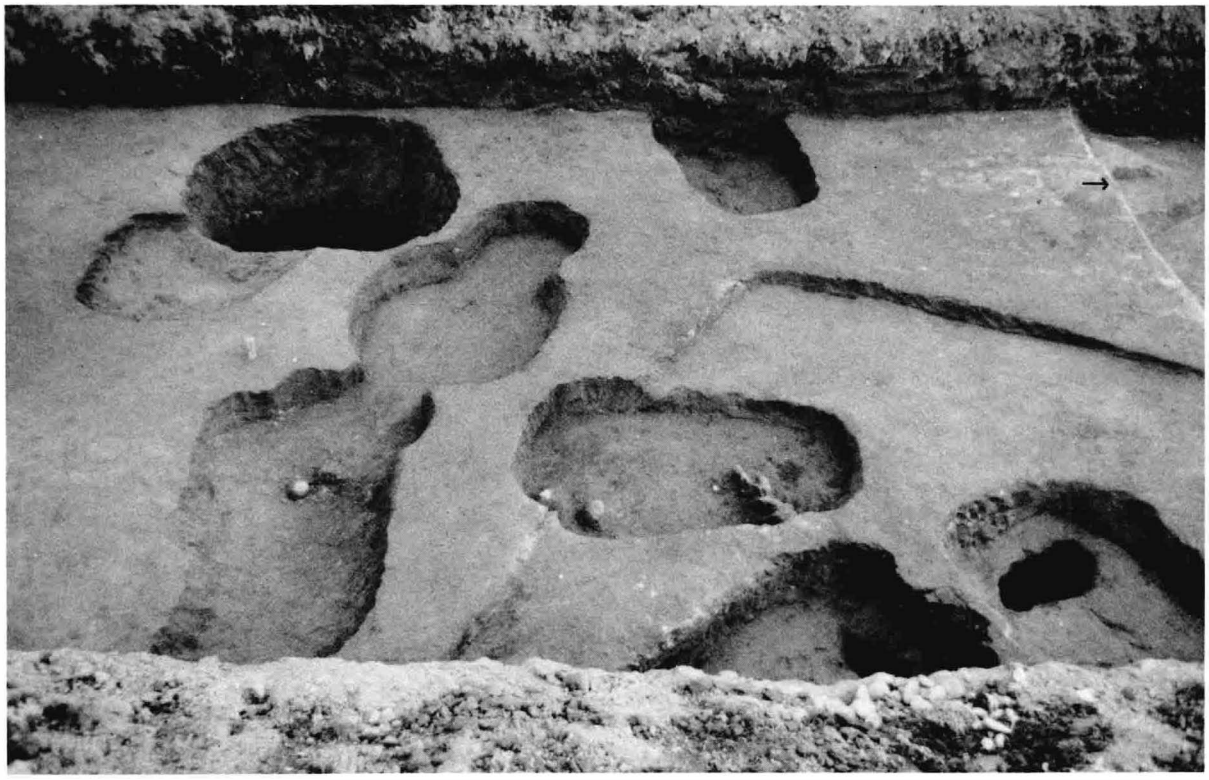
この遺構は、同レベル、同質の覆土であったため、遺物の取り上げが同一になってしまった。

1は口縁部内側に突帯がある長頸壺である。口縁内外が縄文で施文され有段になる。2～6は、横位の沈線文内を縄文で埋め、7・8の平行線文は、棒状工具による。8は半截竹管様工具による列点文が付される。14以下は甕形土器と推定され、特に21の櫛歯状工具によるT字状波状文と列点文に時期決定の要素がある。

III-65　土壙 113・114 出土土器



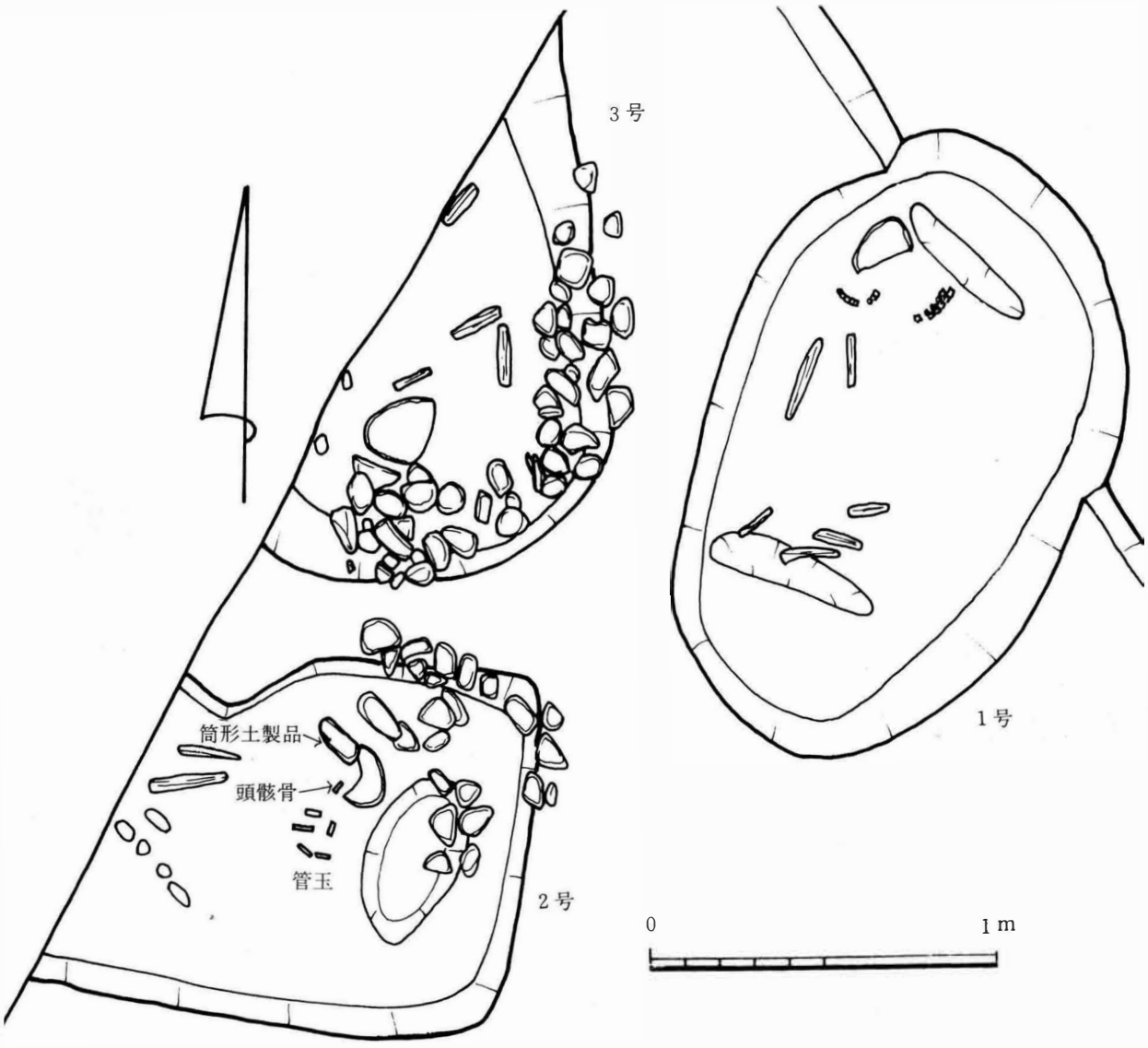
III－66　第Ⅰ墓壙群分布図

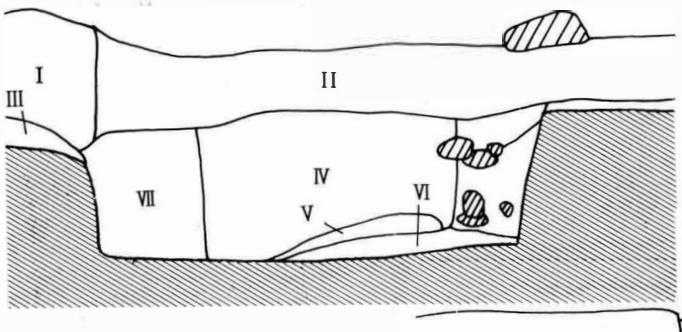


III－67　第Ⅰ墓壙群

第Ⅰ墓壙群　調査地内で最も北にある10基からなる一群である。人骨の出土をもって墓壙と確認したのであるが、周辺の土壙（ピット）から同期の遺物が出土していたり、この北には、割合規格性のあるものがあることから、そのいくつかは、墓址になる可能性がある。ただ木棺墓と推定した根拠になる縦板の小口の痕跡がなかった点を考慮に入れると単なる土壙墓になるものと考えられる。

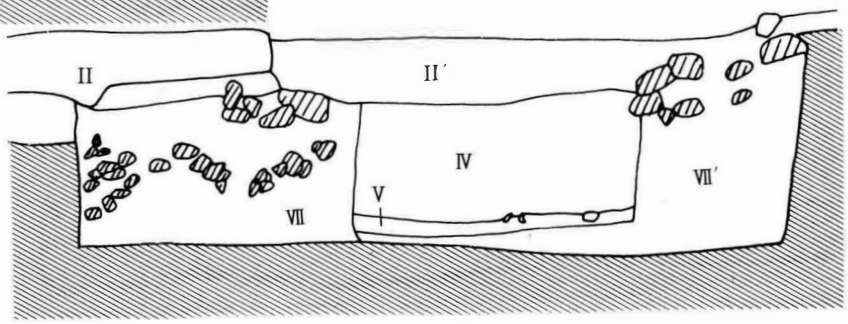
1～3号の上面には、円礫が敷き詰められており、また25号には小口痕がなかったことから土壙墓と推定している。他はすべて木棺墓である。この群内で、19号と28号・25号と20号・28号、26号と27号がそれぞれ複合関係にあり、若干の時間差が考えられる。また主軸もまちまちで、小群としての選別ができなかった。墓壙は黄褐色※





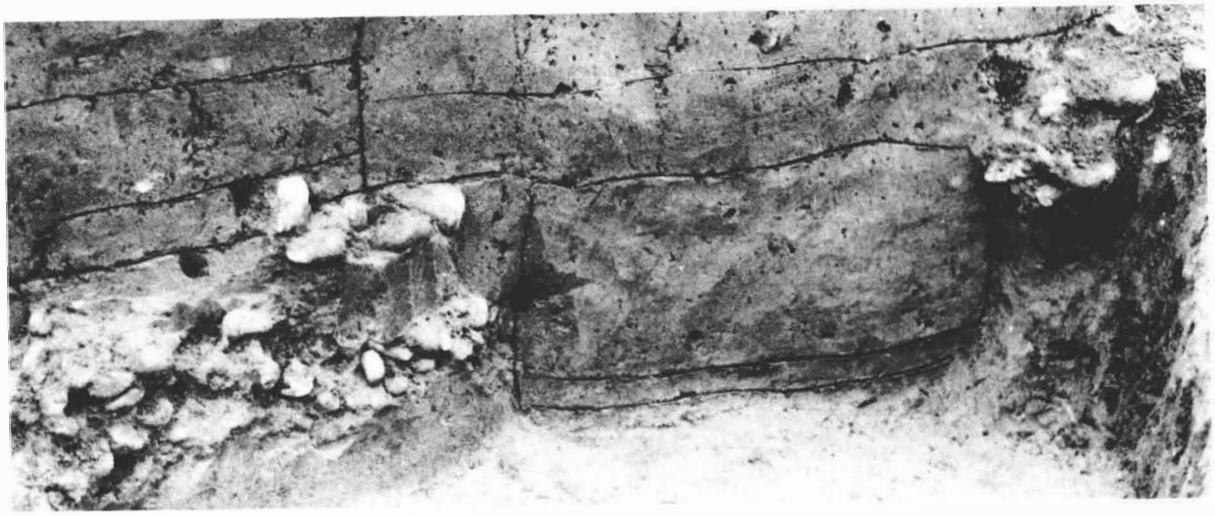
IV　木棺部（左右の黒土より黒味を帯びた砂質土）
V　朱の層（木棺の底部）
VI　やや黒味を帯びた黄色砂質土

I　黒褐色土
II・II′黄褐色粘質土混り黒褐色(貼床)
III　黄色砂質土
IV　黒味を帯びる砂質土
V　赤色顔料混入層
VI　黒味を帯びる黄色砂質土
VII・VII′黒褐色砂質土

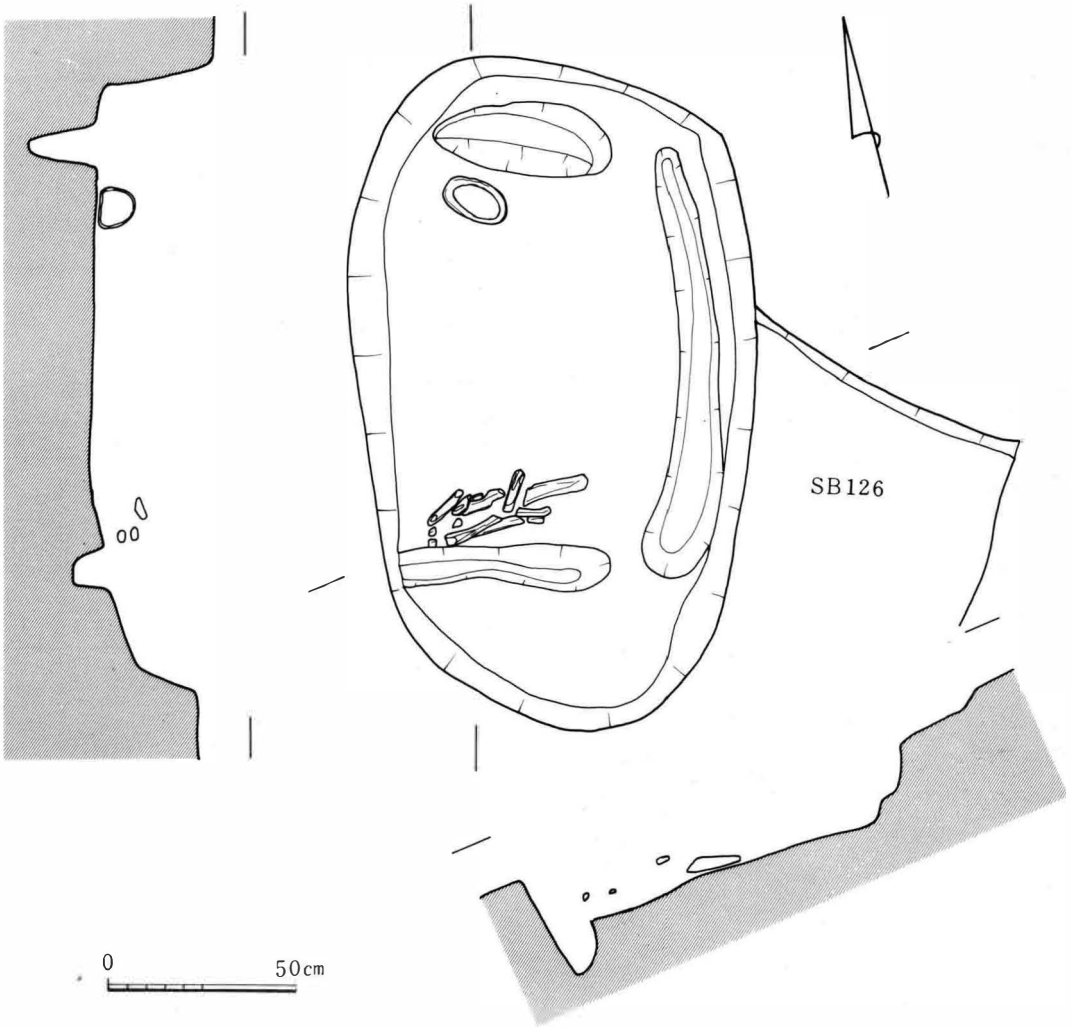


III－68　1号・2号・3号墓壙実測図（上）、2号・3号墓壙土層図（下）

III-69　2号木棺墓



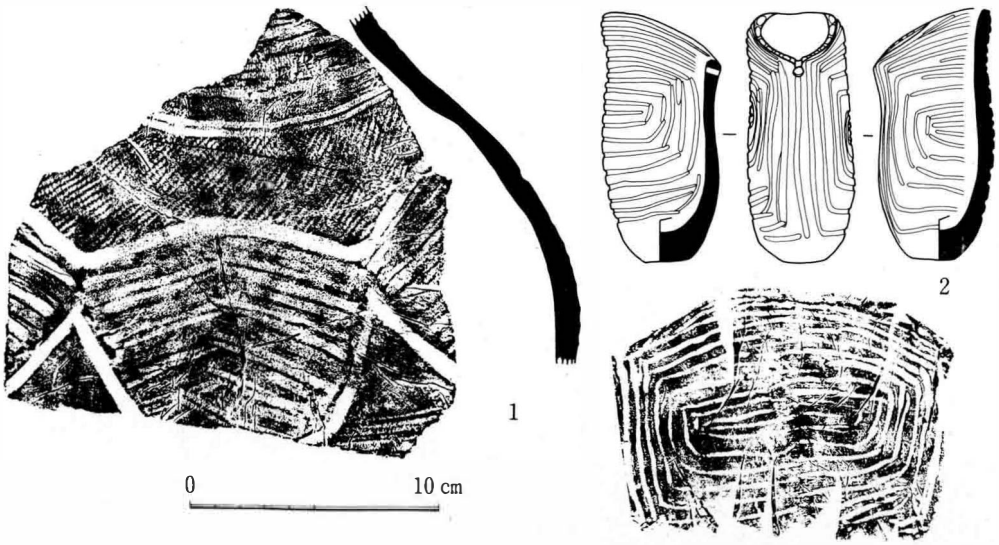
III-70　3号木棺墓断面



III-71　1号木棺墓実測図

※砂質土から掘り込まれ、覆土は黒味を帯びた砂質土で、ほぼ同質土であったので検出には困難を極めた。

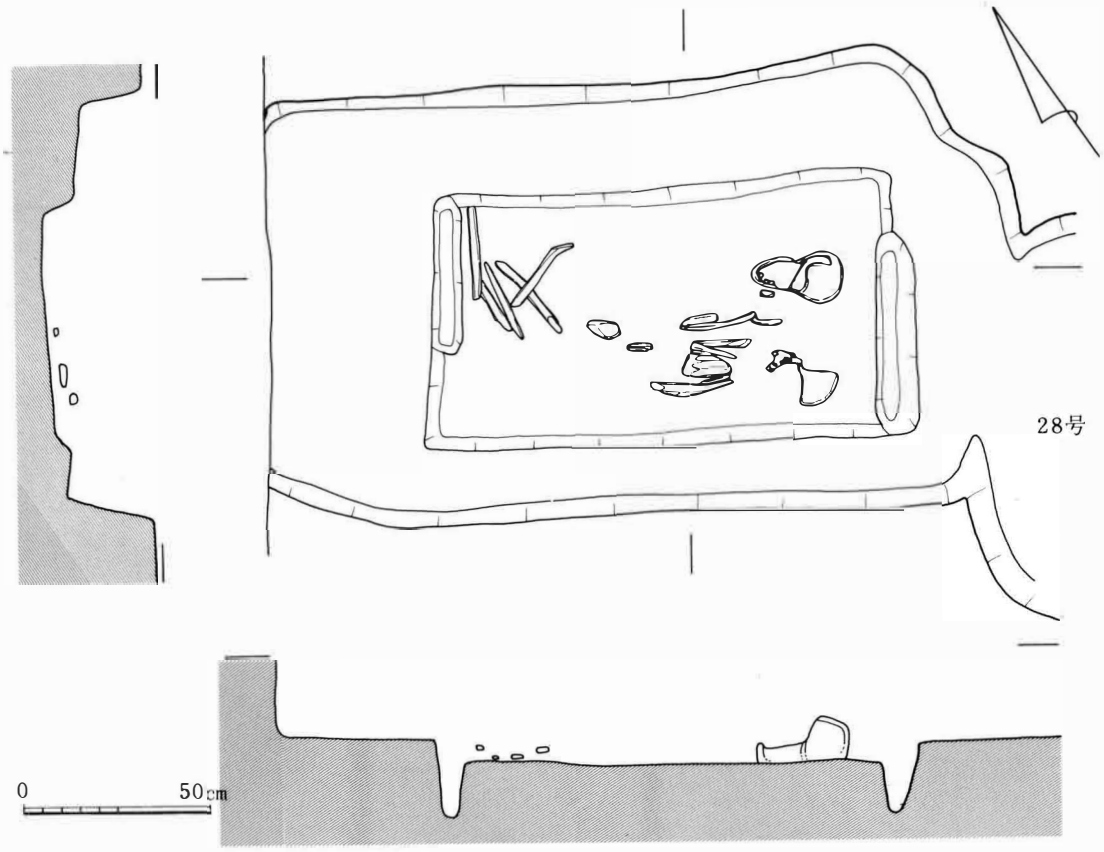
形態は不整楕円形を呈し、主軸はN 17°Wで、長軸1.75 m・短軸1.07 m・深さ32 cmを測る。木口痕中心主軸長は、1.15 mである。また東壁沿いに浅い溝状遺構があり、横板材の痕跡と思われる。人骨は1体で頭を北に埋葬される。



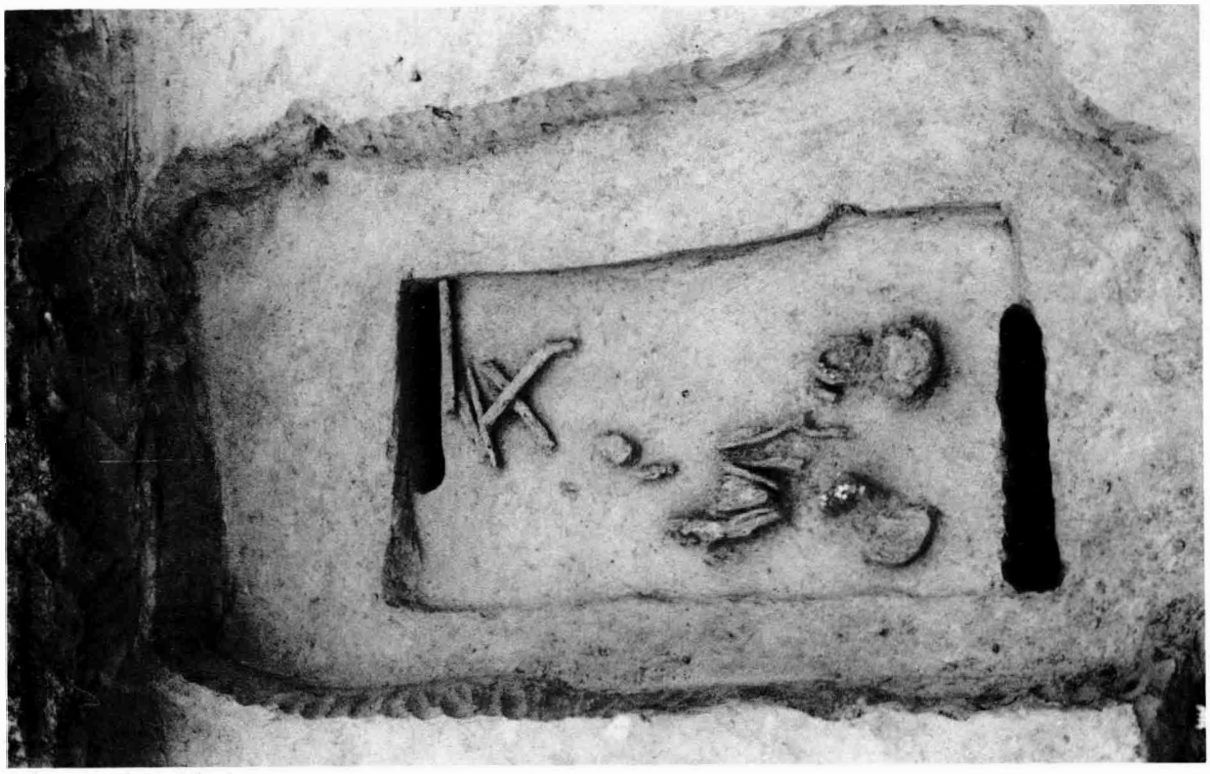
1号木棺墓　底面より出土した壺体部片で、暗褐色を呈する。

2号木棺墓　頭部横から出土した筒形の土製品で、口唇部に列点文、体部に沈線文の重方形文が施される。また頸部付近より太い管玉(III－166－1～13)が13個出土している。

III-72　1号(1)・2号(2)木棺墓出土土器

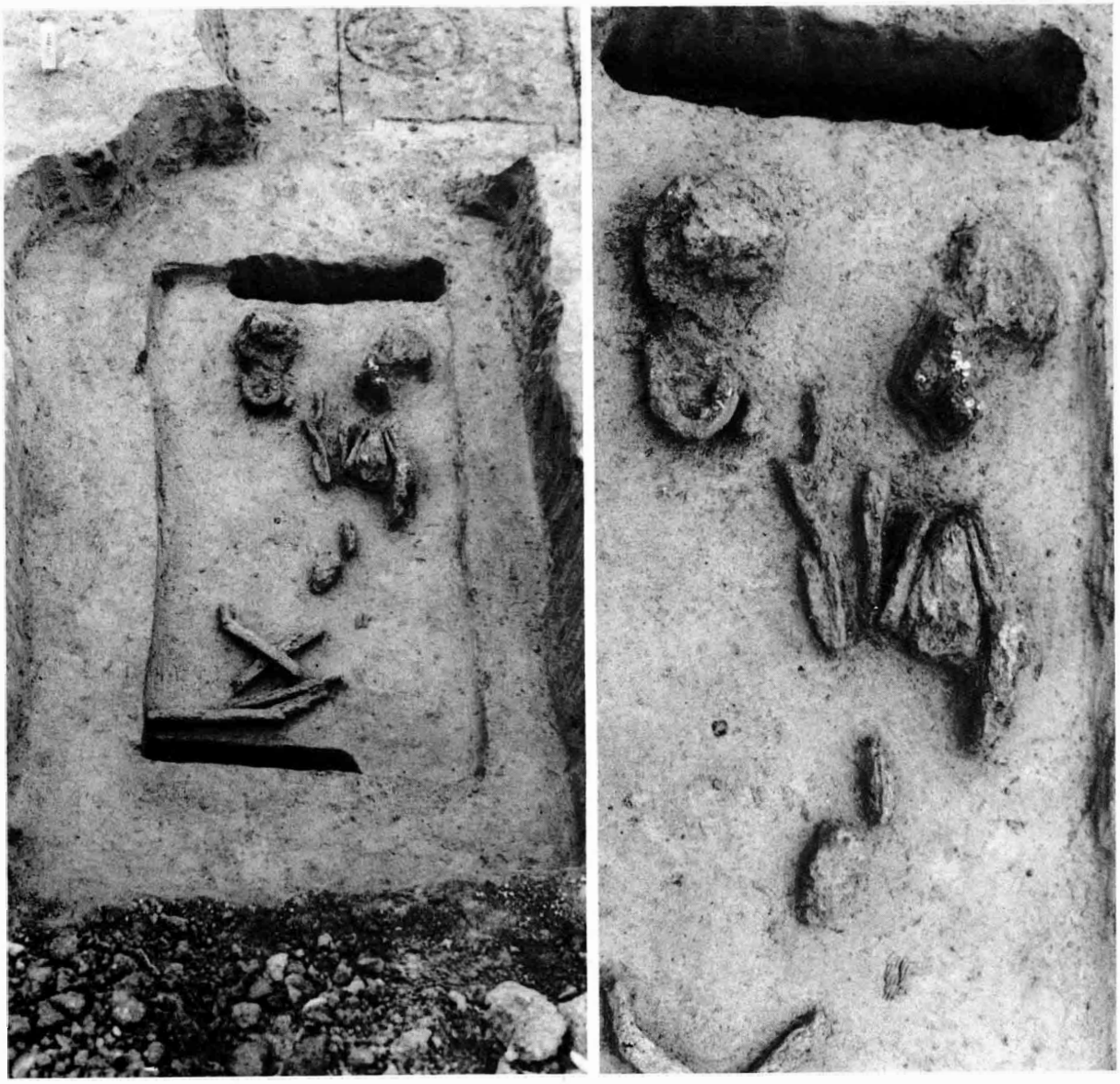


III-73　19号木棺墓実測図

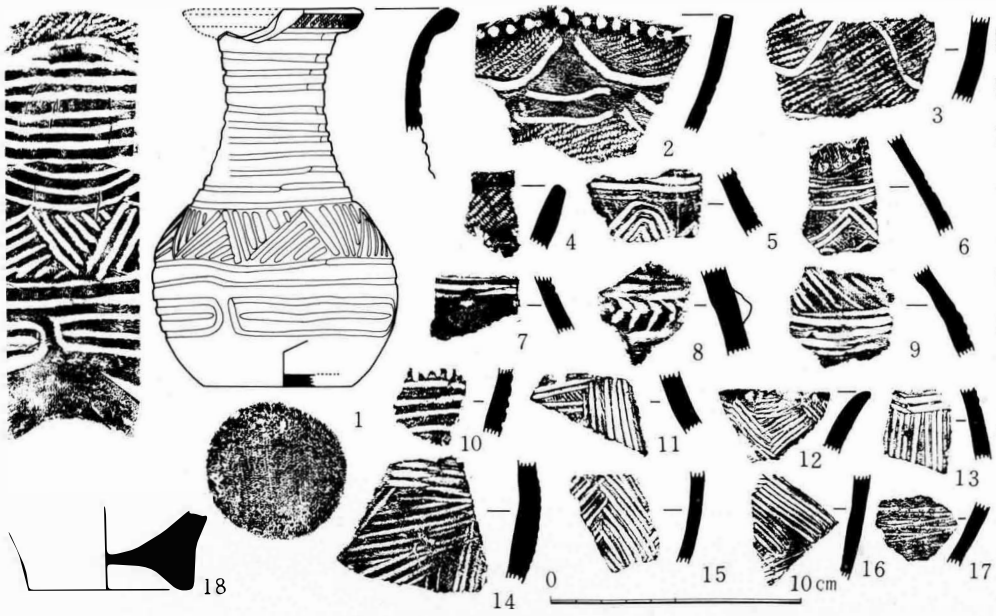


III-74　19号木棺墓

形態は隅丸方形で、墓壙と木棺部がきれいに発見された。主軸方向はN 56°Wになり、墓壙の長軸は不明で、短軸中央で1.14 m・深さ15 cmを測る。木棺部は、長軸1.27 m・短軸0.7 m・深さ9 cmになる。木口痕の深さは、東18 cm・西20 cmを測る。頭部を東に向け埋葬され、2体合葬墓と考えられる。

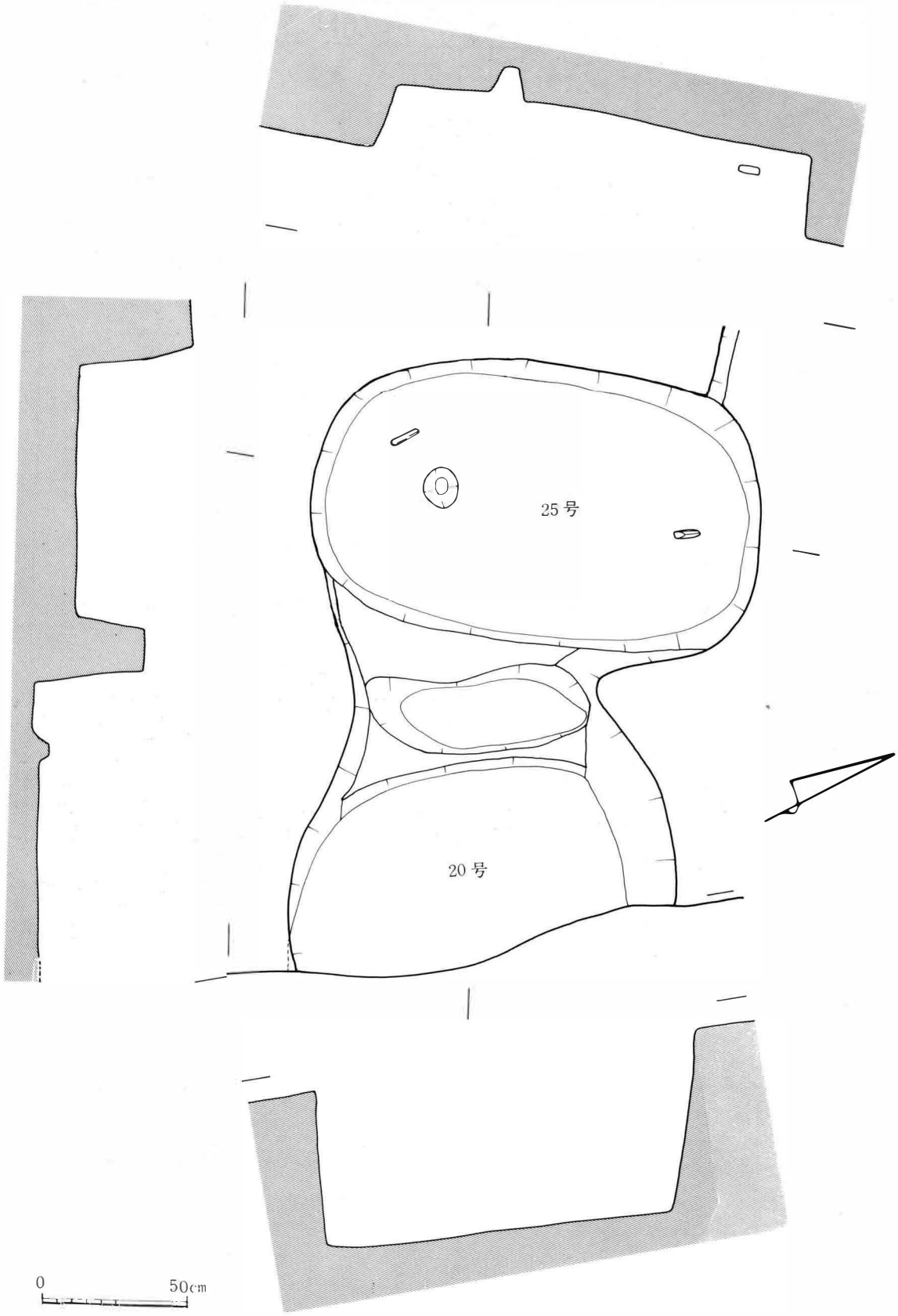


III-75　19号木棺墓



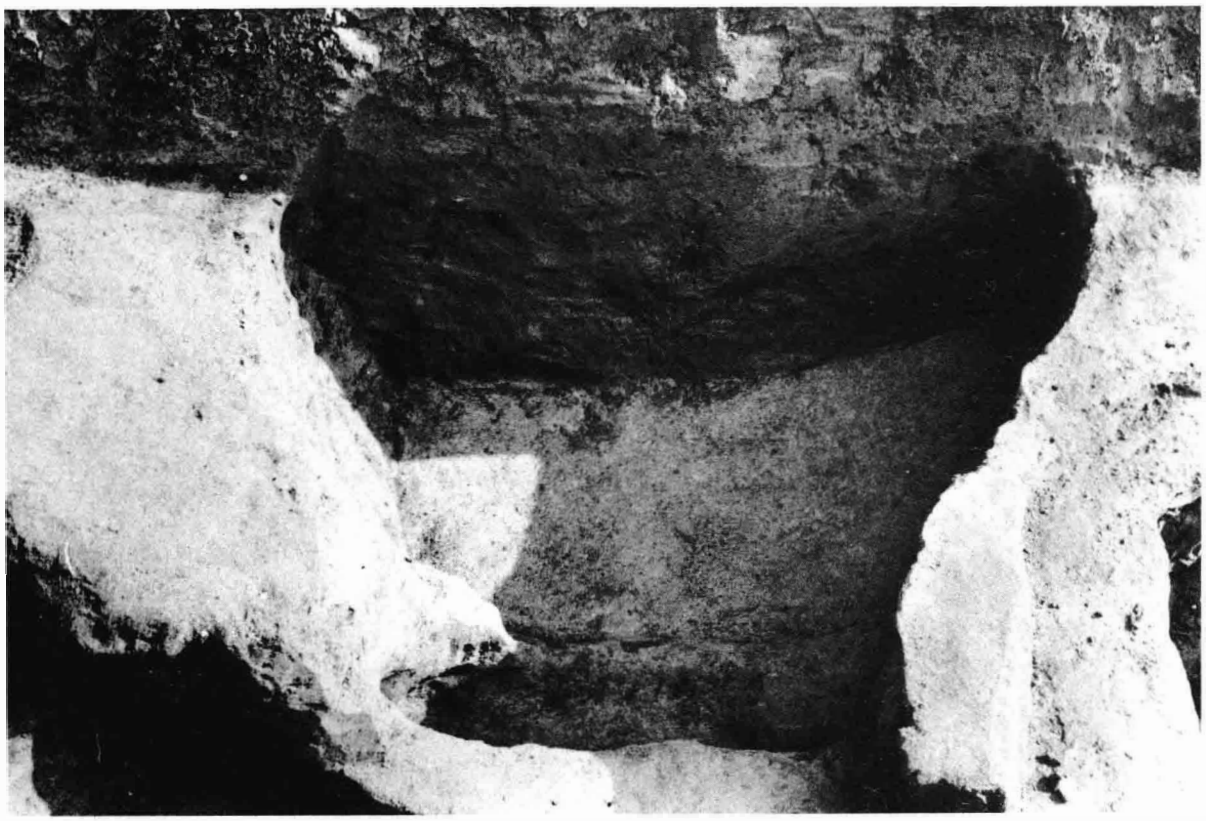
1は副葬品として埋納された土器で、口縁部の一部が欠損する。施文は棒状工具による。体部下半の日の字文様は、不規則に4分割される。2は波状口縁になり、棒状工具による列点文・沈線文・磨消縄文がみられる。6の列点文は竹管による。8の隆帯上には、交互の刺突文がめぐる。

III-76　19号木棺墓出土土器



III-77　20号木棺墓・25号土壙墓実測図

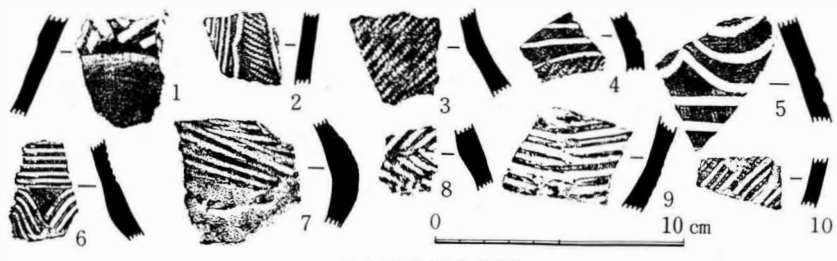
20号木棺墓　西側の一部のみの調査で東側は調査地外へ延びる。主軸方向はN 60°Wになると思われる。短軸1.32 m・深さ52 cmを測る。25号に接して縦板小口痕が認められ、長軸73 cm・短軸30 cm・底面からの深さ6 cmを測る。暗褐色砂質土を掘り込み、覆土は黒褐色砂質土である。この墓址からは、人骨を確認することができなかったが、他の墓址と同様の赤色顔料の散布がみられた。



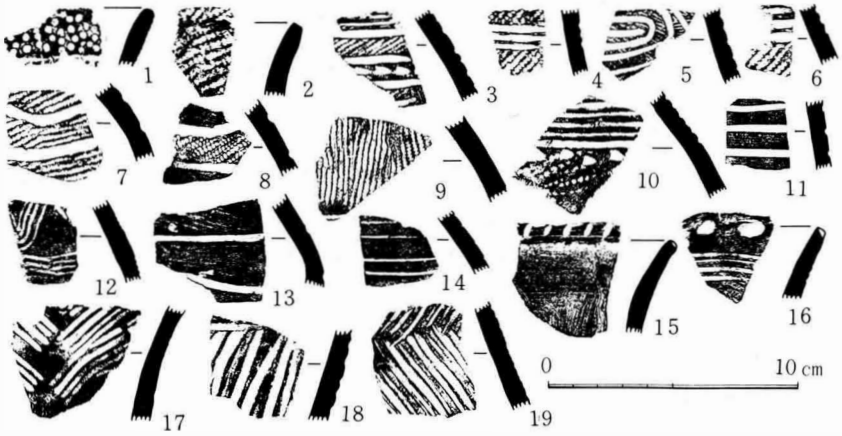
III-78　20号木棺墓

III-79　25号土壙墓

墓壙群中唯一の土壙墓の性格をもつ。形態は隅丸長方形を呈し、掘り込みは直に近い。主軸方向はN 38°Eで、主軸1.5 m・短軸0.95 m・深さ39 cmを測る。南北近くに径12 cm・深さ12 cmのピットがある。人骨片2個出土した。



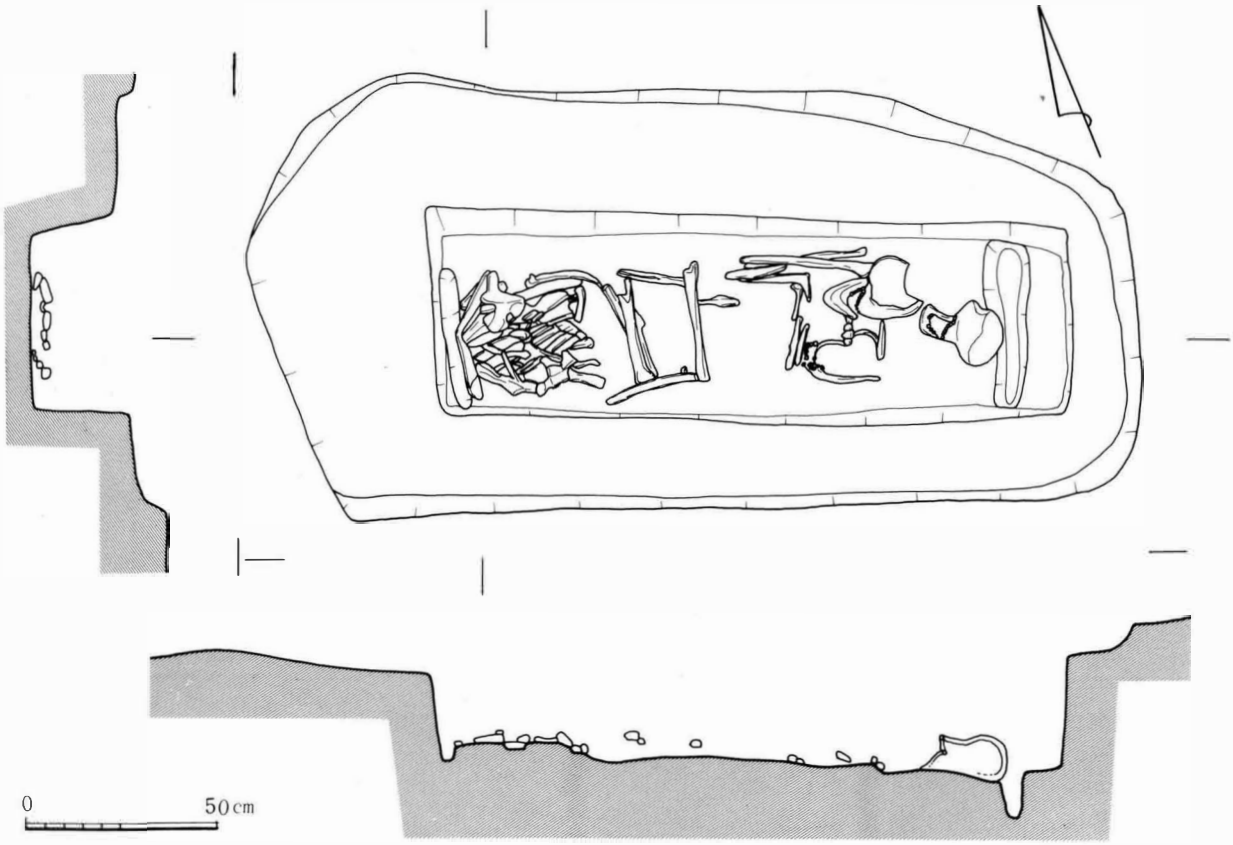
20号木棺墓出土土器



III-81　25号土壙墓出土土器

副葬品と認められるものはない。1は内面に棒状工具による山形文が、2・6には、櫛歯状工具によって施文される。7は壺の体部片で、屈曲部が厚くなり、上部に条痕文が施される。

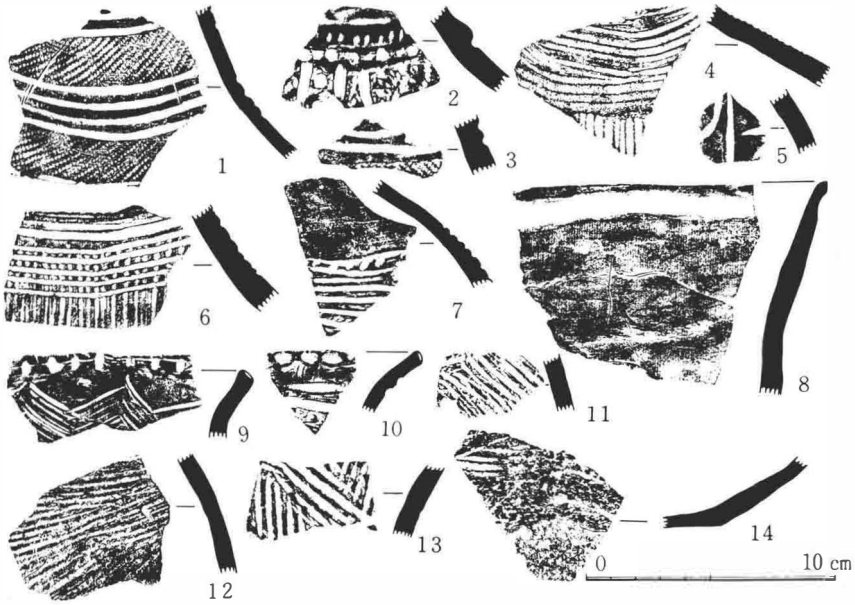
1の口縁部は竹管による刺突文で埋められる。11・13・14はていねいにヘラミガキが施され、棒状工具による平行線文が描かれる。12には櫛歯状工具による波状文と平行線文が、4も3本歯同様工具により平行線文が施される。15・16の口唇部に列点文がめぐる。尚、2・10には、赤色顔料が付着している。



III-82　24号木棺墓実測図

この木棺墓も墓壙を伴う。墓壙形態は、西側がやや張る不整隅丸長方形で、長軸2.35 m・短軸中央で1.11 m・深さ8 cmを測る。木棺部は、長方形を呈し、主軸方向がN 69°Wで、主軸1.69 m・短軸0.55 m・深さ30 cmを測る。東の木口痕の深さ12 cm・西で5 cmになる。2体埋葬され、東側に頭部をすえる。西側に骨の集積があり、2体同時埋葬でない可能性がある。鑑定を待ちたい。

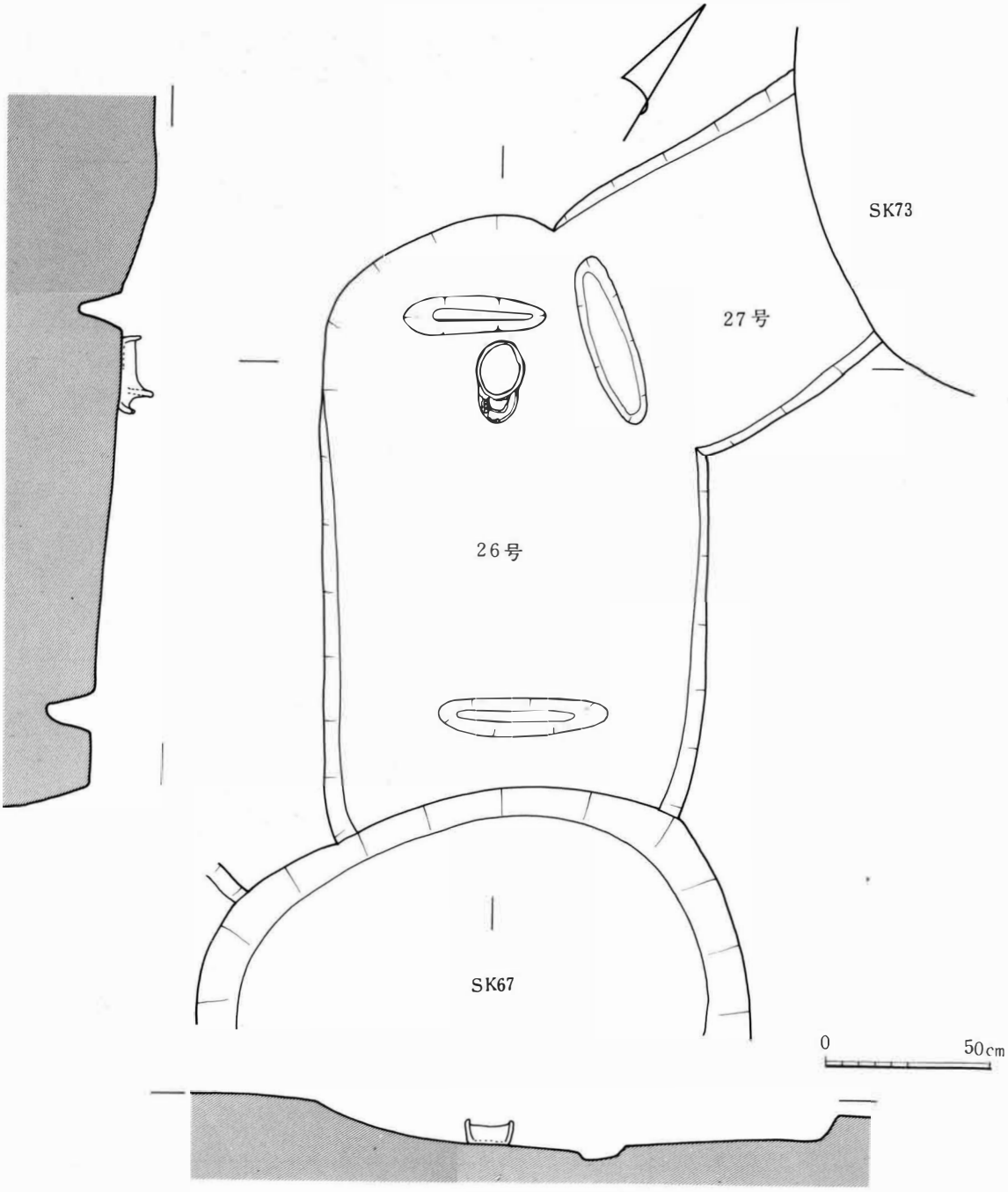
III-83　24号木棺墓



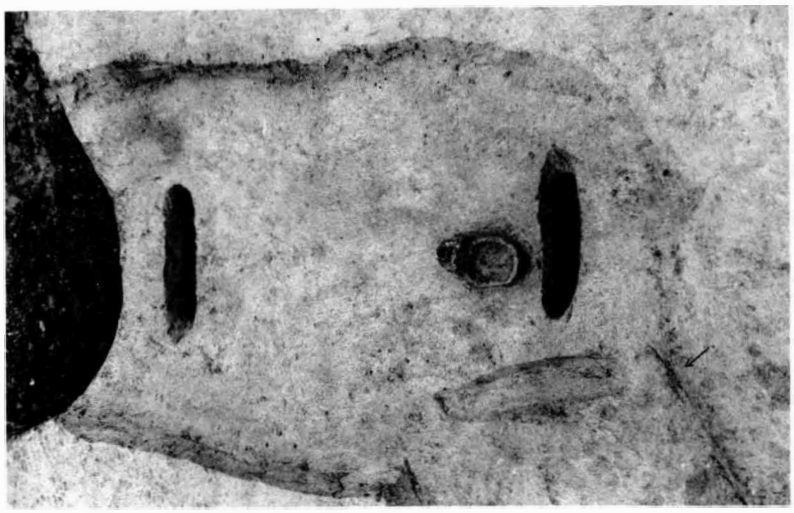
III-84　24号木棺墓出土土器

この遺構にも副葬品と考えられるものはない。1～3は縄文を地文とするもので、1・3は4本の横線文帯間に縄文が、2は肩部に隆帯がめぐり、その上をヘラ状工具による列点文を配し、下部には沈線と刺突文（列点文）が加わる。8は無文の甕形土器で、口縁部に浅く太い凹みがめぐる。9・10の口縁部も同器種で口唇部に列点文がめぐる。更に9の同ケ所に櫛歯状工具による横線文がみられる。11～13は条痕文が施される。

これまで紹介した土器のほとんどが、覆土中からのもので、墓壙が掘られた時点又はそれ以前のものと考えられる。文中では、一応体部外面の条痕文を甕形土器と推定した。器種的にみると壺形土器が多い。文様も多岐にわたり、施文具に、太い沈線・区画文には棒状工具が使用され、平行線文・波状文・斜行条線文（条痕文）には、櫛歯状工具が用いられる。ただこの工具とハケ状工具との施文は明確にできないが、主文様を構成するために使用されたものを櫛歯状工具と表現した。また主文様の補助的施文または整形の用に供された施文具をハケ状工具とする。 出土土器の焼成は良好で、黄褐色～黒褐色を呈するものが多く。当地で焼かれたものと考えられる。またこの時期の土器の多くには、石英粒・黄雲母が含まれ、一部に、前記したものが含まれずに凝灰岩粒と推定される白色の小砂が目立つ土器がある。



III-85　26号・27号木棺墓実測図



26号木棺墓

墓壙・木棺部との掘り込みは判明することができなかった。形態は隅丸方形であるが長軸の南壁は、土壙67により破壊されるが、2m位と推定され、短軸1.8mを測る。木口痕間は1.2mである。主軸方向はN 32°Wである。

III-86　26号木棺墓

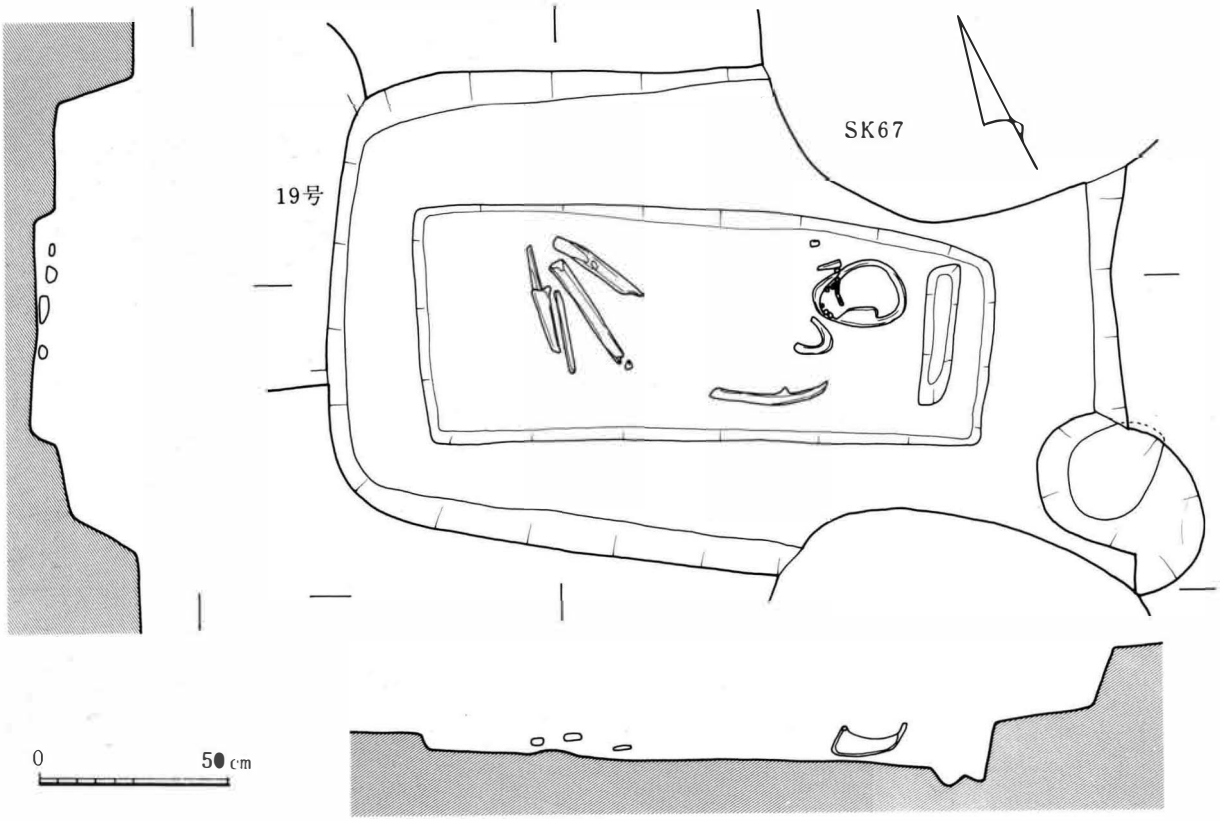
III-87　26号・27号木棺墓

III-88　28号木棺墓出土土器

1の口縁部は、ハケ整形により、2は口縁部の肥厚によって有段になる。4は区画文になる。

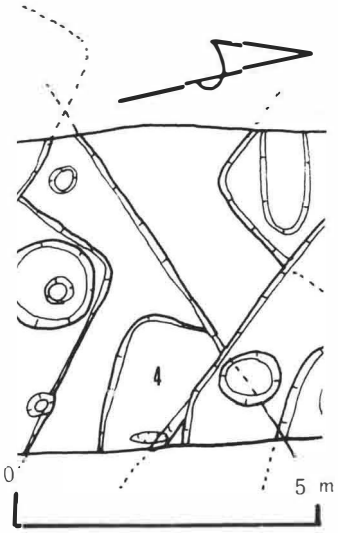
27号木棺墓　南壁は26号木棺墓により、北壁は土壙73により主軸の両端が破壊される。そのため長軸の計測ができなかったが、短軸0.87mになり掘り込みの深さは8cmにすぎない。長軸方向はN 27°Eになる。縦板木口痕が南に認められ、長軸50cm・短軸12cm・深さ5cmを測り、底面は舟底状になる。出土遺物は小破片が数点出土しているにすぎなく、人骨も検出することができなかった。

28号木棺墓　この遺構も墓壙と木棺部を明確に検出することができた。墓壙と木棺部が同一主軸方向になり、その数値はN 64°Wになる。墓壙の形態は不整隅丸方形で、確認最大数値は主軸2.1m・短軸1.48mを測る。深さは頭部がある東側が最も深く16cmになる。木棺部は変形の長方形を呈し、主軸1.52m・短軸0.62m・深さ10cmを測る。頭部にあたる東壁の一方だけに木口痕が認められるが、底面からの深さは5cmにすぎない。また底面は、頭部にむけ低くなる。埋葬人骨は1体と考えられる。

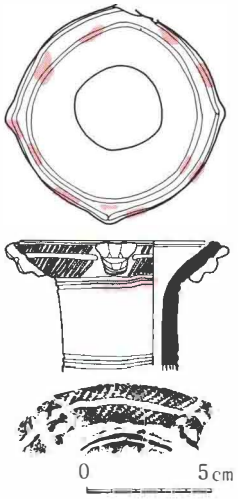


III-89　28号木棺墓実測図

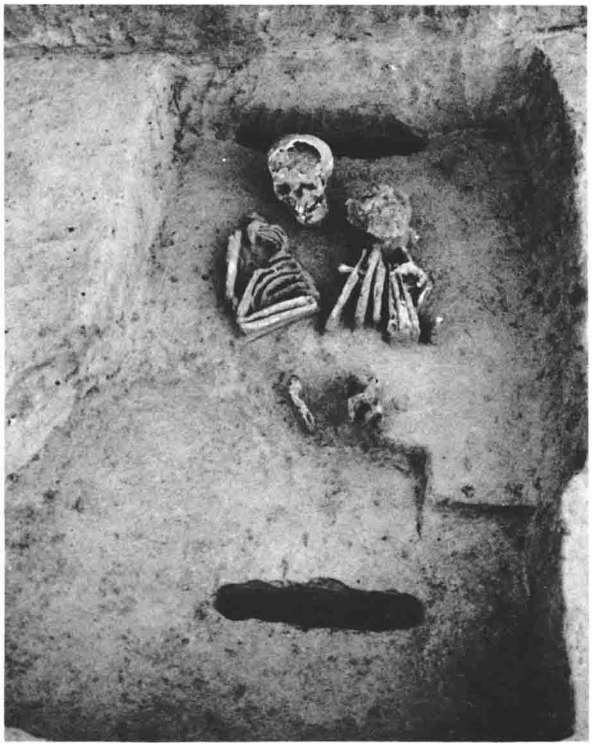
III-90　28号木棺墓



III-91　第II墓壙群分布図

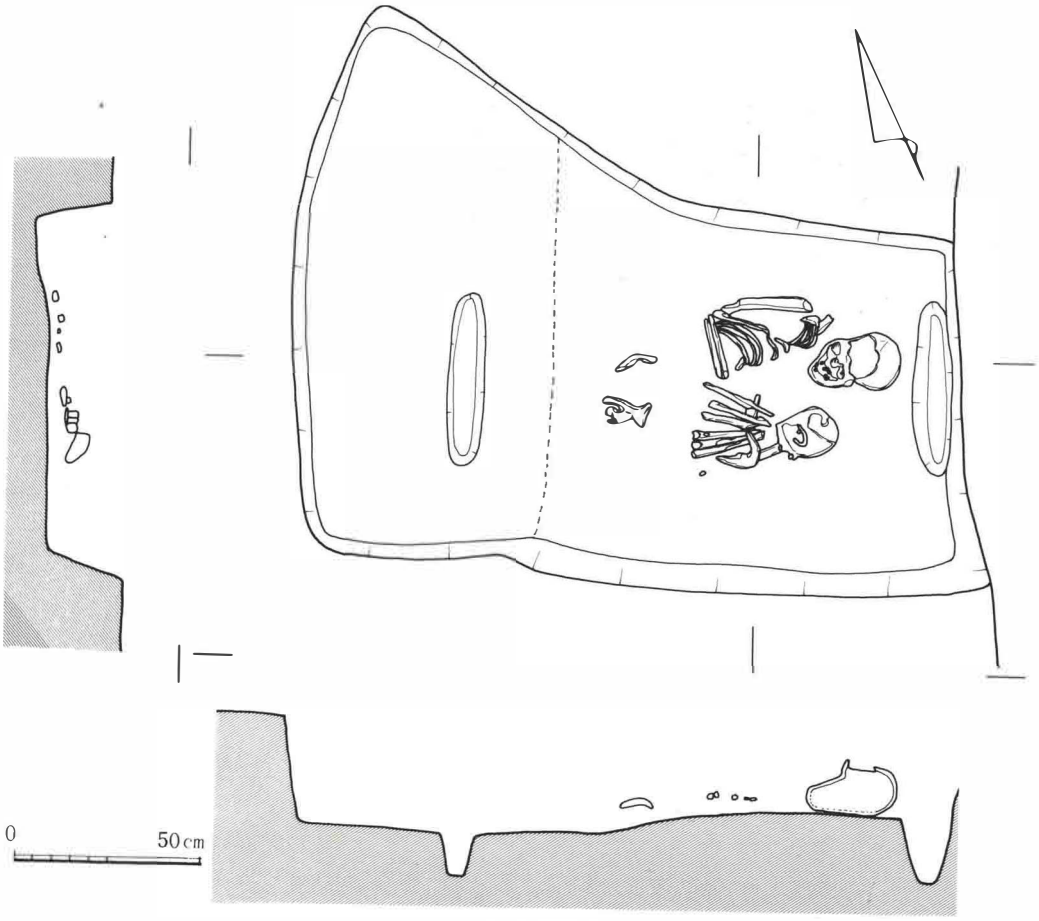


III-92　4号木棺墓出土土器



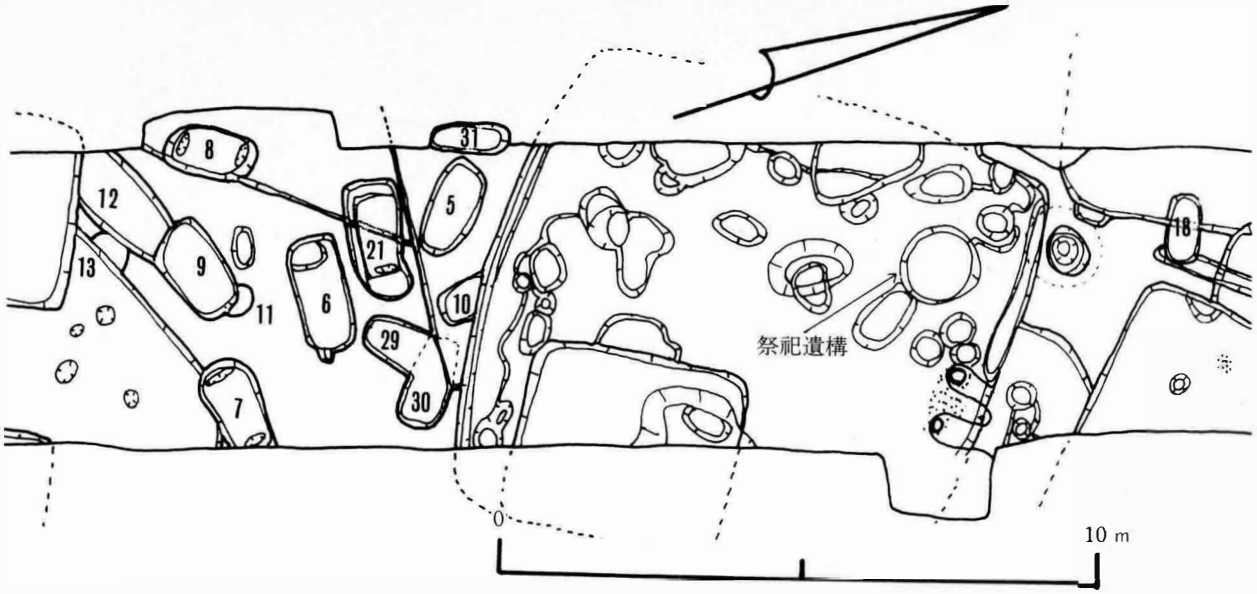
III-93　4号木棺墓

第II墓壙群　群としたが1基単独で検出されているにすぎない。しかし近隣に古い土器を出す土壙群があり、また112号住居址の壁外検出面に赤色顔料が認められたことから、後世の遺構によって破壊されている可能性がある。



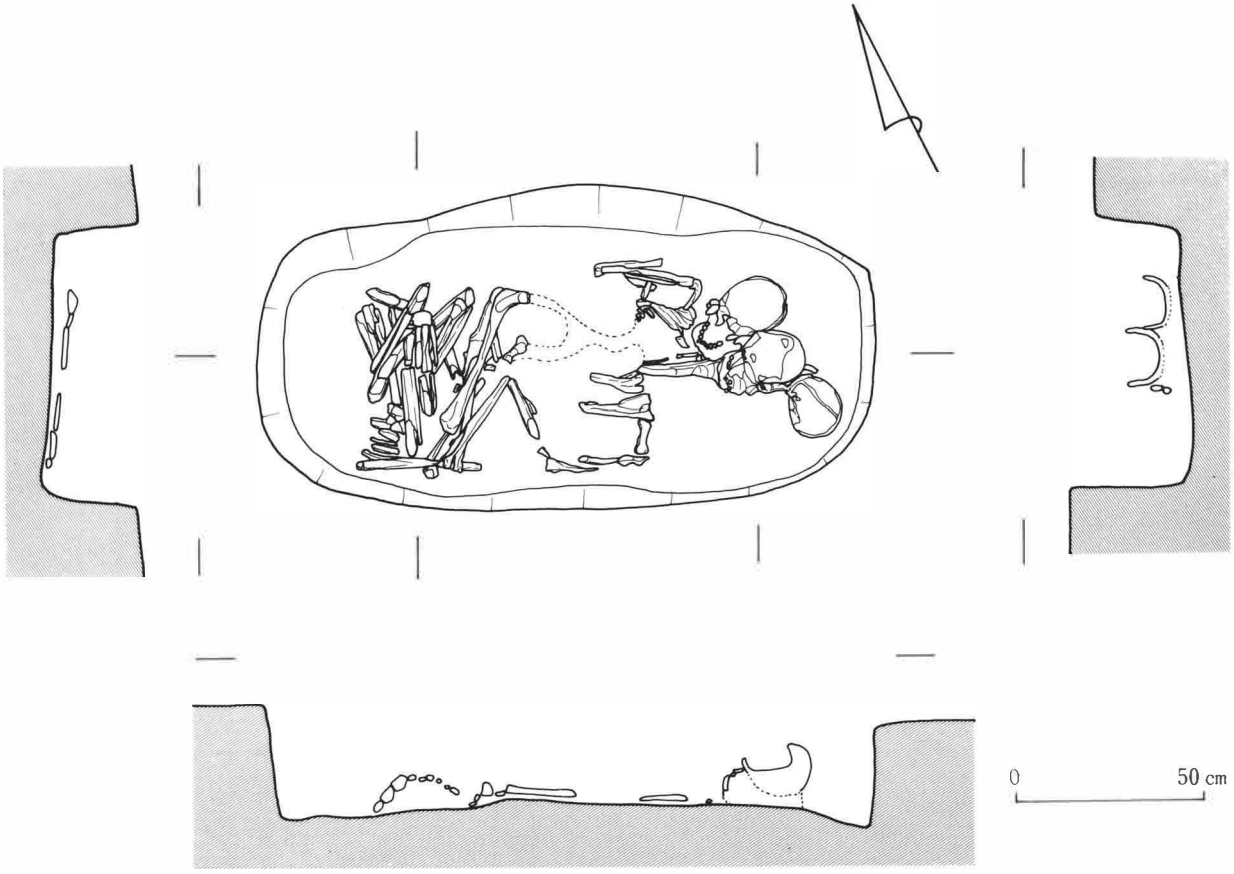
III-94　4号木棺墓実測図

形態は西方が開く不整長方形を呈し、主軸方向はN 60°Wである。墓壙長軸は、1.9 mを推定する。短軸は1.02 mで、深さは西で29 cm・北で22 cm・南で20 cmを測る。木棺部の長軸は1.25 mで、頭部を東にした2体合葬である。

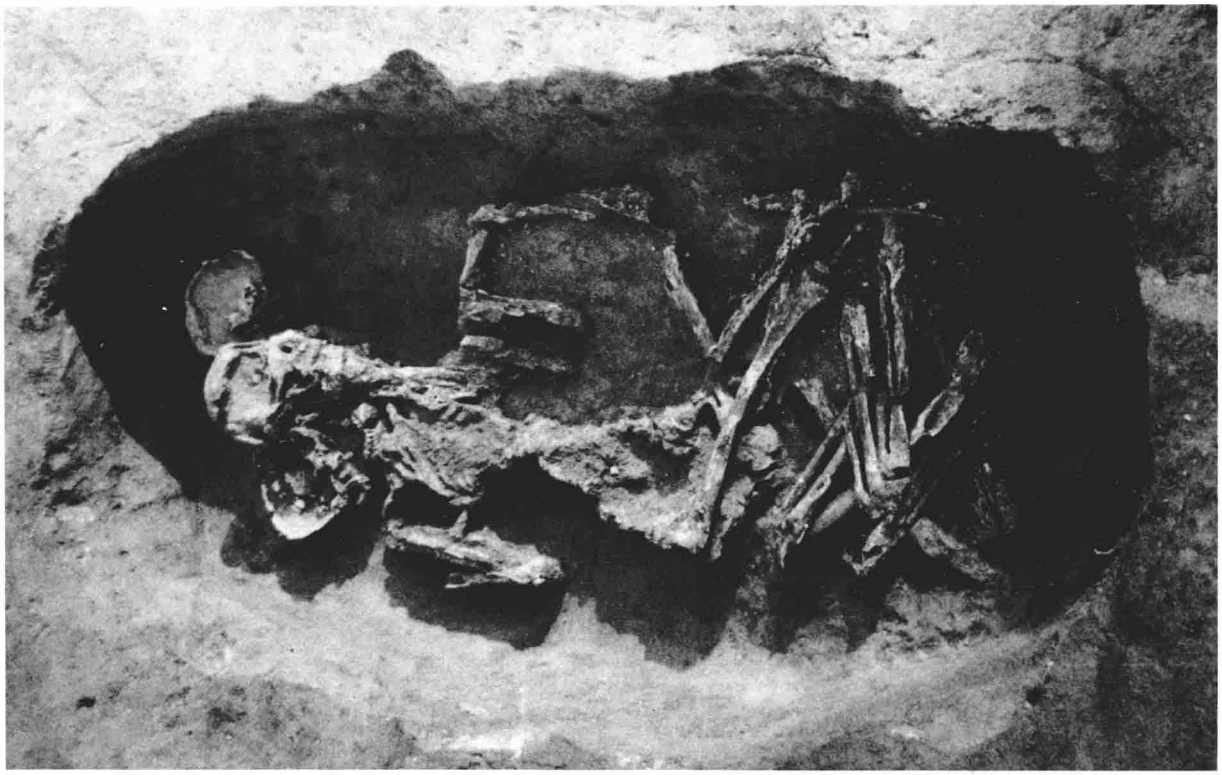


III-95　第III墓壙群分布図

III-96　第III墓壙群

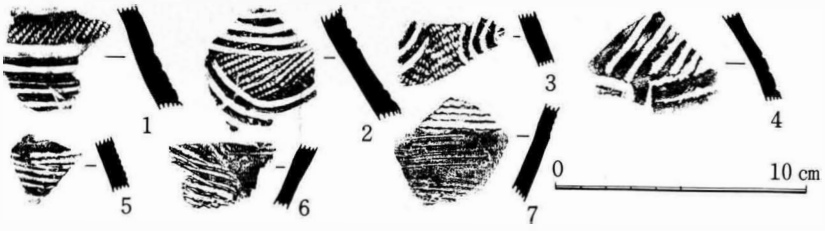


III-97　5号木棺墓実測図



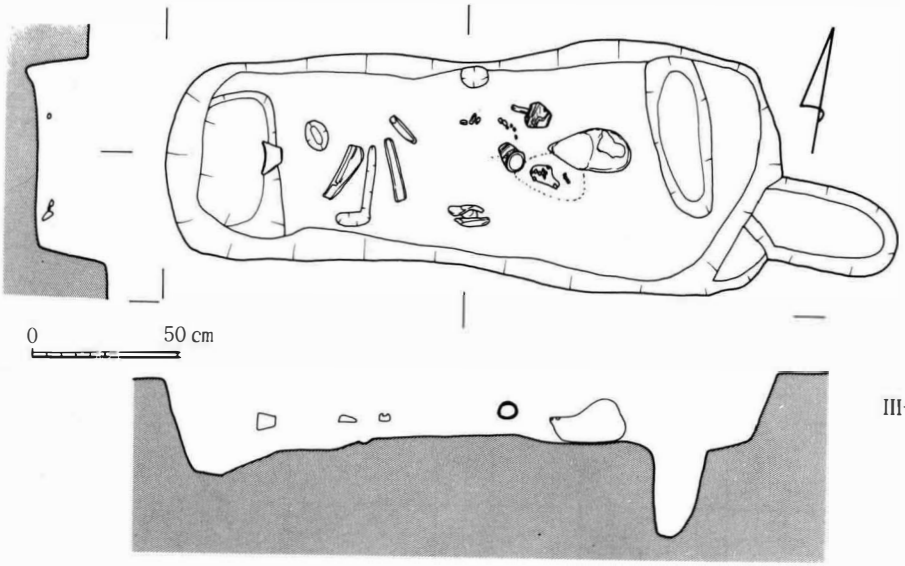
III-98　5号木棺墓

第III墓壙群　最も密集した墓壙群で14基確認されているが、11号は平安時代のものである。18号は、136号住居址をはさんで単独検出されたが、この住居址下部遺構に不整形な土壙状のものがあり、このいくつかは墓壙になる可能性がある。9号と12号、29号と30号が重複関係にあり、この群にも時間差が考えられる。



III-99　5号木棺墓出土土器

すべて覆土中からのもので、副葬品はない。1～3は縄文地のもので、1には太い沈線文と平行線文が、2に重円孤区画文、3に同心円文を施す。4は斜行沈線文と日の字状区画文が描かれる。7の施文具は、櫛歯状工具が用いられる。5の外面に赤色顔料が付着する。



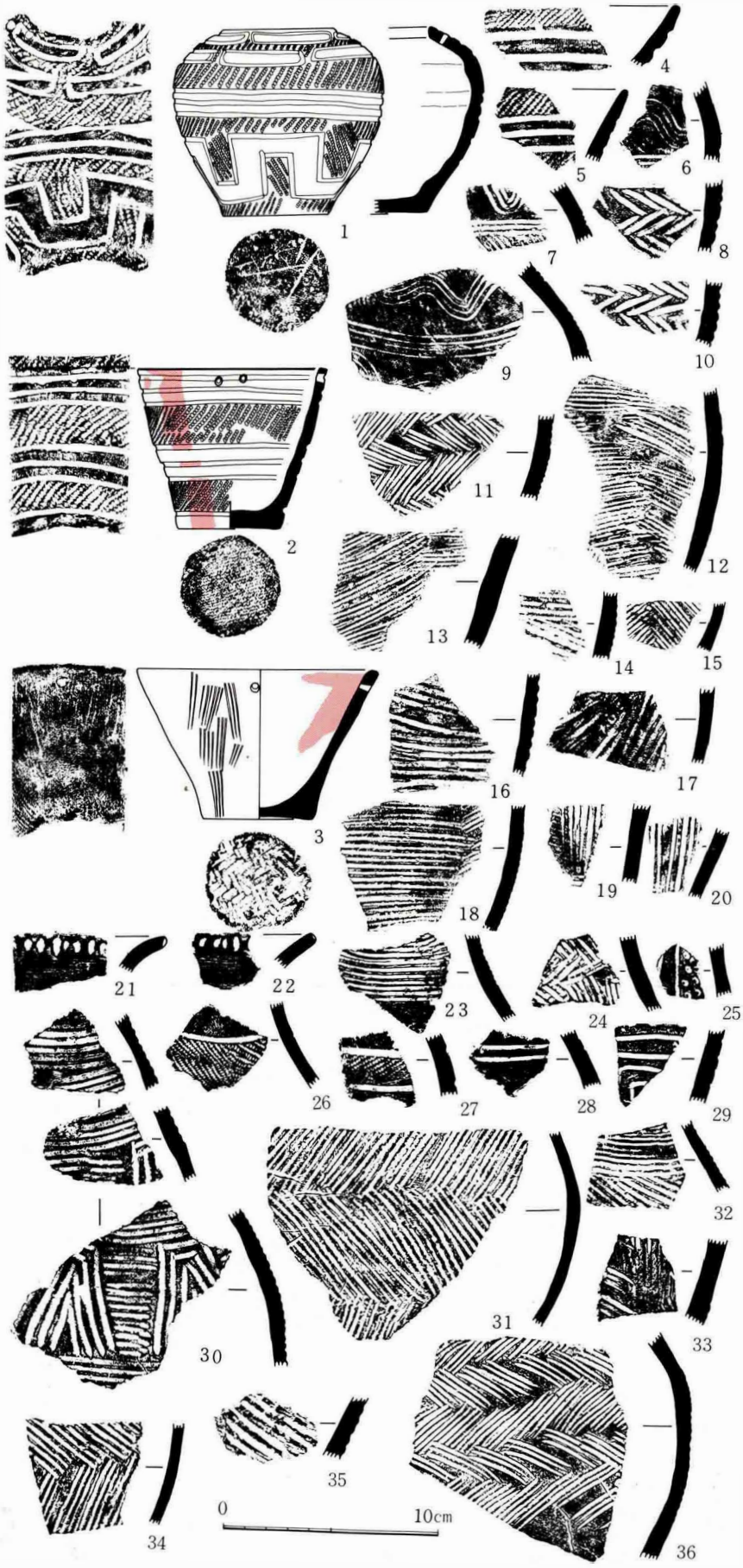
III-100　6号木棺墓実測図

III－101　6号木棺墓

5号木棺墓　形態は隅丸長方形で、長軸方向はN 63°Wである。長軸1.64 m・短軸0.85 m・西壁の深さ30 cmを測る。この墓壙には、3体が同時埋葬された可能性があり、それぞれ頭部を東にむける屈肢葬になる。木口痕は保存上遺構全体を取り上げたため、確認していない。

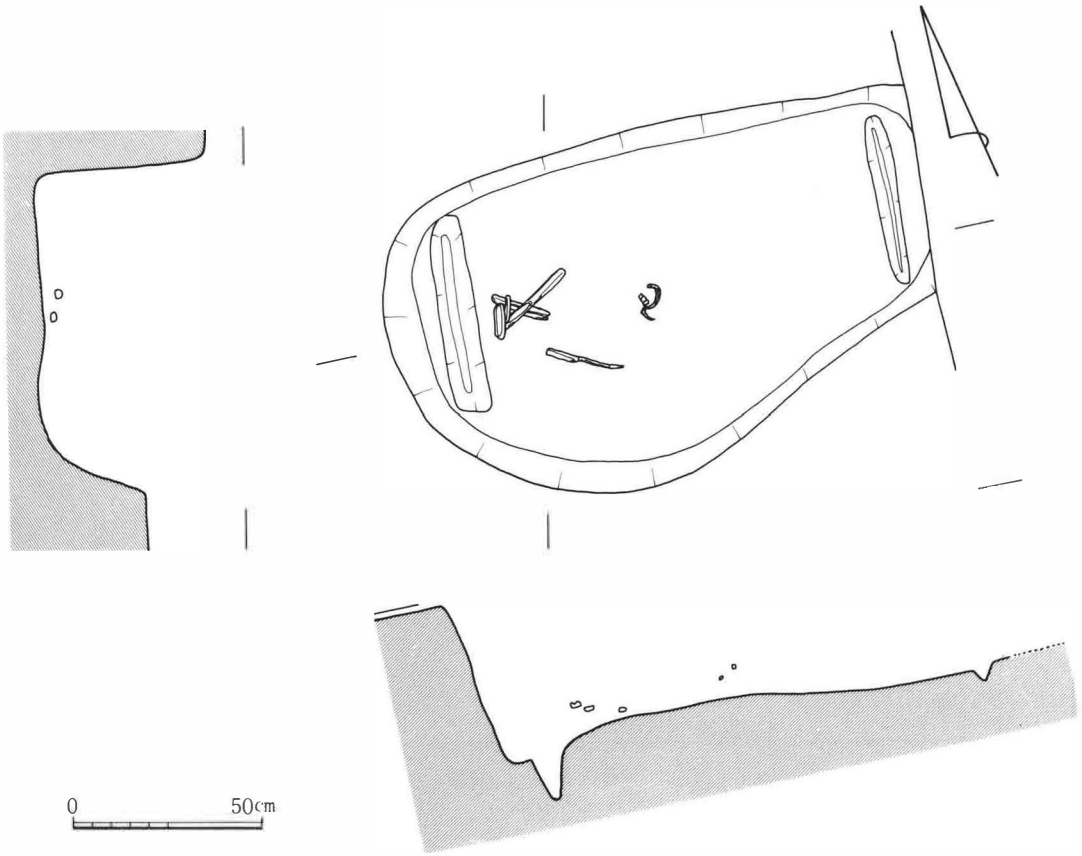
6号木棺墓　上面に炭化物の散布が認められた。形態は不整隅丸長方形になる。長軸方向はN 82°Eになり、長軸2.1 m・短軸0.75 mを測る。掘り込みは、東壁で24 cm・西壁は木口痕底にあたり32 cmを測る。木棺部長軸は1.5 m内外で、幅45 cmが予想される。東側木口痕の深さは30cmを測る。頭部を東に向け埋葬される。

胸部から無頸壺・浅鉢、足部から浅鉢(III－102－3)が、頸部付近より破壊された緑色凝灰岩製の管玉(III－166－14～19)が出土している。

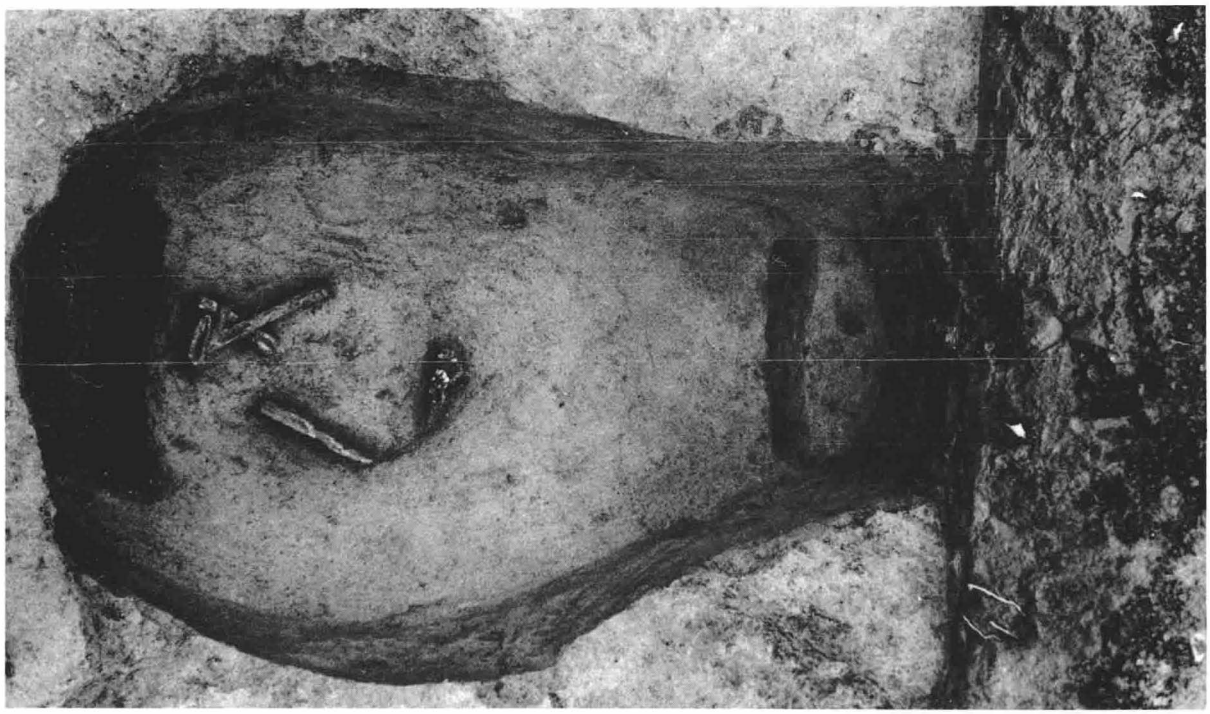


III-102　6号木棺墓(1～20)・西側上面（21～36）出土土器

1～3とも完形で、1・2には2孔一対、3には1孔がうがたれる。1は無頸壺で、口縁部をめぐる長方形文は5区画、肩部の同文様と体部の凸形状文は5単位になる。2は平行沈線文が口縁部・体部に3本、底部付近に1本が配される。全面に赤色塗彩の可能性がある。3の浅鉢は、ハケ整形痕を残すだけで無文である。口縁部内面に赤色顔料が付着する。色調はともに黄褐色から暗褐色を呈する。胎土に小砂粒が混入されるが、3には石英粒・白色凝灰岩粒が目立つ。4～20は、墓壙および木棺部から出土したが、21～36は墓壙西側上面から検出したものである。棒状工具による平行線文が施されるものに、4・5・8・10・26・27～29があり、8・10の羽状の短線文のほかは、縄文地を基本としている。21・22は、同状工具により口唇部に列点文が、25には垂下する沈線文と竹管による刺突文が施される。また、29はコの字重文風の区画文を、30は同文様状の山形文を描き出している。他は櫛歯状工具による施文で、6・7・9・23・30・32には平行線文で、6・7・9は波状文がめぐり、11・24・31・34・36は羽状の文様に、12・13・18は綾杉状文になるほかは、斜行する条痕文になる。色調は黄褐色から黒褐色を呈し、胎土に石英粒・黄雲母・白色凝灰岩粒を含むものが多く、焼成は良い。

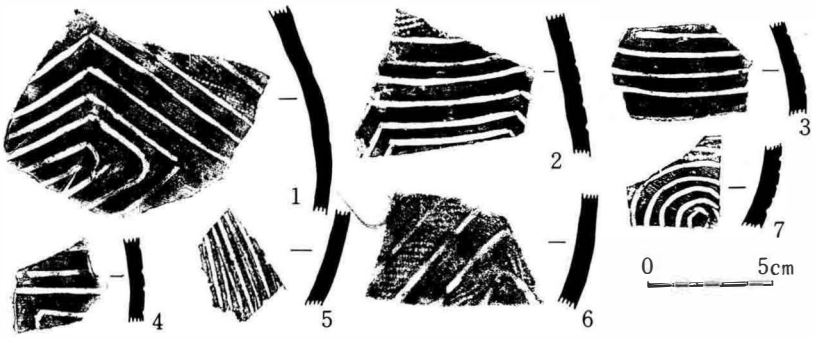


III-103　7号木棺墓実測図



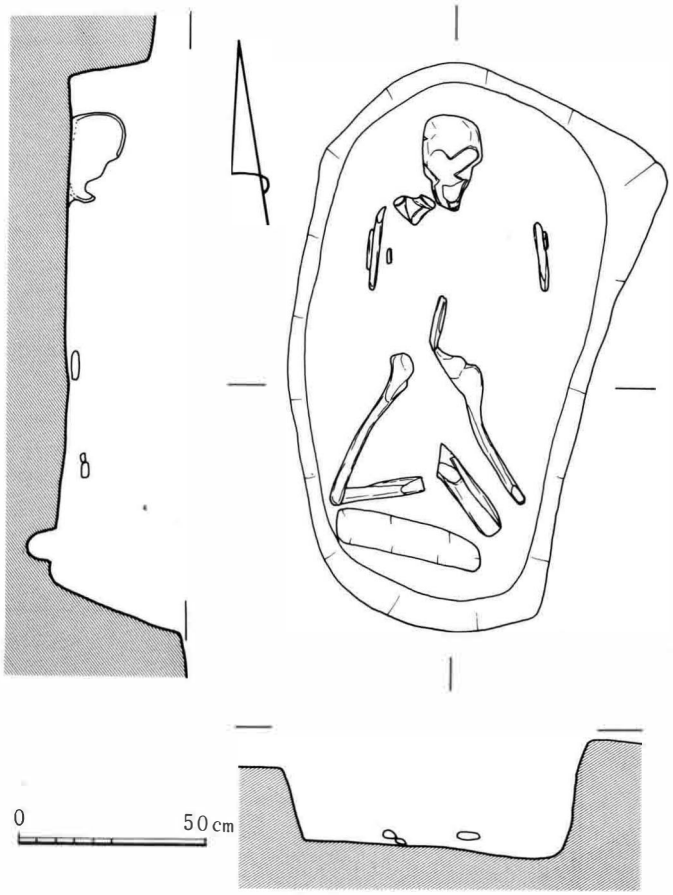
III-104　7号木棺墓

長軸にあたる東壁の一部は、調査区外に延びる。形態は西側がふくらむ不整楕円形になる。長軸方向はN 87°Wで、長軸1.6 m前後になるものと思われる。短軸の最大幅は0.9 m、西壁の深さ45 cmを測る。木棺部の主軸長は1.2 mで、幅は小口痕の大きさから40 cm位であろう。頭を東に据えたものと思われるが、底面は逆傾斜する。



III-105　7号木棺墓出土土器

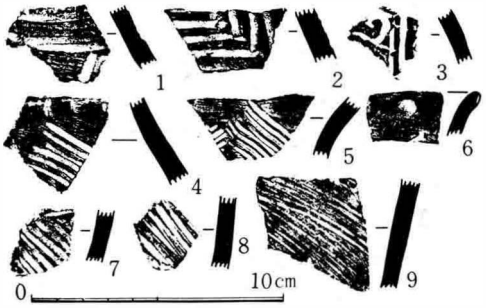
出土量は少なく、副葬品はない。1～4は棒状工具により、コの字重ね文風の区画文になるものと思われる。1・2に縄文が施文される。ともにヘラミガキが施された後の施文である。5は甕形土器体部下半の破片で条痕文になる。6は縄文地に山形の沈線文が描かれる。7も縄文地になり、同心円文が棒状工具により施文される。



III-106　8号木棺墓実測図

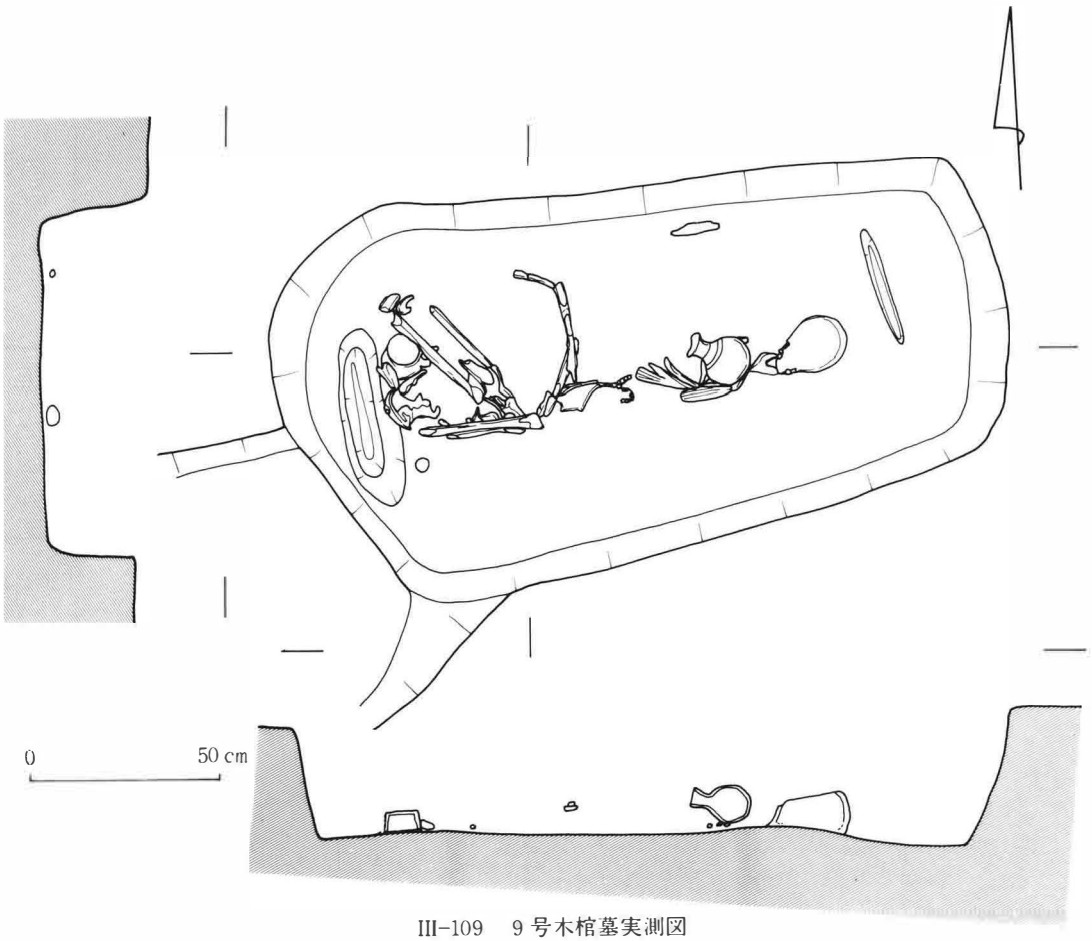
139号住居址検出中発見された木棺墓で、覆土は暗褐色砂質土である。形態は不整楕円形を呈する。人骨から長軸方向は、N 10°Eを指し、長軸1.5m・短軸0.8mを測る。掘り込みは、北壁で21cm・南壁で36cm・東壁で30cm・西壁で20cmの深さになる。木棺の双口痕は南で確認されただけで、北壁には認められなかった。長さは40cm・幅10cm・深さ7cmを測る。人骨は1体で、頭部を北に据える屈肢葬で頭部のほか上腕骨・大腿骨が残る。

III-107　8号木棺墓

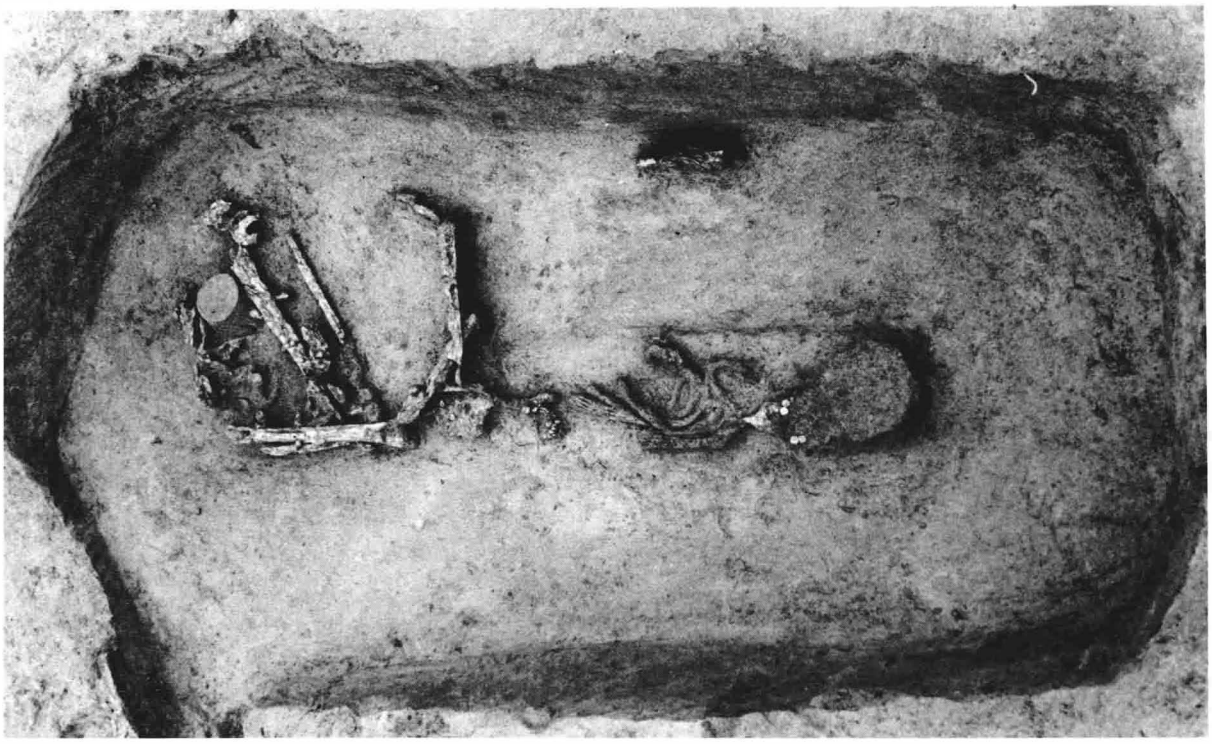


III-108　8号木棺墓出土土器

副葬品はない。1～3には棒状工具による沈線区画文、6の口唇部に同工具による列点文が施文される他は、ハケ整形後櫛歯状工具による条痕文風文様になる。

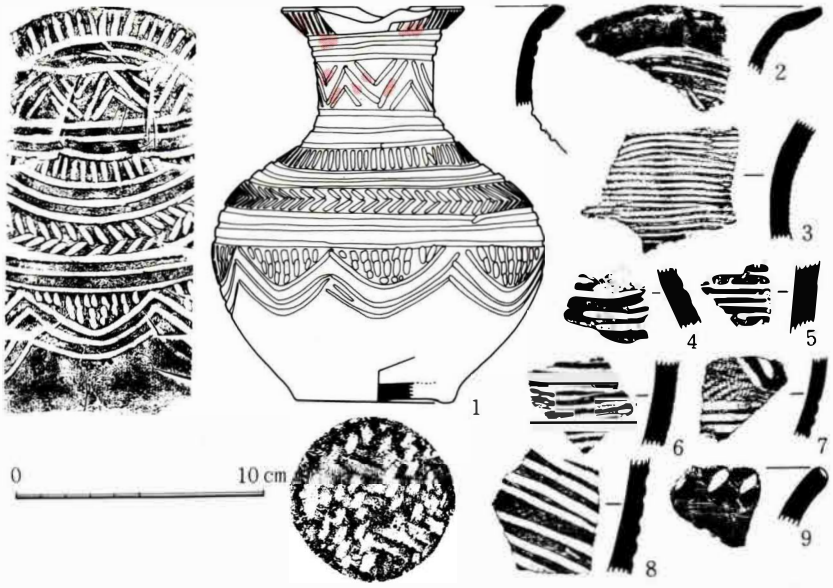


III-109　9号木棺墓実測図



III-110　9号木棺墓

この墓壙上面にも炭化物が散在していた。形態は隅丸長方形を呈し、長軸方向はN 78°Eになる。規模は、長軸1.92 m・短軸0.96 m・東壁は深く35 cmを測る。木棺部の長軸は1.4 mになり、幅50 cm前後になるものと思われる。人骨は1体で、頭部を東に据える屈肢葬である。胸部から壺が、また図示しなかったが足元に浅鉢が副葬される。



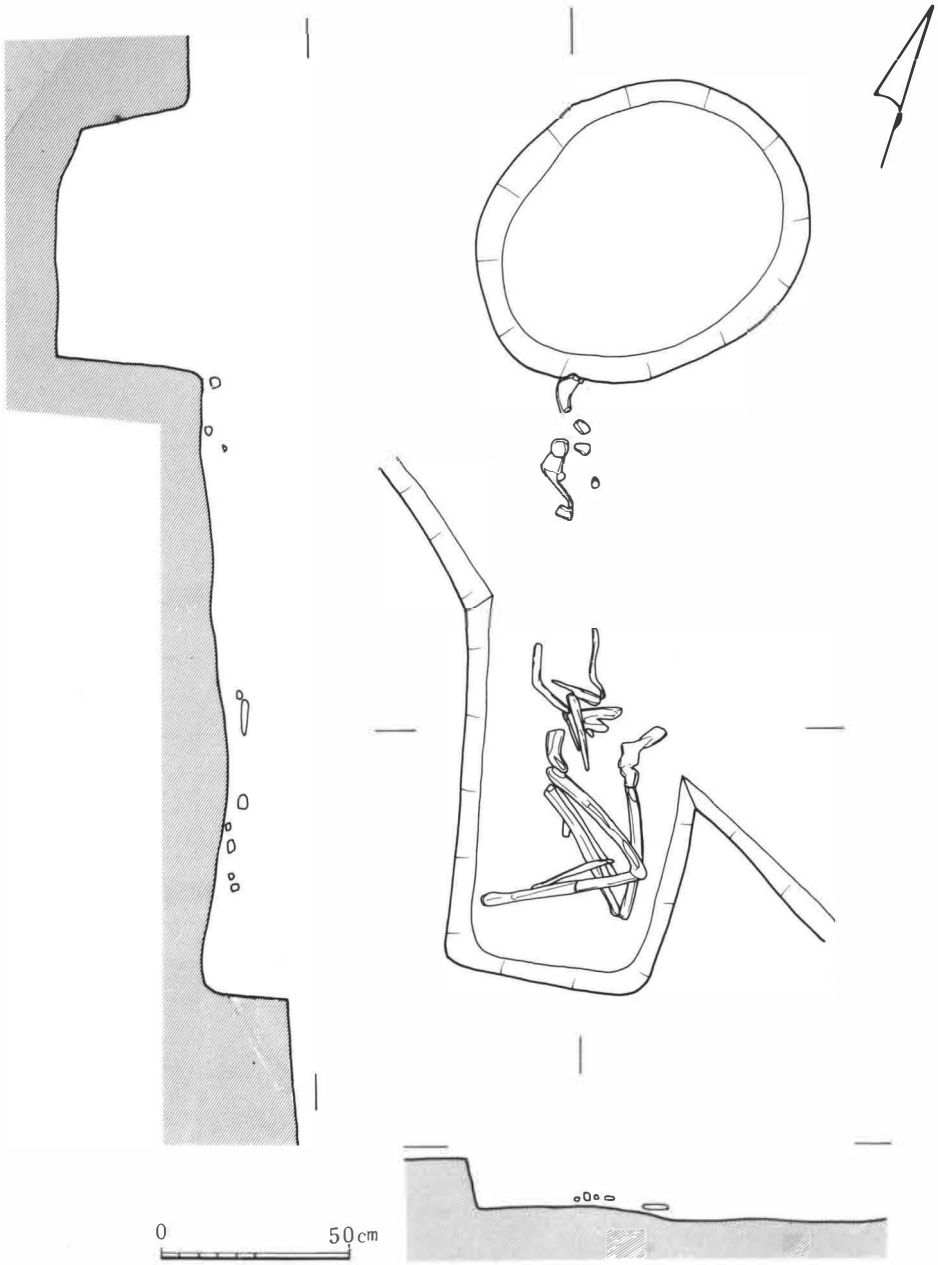
III-111　9号木棺墓出土土器

1は口縁部の一部が欠損する他は完形である。文様は棒状工具により描かれ、基本的には平行沈線文と波状文で区画した中を5単位の山形文・短線文・羽状文・刺突文で埋める。体部の波状文は7区画である。茶褐色から黒褐色を呈し、胎土に石英粒が目立つ。頸部より上に赤色顔料が付着する。底部は上げ底で網代痕が残る。他は覆土中から出土したもので、櫛歯状工具を使用したものに2～6が、棒状工具で施文されたものに1・7～9がある。7は縄文を地文とする。

III-112　10号木棺墓

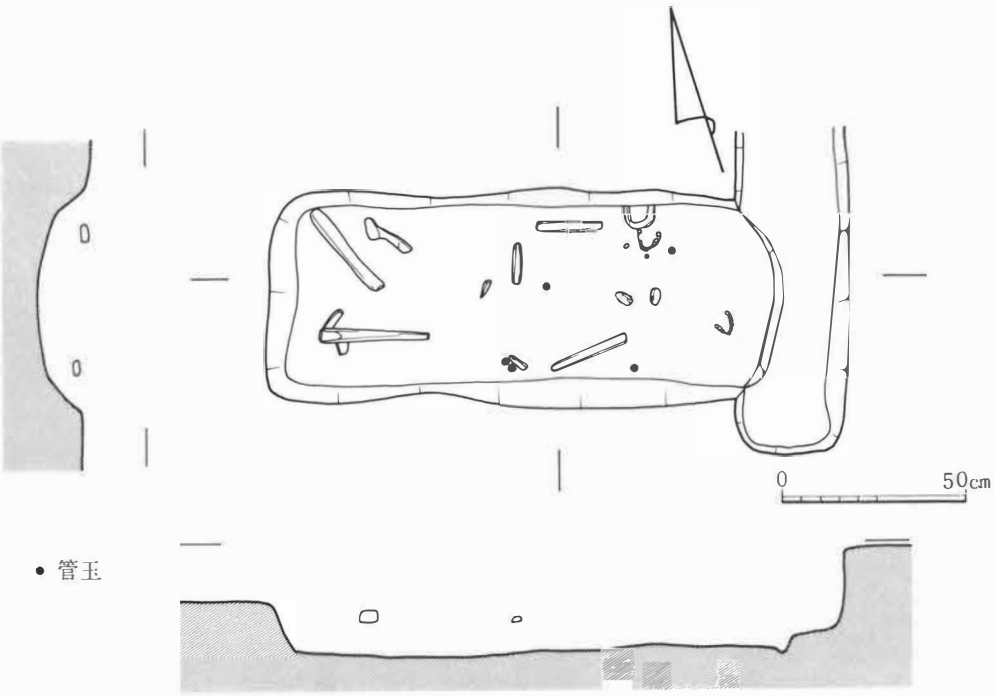
III-113　10号木棺墓出土土器

この墓壙からの副葬品の出土はなかった。また墓壙も浅かったため、出土量は少量で、それも小破片にすぎない。1～6は壺または甕の体部片で、施文具は櫛歯状工具によるもので、1～3には平行線文が、4～6には斜行条線文がみられる。1・3・6には胎土に黄雲母を、他はそれに微石英粒が混入している。色調は暗褐色から黒褐色を呈し、焼成は良い。

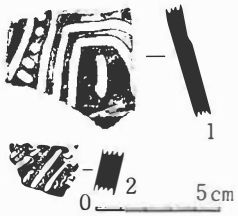


III-114　10号木棺墓実測図

138号住居址の床面を検出中発見された墓壙である。また北半分は、136号住居址により破壊され、更に北端は円形ピットにより切られる。そのため木棺部だけ残った遺構と考えられる。形態は長方形を呈し、長軸方向はN 10°W前後を指すものと考えられる。長軸は人骨の散在状態から1.6 mを、短軸0.62 mを測る。深さは西壁と、南壁で22 cmになる。底面は平坦であるが、北側へ低くなる。また南壁下の凹みは双口痕と考えられる。人骨は1体分で、屈肢葬である。脚部はきれいに残存するものの、頭部付近は136号住居址により攪乱を受け散在状態になる。



III-115　18号木棺墓実測図

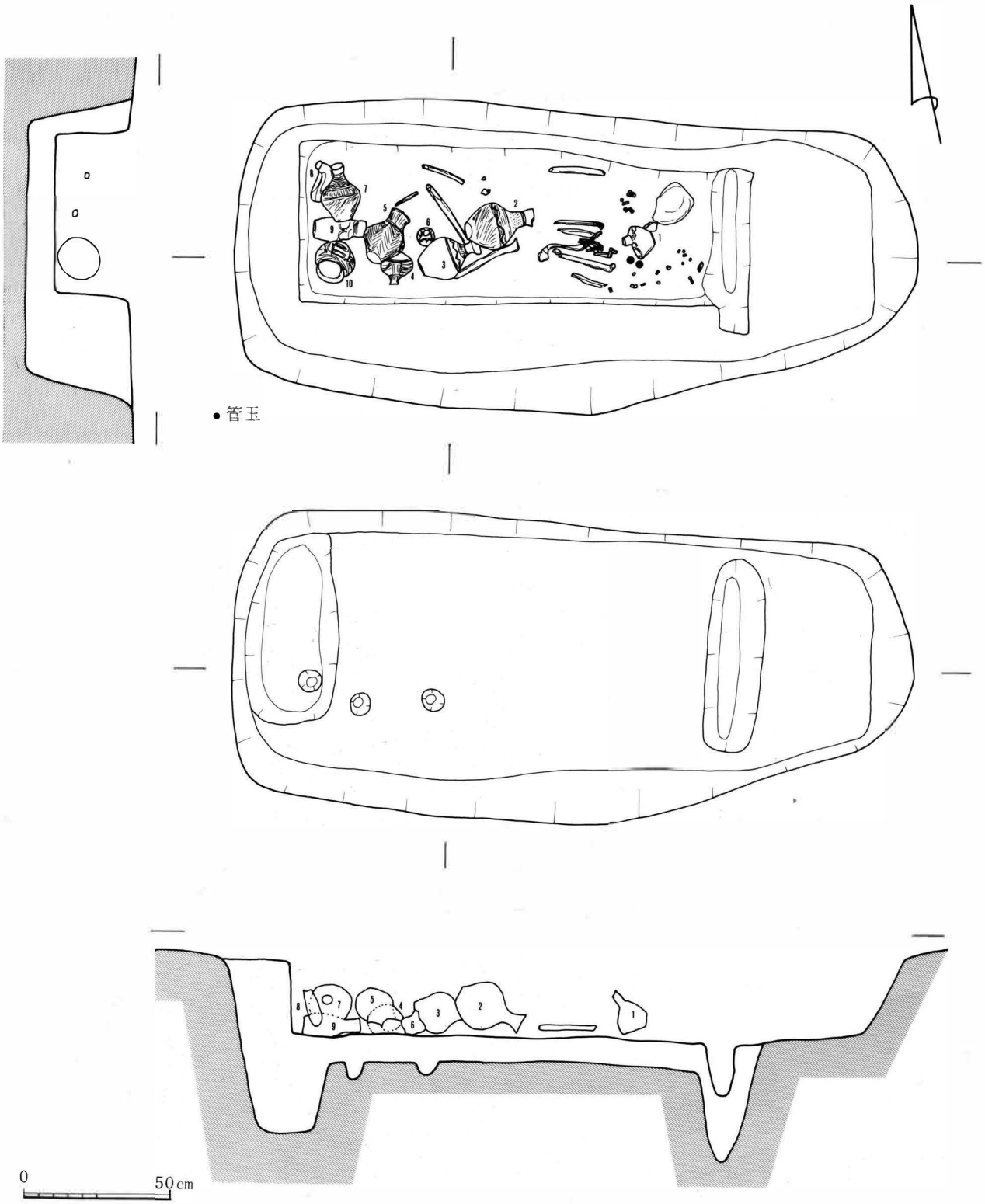


III-116　18号木棺墓
出土土器

1は棒状工具によるコの字文重ね風の区画文・刺突文様になる。この他碧玉製管玉（III－166－22～25）が出土し、また蛇紋岩製の小形片刃石斧（同－42）も出土している。

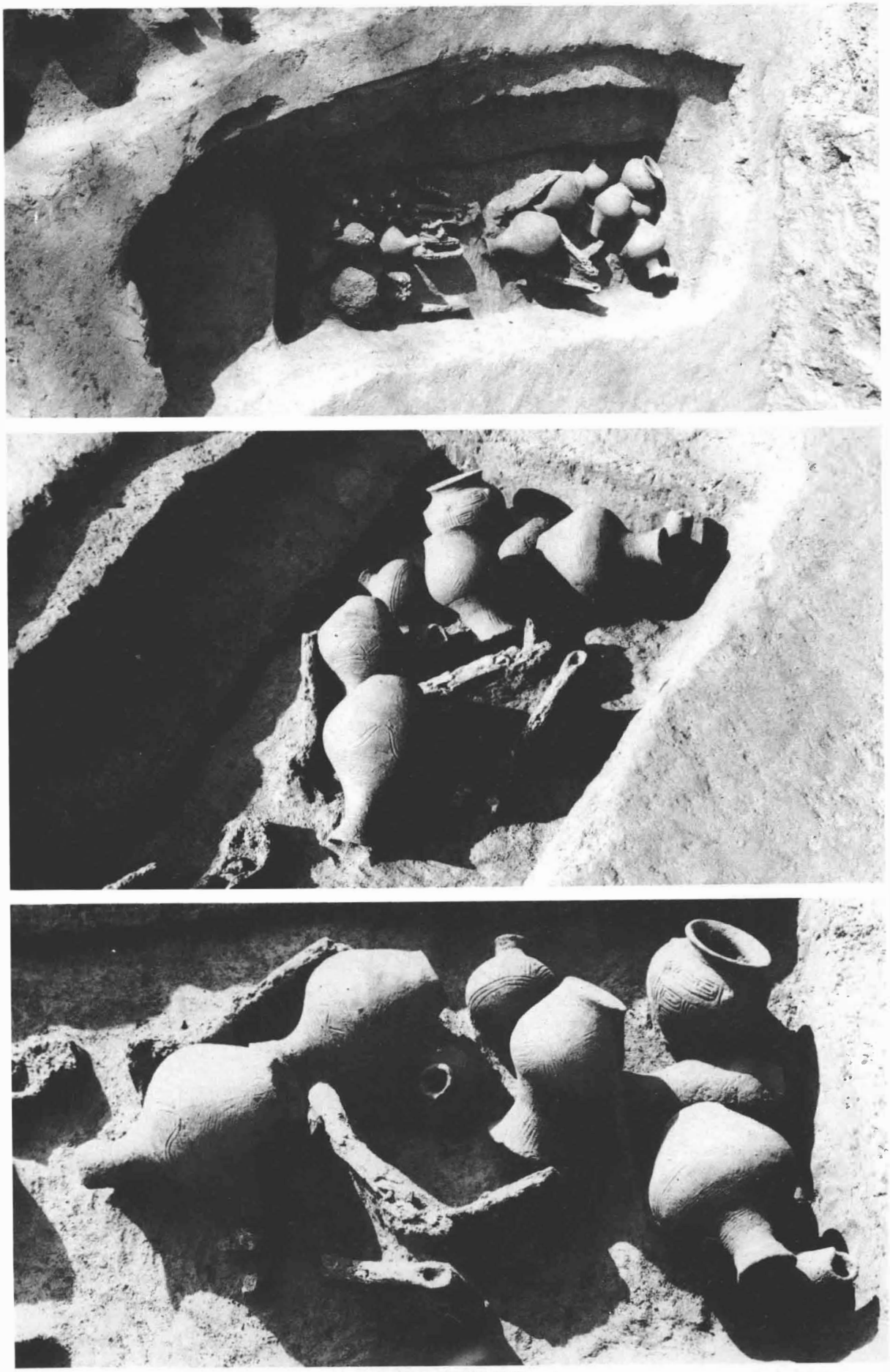
III-117　18号木棺墓、ホ号溝址

136号住居址をはさんで単独で発見された木棺墓で、東壁はホ号溝址に、西側半分は102号住居址により切られる。確認した遺構は、長方形を呈する木棺部と推定される。長軸方向はN 72°Wを指し、検出面での規模は長軸1.36m・短軸0.58m・南北壁の深さ27cmを測る。東壁に深さ2cmの木口痕が確認されるが、西側にはない。頭を東に据えた屈肢葬であるが、人骨及び管玉の散在と、人骨が底面より8cmも浮いているのは、何を意味しているのであろうか。床面は東が高く、西側は低くなる。東西の底面は舟底状になる。



III-118　21号木棺墓実測図

実測図の上は木棺部の検出状態を、中は更に黄褐色砂混り粘質土を掘り下げた最低面で、下はその断面図である。墓壙の形態は不整隅丸方形で、その長軸方向はN 77°Wになる。長軸2.33 m・短軸1.02 mを測り、深さは東で26 cm・西で35 cm・北で35 cm・南で37 cmになる。木棺部は長方形で、長軸1.46 m・短軸0.53 m・深さ25 cmを測る。木口痕の深さは西で22 cm・東で40 cmを測る。埋葬は頭を東にする屈肢葬で、胸部に異形土器が、脚部に9個の壺形土器が副葬されている。出土状態は8が正位のほか他は横転していた。

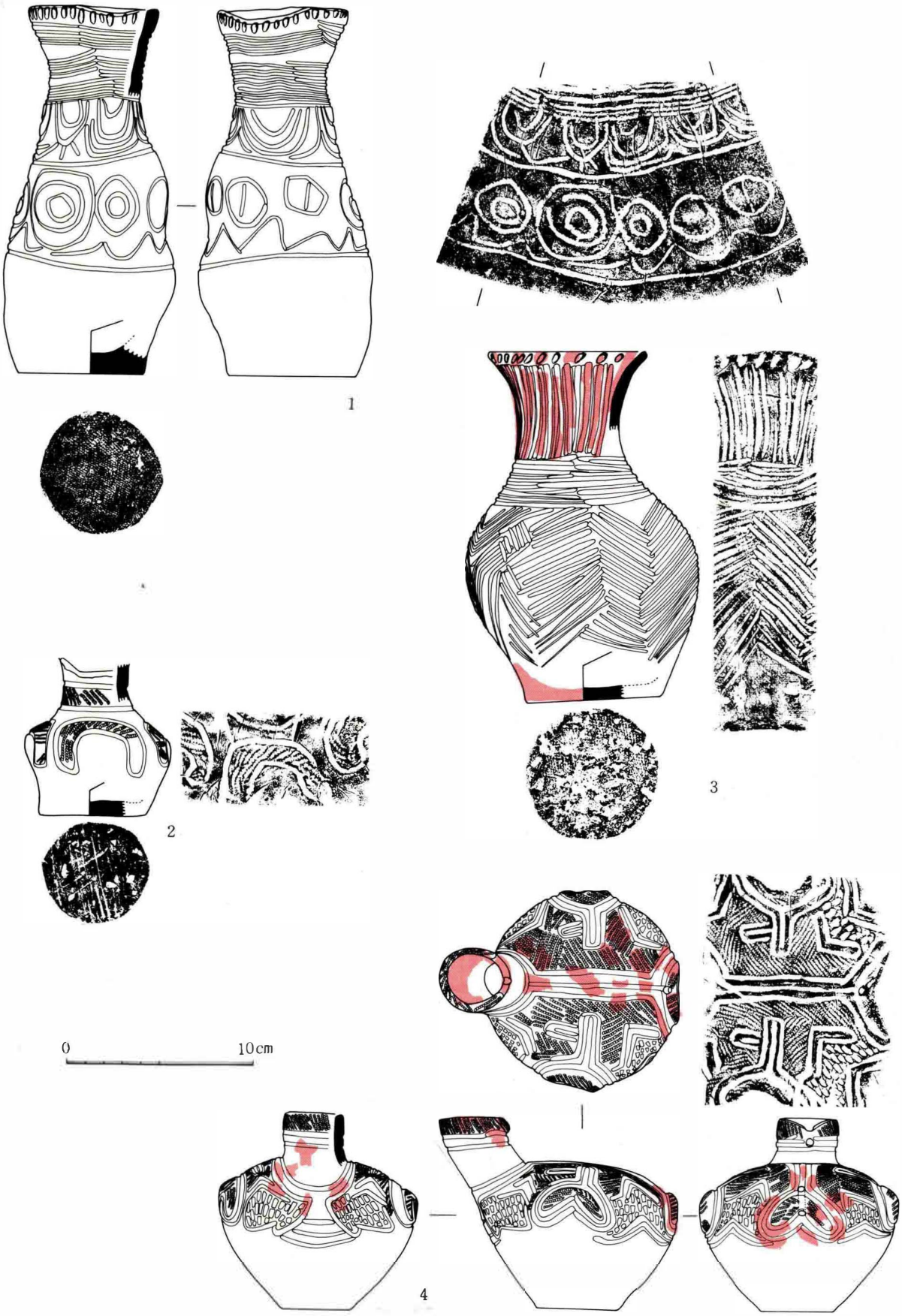


Ⅲ-119　21号木棺墓

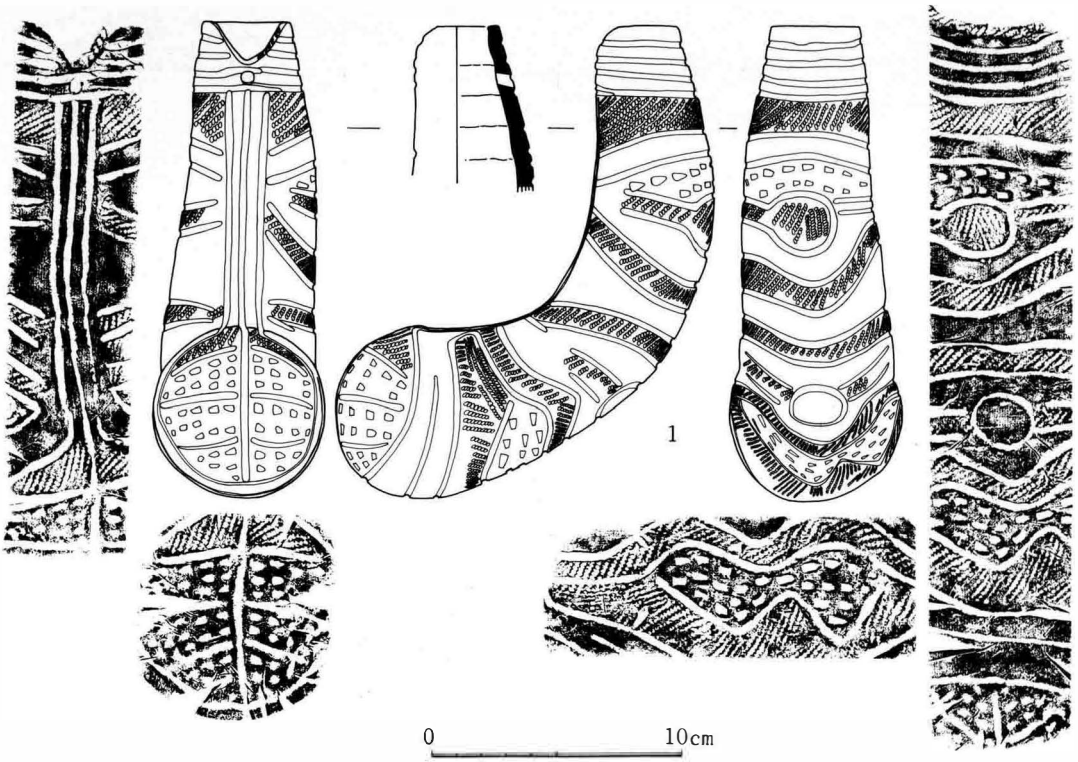
図示番品－出土番号－口径cm－器高cm－底径cm　1－NO 3－6.8－21.0－6.2、2－NO 2－7.6－23.4－6.8、3－NO 7－6.1－19.8－6.4、4－NO 4－4.8－11.0－2.7、5－NO 10－9.9－13.4－4.7

III-120　21号木棺墓出土土器(1)

図示番号－出土番号－口径cm－器高cm－底径cm　1－NO 9－6.9－19.4－6.7、2－NO 6－？－（8.4）－5.6、3－NO 5－8.4－18.4－7.1、4－NO 1－3.8－10.4－4.3－全長 12.7、III－122－NO 8－3.6－18.8－最大 6.8



III-121　21号木棺墓出土土器(2)



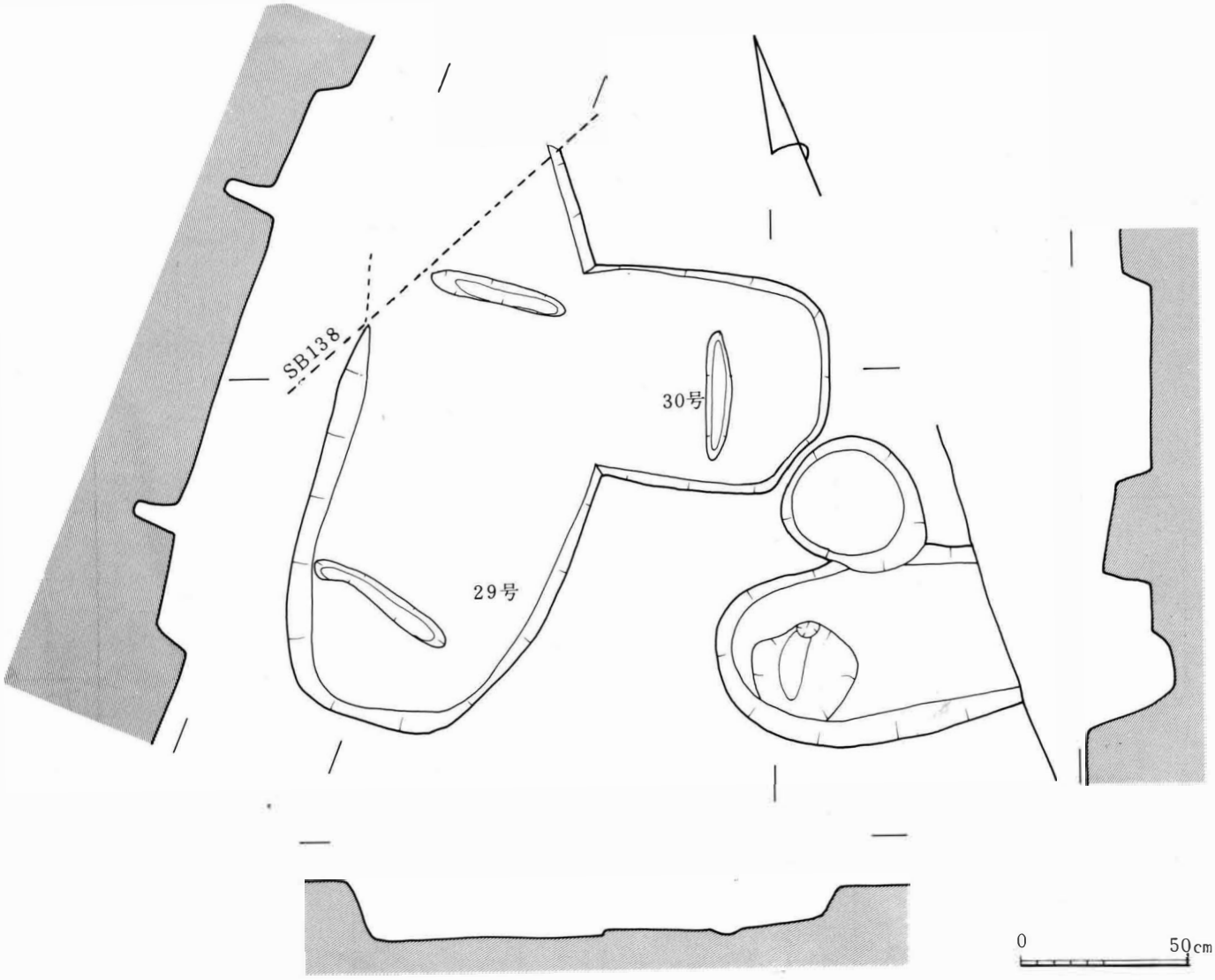
III-122　21号木棺墓出土土器（3）

III－120－1は黄褐色から暗褐色を呈し、胎土に石英粒を含み、焼成は良い。外面はタテヘラミガキ、内面はヨコナデ整形されるが、成形痕が残る。口唇部・口縁部内外面に赤色顔料が付着する。施文具は縄文のほか、棒状工具が用いられ、施文方向は左廻りである。2は淡黄褐色から茶褐色を呈し、胎土に白色凝灰岩粒を含む。外面はヘラミガキ後に施文され、内面はヨコナデ整形である。体部の山形状文は7波である。口縁部2ケ所（点線部）が欠損する。施文は縄文のほか、棒状工具による平行線文・列点文、体部下半は櫛歯状工具が用いられる。3は淡黄褐色から暗褐色を呈し、胎土に白色凝灰岩粒を含む。肩部の山形文は8波になる。口縁部内外面と頸部の外面に赤色顔料が付着する。施文具は縄文のほか、ハケ様の櫛歯状工具を使用している。4は黄褐色から淡黄褐色を呈し、胎土に白色凝灰岩粒を含む。体部の半同心円文とコの字重ね文風の組み合せは3単位である。底部はヘラナデ仕上げで、施文は縄文と棒状工具による。5は黄褐色から黒褐色を呈し、焼成は良好である。文様は縄文と棒状工具による5単位の区画文になる。外面はヘラミガキされ光沢を帯びる。内面はナデ整形である。口縁部に2孔一対の円孔がうがたれる。

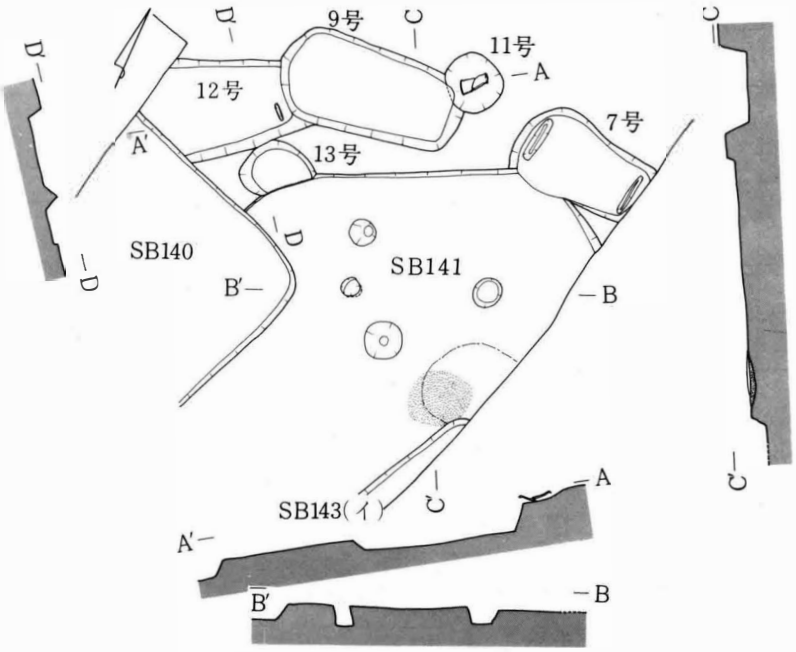
III－121－1は異形の壺形土器で、黄褐色から黒褐色を呈する。胎土に石英粒・黄雲母粒を多く含む。頸部は櫛歯状工具による平行線文の他は棒状工具による。外面整形はヘラナデ、内面はナデで一部に成形痕を残す。2は口縁部を欠損する小形の壺形土器で、体部の文様は4単位構成になり肩が張る。暗褐色から黒褐色を呈し、胎土に小砂粒を含む。底面はヘラナデ整形であるが糸痕を残す。外面の整形はヘラミガキである。3は淡黄褐色を呈し、胎土に白色凝灰岩粒を混入する。焼成は良好である。文様は4～6本の櫛歯状工具による条痕文様になる。外面はヘラミガキ、内面はナデ整形である。4は異形壺形土器で、形態から鳥と推察する。淡黄褐色から黒褐色を呈し、白色凝灰岩粒を含み、焼成は良好である。文様は磨消縄文と棒状工具による沈線文で区画される。口縁部に1孔がうがたれ、尻部の尾部に1孔が貫通する。外面無文部は、ていねいにヘラミガキが施される。底部整形はヘラ状工具による。

III－122－1は異形の土器で、瓢箪か皮袋又は男根等を模したものと推察される。黄褐色から暗褐色を呈し、胎土に黄雲母粒が目立つ。文様は横帯文で、棒状工具による沈線文と刺突文・縄文の組み合せになる。無文帯はていねいなヘラミガキである。口縁部に1孔がある。

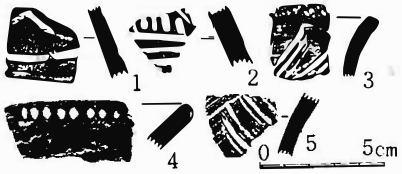
このほか頸部付近より管玉(III－166－27･28)が出土している。27は碧玉製、28は緑色凝灰岩製である。円孔は両端からうがたれる。



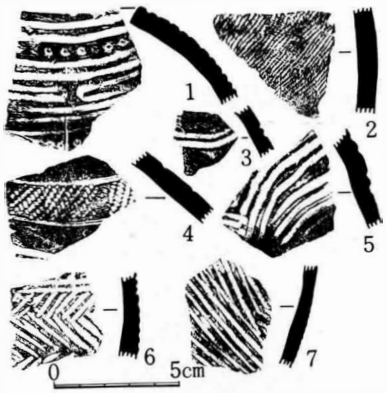
III-123　29号・30号木棺墓実測図



III-124　11号・12号・13号墓壙実測図（1：80）



III-125　12号木棺墓出土土器



III-126　31号木棺墓出土土器

11号墓壙　径60㎝・深さ10㎝程の不整円形になり、底面に赤色顔料が残る。平安時代の合口の甕棺墓である。

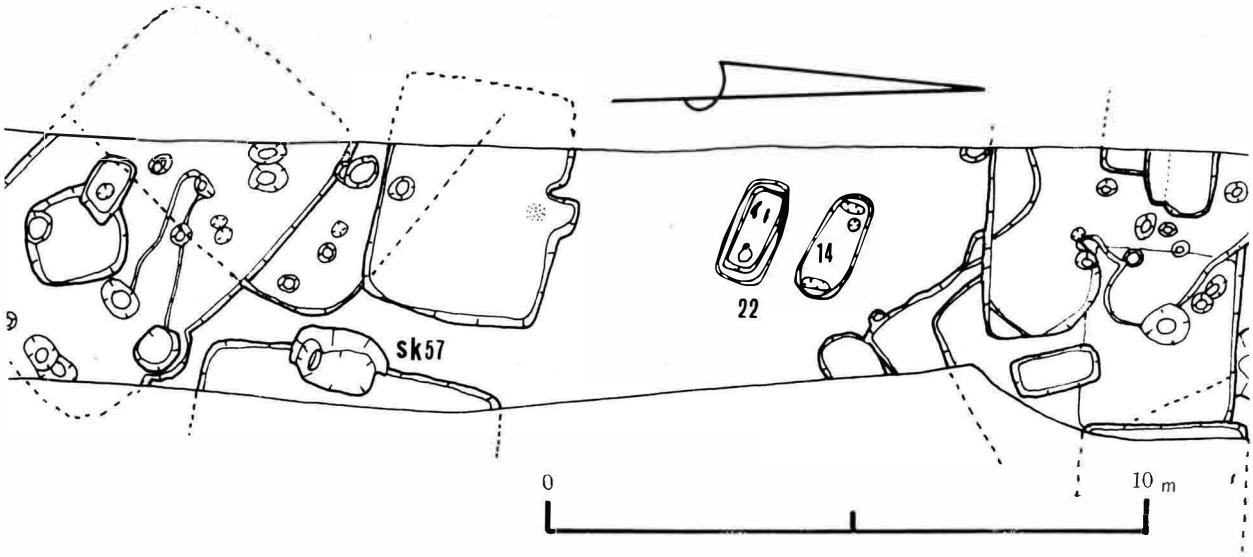
13号墓壙　隅丸方形状を呈し、南北幅56㎝を測り、東西は不明である。底面に赤色顔料が残る。時期不明。

12号木棺墓　形態は不整楕円形を呈する。長軸方向はN 60°Wを指し、最大幅1.1 m・深さ16㎝を測る。出土遺物（III－125）は少なく5点のみである。1・2・4は棒状工具で、3は縄文と櫛歯状工具により施文される。

29号木棺墓　楕円形を呈し、N 43°W方向に長軸がある。長軸規模は不明であるが、短軸0.83 m・深さ13㎝を測る。木棺部の長軸は1 m前後になり、小口痕から幅40㎝を推定する。人骨・土器等は認められなかった。

30号木棺墓　隅丸長方形を呈し、長軸方向N 80°Wを指し、短軸0.65 m・深さ10㎝である。

31号木棺墓　6号を取り上げる際発見されたもので、規模等は不明である。出土土器（III－126）は7点である。



III-127　第Ⅳ墓拡群実測図

III-128　14号・22号木棺墓

第Ⅳ墓壙群　この群では2基の木棺墓を検出したにすぎない。この2基とも東西方向に長軸をとり、並列して検出された。墓壙群の広がりは、これより西側にあるものと考えられるが、今回の調査でそれを実証するものはない。